creative commons
COMMONS DEED

저작자표시 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.
- 이차적 저작물을 작성할 수 있습니다.
- 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:

저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 이용허락규약(Legal Code)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

Disclaimer

dCollection

[UCI]I804:21031-000002227903

文学博士 学位論文

数量を限定する副詞について

2016年　2月

釜慶大学校 大学院

日語日文学科

佐久間司郎

文学博士 学位論文

数量を限定する副詞について

指導教授　孫　東　周

本論文を文学博士学位論文として提出する。

2016年　2月

釜慶大学校 大学院

日語日文学科

佐久間司郎

佐久間司郎の文学博士学位論文を

認准する。

2016年　2月

主　審　文学博士　張 相 彦(印)

委　員　文学博士　權 奇 洙(印)

委　員　文学博士　全 成 燁(印)

委　員　文学博士　崔 建 植(印)

委　員　文学博士　孫 東 周(印)

目　次

第１章　序論……1

１．１　研究の目的……1

１．２　研究の構成……4

第２章　先行研究概観……5

２．１　副詞の３分類……6

２．１．１　陳述副詞……7

２．１．２　情態副詞……8

２．１．３　程度副詞……9

２．２　数量を限定する副詞……10

２．２．１　量的程度副詞……13

２．２．２　量の副詞……20

２．２．３　否定程度副詞……24

２．２．４　概略副詞……28

２．２．５　その他の語群 ……32
２．２．５．１　数量詞……33
２．２．５．２　全称数量詞 ……34
２．２．５．３　形式副詞 ……35
２．３　論点の設定 ……38
２．３．１　数量性……40
２．３．２　陳述性……43
２．３．３　名詞性……43

第３章　量的程度副詞…… **47**

３．１　数量性 ……48
３．１．１　主体・対象の数量……49
３．１．２　動きの量……52
３．２　陳述性 ……55
３．２．１　肯定文・平叙文 ……55
３．２．２　聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式
との共起・非共起 ……57

３．２．２．１　数量性大の量的程度副詞の主観性 ……57
３．２．２．２　数量性小の量的程度副詞の客観性 ……62
３．３　名詞性 ……64
３．３．１　「ハ」の後接 ……65
３．３．２　「ノ」の後接 ……66
３．３．３　被修飾 ……69
３．３．４　名詞性の高低の異なり ……70
３．４　まとめ ……71

第４章　量の副詞 …… **73**

４．１　数量性 ……74
４．１．１　主体・対象の数量 ……74
４．１．２　動きの量 ……77
４．１．２．１　「イッパイ」「タクサン」 ……78
４．１．２．２　「タップリ」「ドッサリ」 ……81
４．２　陳述性 ……85
４．２．１　聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式

との共起……85
４．２．２　評価性と情態修飾性……87
４．２．３　量の副詞の客観性……90
４．３　名詞性……92
４．３．１　「ハ」の後接……93
４．３．２　「ノ」の後接……95
４．３．２．１　二つの用法……95
４．３．２．２　述語としての働き……98
４．３．３　被修飾……101
４．３．４　名詞性の高低の異なり……102
４．４　まとめ……103

第５章　否定程度副詞……104

５．１　数量性……104
５．１．１　主体・対象の数量……105
５．１．２　動きの量……107
５．１．３　不完全否定の語と完全否定の語の働きの違い……108

５．１．４　数量を限定する力の強弱……113
５．２　陳述性……116
５．２．１　聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との非共起……117
５．２．２　「アマリ」の二つの用法……119
５．２．３　完全否定と不完全否定の客観性の違い……122
５．３　名詞性……126
５．３．１　「ハ」の後接……126
５．３．２　「ノ」の後接……127
５．３．３　被修飾……130
５．３．４　低い名詞性……131
５．４　まとめ……131

第６章　概略副詞……133

６．１　数量性……136
６．１．１　主体・対象の数量……136
６．１．２　動きの量……137

６．１．３　表現性の違い……138
６．１．３．１　基準値の必要性……139
６．１．３．２　基準値の異なり……142
６．１．３．３　表現性の違い……143
６．１．３．４　全称数量詞……146
６．１．３．５　数量の割合を表す語群と数量の多寡を表す語群…148
６．２　陳述性……149
６．２．１　肯定文脈での使用……149
６．２．２　聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式
との非共起……151
６．２．３　全称数量詞と量の副詞との対応……152
６．３　名詞性……154
６．３．１　「ハ」の後接……154
６．３．２　「ノ」の後接……156
６．３．３　被修飾……157
６．３．４　高い名詞性……158
６．４　まとめ……159

第７章　数量を限定する副詞 …… 161

７．１　数量を限定する副詞の機能的棲み分け …… 161

７．１．１　否定程度副詞と量的程度副詞(大) …… 162

７．１．２　量的程度副詞(大)と量の副詞 …… 164

７．１．３　量的程度副詞(大)と概略副詞 …… 166

７．１．４　量の副詞と全称数量詞 …… 168

７．１．５　概略副詞と全称数量詞 …… 170

７．１．６　量的程度副詞(小) …… 172

７．１．７　全体像 …… 173

７．２　数量を限定する副詞の名詞性 …… 177

７．２．１　名詞性の高低 …… 177

７．２．２　名詞性と副詞性 …… 178

７．２．３　名詞性の高低による説明 …… 180

７．２．４　「ドッサリ」の解釈 …… 184

７．３　おわりに …… 185

参考文献 …… 186

A study of adverb to modify the quantity

SAKUMA Shiro

Department of Language and Literature of Japanese,

The Graduate School,

Pukyong National University

Abstract

This study focused on function of the limited quantity of the adverb did not receive attention until now. It was a demonstration to the detailed role.

First, with reference to the classification of past research was divided into four adverb to modify the quantity to “ryo-teki teido fukushi”, ‘hite-teido fukushi”, “gairyaku fukushi”.

The words belonging to each group was reviewed having any character.

Especially It was reviewed in aspects to features of quantity, representation, Noun that the difference between expected from each group terms

“Adverb to modify the quantity” were investigated based on the results obtained from the particulars. And give the two significant conclusions

- “Adverb to modify the quantity” can be classified into a functional “positive-negative”, “expression”, “representation” of three terms”
- Functional classification based on features of noun that each adverb that have. In the perspective of features of noun, It may describe the system to adverb to modify the quantity.

第１章　序論

１．１　研究の目的

副詞はかつて「品詞のはきだめ」と言われ、研究が進んでいない領域の代表であった。しかし、現在では活発な議論がなされ統語的な特徴の解明が進み、体系的な整理もだいぶなされてきた。

その一方で、副詞の中でも手つかずと言える部分が存在することも否定できない。その一つが本研究で論じようとする数量限定機能を持った副詞である。

数量を限定する機能を持つ語群の代表格といえば「数詞＋類別詞」―ここには「㎞」や「ℓ」等の数量単位も含まれる―という構成を持った、いわゆる数量詞がまずあげられるだろう。

この数量詞は比較的研究や体系的整理が進んでいる語群である。研究が「手つかず」であるのはそういった数量詞ではなく、相対的な数量を限定する機能を持った副詞の方である。例えば(１)(２)の例である。

（１）【イッパイ／カナリ／スコシ／タクサン／ダイタイ／ホトンド】飲ンダ。[1]

[1] 本研究で引用する用例は、特に断りがない限り国立国語研究所の「KOTONOHA　現代日本語書き言葉均衡コーパス」からのものである。ただし、このコーパスにはインターネット上の文も含まれているが、これは特別な場合を除いて用例の対象に含めないことにする。
またカタカナ表記の用例は著者による作例とする。

（2）【アマリ／スコシモ／ゼンゼン／タイシテ】飲マナカッタ。

（1）（2）の【　】内にある副詞はすべて「飲ンダ」数量を限定していると見ることができる。しかしこの【　】内にある語をよく見てみると、すべてが数量的な内容を表しているのは確かだとしても、その性格は一様でないことが推察される。

例えば、（1）にあげた語のうち、「イッパイ」「タクサン」[2]は「量の副詞」、「カナリ」「スコシ」は「程度副詞」、「ダイタイ」「ホトンド」は「概略副詞」に分類されるものである。そして（2）の語は「否定程度副詞」に分類されるものである―これらの語群については次章で詳しく述べる―。つまり機能を細分化すると違うカテゴリーに分類されるものだということである。

そういった細かい話をしなくても、（1）は肯定文脈、（2）は否定文脈で用いられており、その性格の違いはすぐさま了解されることだろう。また、同じ肯定文脈で用いられているとしても「タクサン飲ンダ」と「ホトンド飲ンダ」ではそれぞれの副詞が限定している数量性が異なることも直感的に了解される。

このように数量を限定する副詞には様々なものがあり、それぞれ違った性質を有する

その他からの引用については出典を逐一記すことにする。中には原文がカタカナとなっている用例もあるが、もちろんこれは原文の表記をそのまま記載する。カタカナで提示されている用例に関しては、出典の明記があるものはそこからの引用であり、ないものは著者による作例である。複数の用例を引用し、かつその引用元が同じ場合は、もっとも下に位置する用例の横に出典を記す。

[2] 本研究では表記の揺れをカタカナ表記で代表させることにする。例えば「タクサン」には「沢山」「たくさん」「タクサン」として現れるものを含むものとする。もちろん引用の場合には原文と同じ表記で表す。

ことは少し例をあげただけでも了解されるが、そのようなことについて深く触れられている研究はほとんどないというのが実情である。

もちろん、(1)(2)で【　】内にあげたような語を扱っている研究がないというわけではない。例えば、「カナリ」や「スコシ」などはいわゆる程度副詞に属するとしたが、程度副詞はある程度研究の進んでいる分野の一つである。しかし、その研究というのも程度副詞の持つ程度限定機能について着目して論じられたものが多く、数量限定という機能を中心に言及されているものは数えるほどしかない。

また、その「数えるほどしかない」研究というのもその研究対象は程度副詞という小さいカテゴリーの中だけに限定されており、それぞれの語群の垣根を越えた研究というのは管見では見当たらない。要するに、副詞を数量限定といった視点から捉えた研究というのがこれまであまりなかったということである。

そういった背景のもと、本研究が目的とするのは上記したような数量を限定する副詞がどのようなものなのか、どういった統語的特徴があるのか、どういった意味を有するのかを考えることである。そしてその過程で得られた個々の語群の性質を踏まえた上で、それぞれの副詞がどのような関係にあるのか、副詞や日本語の体系の中でどのように位置づけをされ、どのような役割分担を持つものなのか、またそれはどのような要素に影響を受けているものなのか、そういったことを考えていくことを目的とする。

１．２　研究の構成

本研究は全部で７章の構成をとり、１．１で述べた研究の目的を達成していきたい。

まず、本章に続く第２章では本論に入る前段階として、この研究で論じようとする語群や周辺の語群、その他諸々の関連する項目の過去の研究を概観する。また、用語の整理についてもここで行なう。このような過程を通して本研究の方向性を明確化する。

第３章から第６章までは本研究で論じる対象となる数量を限定する４種類の副詞についての各論である。各章でそれぞれ「量的程度副詞」「量の副詞」「否定程度副詞」「概略副詞」を一つずつ取り上げ、そこに属する語がどのようなふるまいを見せるのか、どのような特徴を持つものなのか詳細に検討する。

そして最終章である第７章では、第３章から第６章までの語群ごとの各論において得られた結果をもとにして、数量を限定する副詞についての総合的な考察を行なう。ここで、この語群の機能的棲み分けや全体的な体系がどのような構造を有しているのかについての最終的な結論を述べる。

第２章　先行研究概観

具体的に論を展開するに先立ち、従来の副詞研究はどのように展開されてきたか、数量限定[3]とは一体どういうものであるか、どういった副詞が数量限定の機能を担っているのか、それぞれの副詞同士の関連性はどこまで明らかになっているのか、などについて確認した上で、本研究の論点を明確にしていくことにする。

---

[3]「限定」の類似表現として「修飾」という表現がある。実際、数量限定と近い意味で「量修飾」といった表現も使われることがある。限定と修飾とはどのような違いがあるのだろうか。

小松(1970)を参照してみるとここでは限定と修飾を、修飾する成分である「修飾成分」が修飾される成分である「被修飾成分」にかかるという機能的側面では同一カテゴリーに属しながらも、意味的には違った側面を持つものとして扱われている。

例えば「オイシイ水」「高橋家ノ賢イ長男」を例にとると、これらは両者ともに、下線部の部分はそれぞれ後接する「水」「長男」という名詞にかかっているわけだが、「オイシイ」が「水」の意味の外延を狭めているのに対して、「賢イ」の場合はそうではない。「高橋家ノ長男」にあたる人物は二人いるわけがなくすでに特定されており、そこに「賢イ」という修飾成分を持ってきても「長男」のさすところの意味はまったく狭まらない。ただしどちらの場合も下線部の語は機能的には後接する名詞にかかっている。こういうことを例に挙げつつ小松(1970)では前者のような場合を「限定」、後者のような場合を「修飾」と呼んだ。しかしこういった用語を用いてしまうと、「修飾」という文法カテゴリーの意味的側面を表す下位項目の用語としてまたしても「修飾」という語を用いなければならず混乱が生じかねない。

安井(1983)でも論のテーマは違えど小松(1970)で論じられていることとほぼ同じことが述べられている。しかし「修飾語というのは、それが付け加えられることによって、主要の適用範囲をその分だけ狭める働きをするものである」(p11)や、「修飾という意味現象の中核に、限定という語によって示される機能の存在していることを否定することはできない」(p15)などと述べられているように、「修飾」という文法現象の意味的側面を「限定」という機能が担っていると考えた。「高橋家ノ賢イ長男」の下線部なども広い意味では後接する名詞の意味の外延を狭めているのだと捉えたのである。つまり「修飾」と「限定」はそれぞれ同一の言語現象の機能的側面を表す用語と意味的側面を表す用語ということに使い分けたのである。

近年における修飾に関する研究、例えば井本(2002)、井本(2003)、加藤(2003)などでもそのような用語の使い分けがとられていることを鑑み、 本研究においても、修飾成分が被修飾成分にかかる「修飾」という文法現象のうちの意味的機能を「限定」と呼ぶということで定義づけておく。

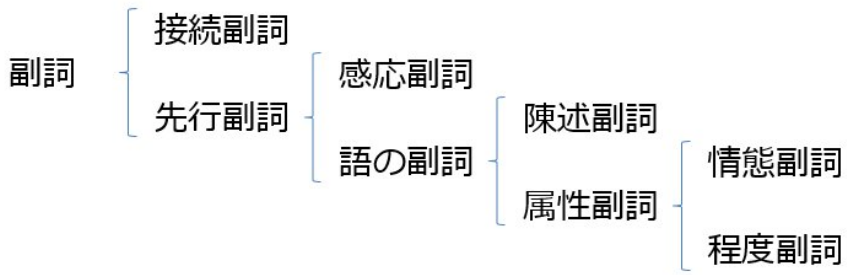
２．１　副詞の３分類

まず、副詞という語群について見ていこう。副詞の一般的な認識としては「用言にかかり活用をせず、動作の行なわれ方や状態のあり方を修飾するもの」といったところであろう。本研究における副詞もこの一般的な認識と同じである。もちろん詳しく見ていけば曖昧な部分も生じるだろうが、本研究の目的は副詞の定義について論じるものではないためこれについては深入りしない。副詞の一般的な分類についてだけ少し触れておくことにする。

副詞の分類というと山田(1908)による３分類があまりにも有名である。他にも副詞を分類しようとした試みはあるものの、この３分類が提示されてから100年以上経過した今でもこれが副詞分類の定説の一つとなっている。

そもそも山田(1908)においては、(１)で図示したように副詞を先行副詞と接続副詞に分け、更にその先行副詞を語の副詞と感応副詞に分け、更にその語の副詞を属性副詞と陳述副詞に分け、更に属性副詞を情態副詞と程度副詞に分けるというような構造になっている。しかし、現在我々が慣例として副詞と呼ぶものは陳述副詞、それと属性副詞の下位分類とされる情態副詞、程度副詞の３種であり、これを副詞の３分類として認識している。

（1）



この３つの語群がどのような性質を持つものなのか、工藤浩(2000)を援用しつつ簡単に説明する。

２．１．１　陳述副詞

陳述副詞は「否定・推量・仮定など、述語の陳述的な意味を、補足したり明確化したりする副詞であり、(中略)、一定の陳述的意味を担う形式と呼応して用いられる」(p172)。代表的なものとしては(２)などがある。

（2）　＜否定＞　カナラズシモ・ケッシテ・タイシテ・チットモ・メッタニ・ロクニ

＜推量＞　オソラク・キット・サゾ・タブン

＜否定推量＞　マサカ・ヨモヤ

＜依頼～願望＞　ドウカ・ドウゾ・ゼヒ

＜条件＞　イカニ・イクラ・カリニ・セッカク・タトエ・マンイチ・モシ

＜疑問＞　イッタイ・ドウシテ・ナゼ・ハタシテ

＜比況＞　アタカモ・サモ・マルデ

陳述副詞は、情態副詞や程度副詞と違って属性的な意味の面には関与せず、陳述的な側面にのみ関与している。

２．１．２　情態副詞

情態副詞は「動作や変化のしかた(様態)、あるいは出来事の付随的なありかた(状態)を表して、主として動詞を修飾する副詞である」(p166)とされている。ここに属する具体的な語例を(３)にあげる。

（３）＜様態・状態＞　タクサン・ノンビリ・ピッタリ・ユックリ

＜時＞　カツテ・シバラク・タチマチ・トツゼン・マダ・モウ

＜意志・態度＞　アエテ・オモワズ・ツイ・ワザト

＜関係＞　イッショニ・オノオノ・ソレゾレ・ミズカラ

(３)にあげたものはごく一部である。敢えてカテゴリー分けを行なうならこのようになるのだろうが、工藤浩(2000)も「まとまりはよくない」(p169)と評しているように、

語の性質もバラエティに富んでいて、なかなか整理が難しい語群の一つである。

陳述副詞や後述する程度副詞はその認定の基準が明確に存在する。しかし、この情態副詞は陳述副詞、程度副詞の範囲に収まらないものをすべて含んでいる。副詞が「品詞のはきだめ」と呼ばれていることは前述したが、この情態副詞がその「はきだめ」感を代表していると言える。

２．１．３　程度副詞

程度副詞は「状態性の意味をもつ語にかかって、その程度を限定する副詞である。結びつく相手すなわち状態性の意味をもつ語は、品詞としてはいろいろなものにまたがる」(p170)と説明されている。基本的には形容詞や形容動詞と結びつくのであるが、その他情態副詞や連体詞、状態性の動詞、相対名詞[4]などと共起する場合もあり、また動作性の動詞と結びついた場合はその動作の数量を表すこともある。具体的には(４)などがある。

（４） カナリ　サラニ　ズイブン　スコシ　チョット　トテモ　ヒジョウニ　モット　モットモ

[4] 寺村(1968)によると、名詞の中には「時間的・空間的な相対的位置関係」を表すものがかなり多くあるとされ、その典型として「前、後、中、右、左、上、下」といった語が挙げられている(p14)。「相対名詞」とはそのような名詞を指す。

（4）にあげた「サラニ」「モット」「モットモ」などのように常に何らかの基準との比較を表す語もこの程度副詞に含まれる。

また、この程度副詞の特性としては陳述的には無標の形式と共起することがあげられる。工藤浩(1983)の言葉を借りると「陳述的には肯定の平叙の文に用いられるものである」(p177)ということである。

２．２　数量を限定する副詞

以上、副詞の一般的な分類である３つの語群の概要について簡単に見た。本研究で分析・考察の対象とした数量限定を行なう副詞もこの副詞の３分類のどれかにあてはまる。

ここではその数量を限定する語群の詳細について述べるのであるが、その前に根本的に数量限定とは一体何か、という点について合意を得ておこう。

数量限定とは、ある修飾関係において修飾成分が被修飾成分の持つ数量的な意味の外延を狭めたり明確にする働きを行なうことである。（５）～（７）は典型的な数量限定の例である。

（５）　リンゴヲ３ツ食ベタ。

（６）　子供ガ２人寝テイタ。

（７）　牛乳ヲ200㎖飲ンダ。

（5）は「３ツ」という数量詞が「食ベタリンゴ」の数量を、（6）では「２人」という数量詞が「寝テイタ子供」の数量を、（7）では「200mℓ」が「飲ンダ牛乳」の数量を限定している。この時「３ツ」「２人」「200mℓ」がそれぞれの文において「数量を限定している」「数量を表している」などと表現される。

また、数量限定の範囲は（5）～（7）のような、一般に考えられる「数」や「量」に留まらない。（8）～(10)の例である。

（8） 30km歩イタ

（9） １週間待ッタ

(10) ５回行ッタコトガアル

（8）は「30km」が「歩イタ」量＝距離を、（9）は「１週間」が「待ッタ」量＝時間量を、(10)では「行ッタコトガアル」数＝度数を限定しているわけだが、こういった距離や時間量、度数などといったものも数量限定における数量に含まれるとするのが一般的である。

つまり述語動詞と共起して、その文における数量的側面を限定しているすべてのものを数量限定として認めるわけである。だから、数量限定で限定されるべき事象に関してはすべて潜在的に数量詞で限定することが可能である。

ここまで（5）～(10)においてはすべてその例示として数量詞を用いたが、この下線部

に組み込まれた場合に数量を限定していると考えられる成分に関しては、数量限定を行なう成分と認められることになる。

簡単な例で言うと(５)～(10)の下線部―つまり数量詞で表された部分―を「タクサン」や「カナリ」に入れ替えても、「タクサン」「カナリ」が数量的側面を限定しているため数量限定は成立する。(５)'～(10)'である。

(５)'リンゴヲタクサン食ベタ。

(６)'子供ガタクサン寝テイタ。

(７)'牛乳ヲタクサン飲ンダ。

(８)'カナリ歩イタ

(９)'カナリ待ッタ

(10)'カナリ行ッタコトガアル

つまり「タクサン」「カナリ」に入れ替えられた(５)'～(10)'において、「タクサン」「カナリ」は「数量限定を行なっている」とか「数量を限定している」などと言うことができる。

そしてその数量限定を行なう副詞[5]というのが本研究で研究対象とする「量的程度副詞」「量の副詞」「否定程度副詞」「概略副詞」である。

以下これらの副詞について過去の研究を参照しながら詳しく解説する。

[5] 加藤(1997)ではこういった語を「不特定数量詞」と呼び、「これまでの日本語の数量詞研究でもあまり光を当てられなかった領域」(p33)としている。

２．２．１　量的程度副詞

程度副詞は２．１．３で確認したように基本的には形容詞や形容動詞と共起し、その程度性を限定する。つまり程度限定[6]を行なうのが主たる機能である。

しかし、その中には程度限定にも用いられると共に、数量限定にも用いられる「量的程度副詞」という下位分類的語群が存在する。

程度副詞の中に数量を限定する機能のあるものとないものがあることは古くから指摘されてきたが、その多くが単なる指摘に留まっており、この量的程度副詞を中心に据えた議論というのはなかなか見つからない。しかし、「指摘」に留まっていても過去の研究が示唆する部分は小さくない。後述するようにこの量的程度副詞は本研究において中核をなす語群である。過去の研究を参照し、この語群の特徴を整理しておく。

工藤浩(1983)は程度副詞に関する論文であり、現代の程度副詞研究において礎とされている研究である。この中で程度副詞の数量限定機能について述べられているところは二ヶ所ある。

一点目。まず工藤浩(1983)は程度の概念と数量の概念の近似性について説明している。「程度とは状態の量だという面もあり、両者の交渉は当然ある。じっさい程度副詞の中には、「ごはんを＿＿＿食べた」のような量副詞の用法に立つものが、すこし　ちょっ

[6] 程度限定とは、ある修飾関係において修飾成分が被修飾成分の程度的意味を限定することである。「コノ本ハトテモ面白イ」は「本のおもしろさの程度」が「チョット」でもなく「モノスゴク」でもなく、「トテモ」であると意味的に限定している。

と　多少　少々　／　かなり　大分　随分　／　もっと　など、少なからず存在する」(p179)と述べている。ここでいう「量副詞の用法」というのは本研究でいうところの数量限定機能と同じである。要するにここでは一部の程度副詞に数量限定機能があることを指摘している。

二点目。程度副詞が肯定・平叙の文脈で用いられることは既に述べた。程度副詞が命令文などで用いられることは基本的にはない。しかし工藤浩(1983)は、同じ程度副詞を用いて「ごはんをかなり食べろ」「ごはんを相当食べろ」が言えないにも関わらず、「ごはんをすこし食べろ」「ごはんをもっと食べろ」が言えるという点に着目し,「「かなり・相当」等の量副詞的用法は、このように「すこし・もっと」にくらべて不徹底なものである」(p194)ということを指摘している。つまり、同じ程度副詞に属する語でも数量限定機能は一様ではなく、語ごとに違いがあることを示唆している。

以上二点が工藤浩(1983)において程度副詞の数量限定について言及された部分である。この研究は程度副詞の基礎的な研究として認知されているが、数量限定に関する指摘はこの二点だけであり、しかもその内容について詳細な検討は行なわれていないことが分かる。

森山(1985)が行なったのは、程度副詞を数量限定に用いられるものとそうでないものを明確にグループ分けし、それぞれの語群に名前を付与したことである。

数量限定にも用いられる「量的概念も内包する程度副詞」を「量的程度副詞」とし、数量限定には用いられない「量的概念を内包せず、純粋に程度だけを表す程度副詞」を「純粋程度副詞」とした(p61)。

また、どちらのグループに属するのかの判定を行なうテストについても(11)のようなフレームを提示してある(p61)。

(11)　金が＿＿＿＿＿＿ある。

(11)の下線部に入って「金」の数量を表すことができる程度副詞が量的程度副詞で、「金」の数量を表すことができないものが純粋程度副詞である。「金ガカナリアル」は自然な表現であるため「カナリ」は量的程度副詞となり、「金ガヒジョウニアル」は不自然な表現であるため「ヒジョウニ」は純粋程度副詞となる。森山(1985)が提出したそれぞれに属する語は(12)に示した通りである(p61)。

(12)　＜量的程度副詞＞かなり、随分、結構、やたら、なかなか、比較的、相当、大分、
わりあい、少し、ちょっと、多少、少々、ある程度、いささか、もっと
＜純粋程度副詞＞非常に、大変、はなはだ、著しく、極めて、ごく、すこぶる、あまりに、
ずっと、より、最も、一番

また数量限定を行なうことのできる量的程度副詞の特徴について、(13)のような例をあげて説明を行なっている。

(13)　今度の発破でかなり穴を掘った。　［森山(1985. p64)］

(13)の「かなり」が限定するものは「「掘った穴の深さ」「数」といった対象の規定ともとれるし、動きの側からみて、「動きの大きさ」や「回数」あるいは場合によっては「期間」などともみることができる」として、量的程度副詞の表す量は「未分化なかたち」であると述べている(p64)。

この指摘は、意味合いは多少変わってくるが工藤浩(1983)が「カナリ」や「ソウトウ」の数量限定機能を「不徹底なものである」と指摘したのと共通するものがある。量的程度副詞は数量を限定する機能を有するが、一般的な数量を表す方式に比べて「未分化」であり、「不徹底」なものなのだ。

渡辺(1990)は程度副詞の体系的な整理、分類を試みたものである。論理の過程の詳細については割愛するが、渡辺(1990)が提示したのは「とても類」「結構類」「多少類」「もっと類」の程度副詞の四分類である。以下(14)に示す。

(14)

	比較	計量	判断構造	表現性	量	評価
とても類	×	○	発見	驚嘆	大	非評価系
結構類	×	○	望外発見	脱懸念	大	評価系
多少類	○	○	潜在比較	反期待	小	
もっと類	○	×	比較	吟味	大	非評価系

＜語例＞　とても類：はなはだ、すこぶる、たいへん、きわめて、ひじょうに、ずいぶん

結構類　：なかなか、わりに、ばかに、やけに

多少類　：すこし、ちょっと、やや、いささか、かなり

もっと類：ずっと、よほど、いっそう、はるかに、いちだんと

この表からあらかた分かるように、渡辺(1990)は程度副詞の体系を「発見系」と「比較系」の対立として捉え、さらにそれぞれの内部が「評価系」「非評価系」の二つに分かれるという構造を持つものとして捉えている。その他にも「判断構造」であるとか「表現性」についても非常に詳細に論じているが、本研究で主要テーマとしてあげている数量限定については一言も言及していない―(14)における「量」というのはそれぞれの程度副詞が表す程度性の大小の「量」のことであり、本研究でいう数量とは異なる―。つまり渡辺(1990)が論じているのは一貫して程度副詞の程度限定の質についてであり、その体系を考える際の切り口として数量限定機能はまったく以て排除されているのである。

しかし、だからといってこの渡辺(1990)が量的程度副詞の数量限定を考える際に、何の参考にもならないというわけではない。前節で見た森山(1985)の量的程度副詞と純粋程度副詞の分類と、この渡辺(1990)の分類を見比べると、森山(1985)が言う「量的程度副詞」に属する語と、この渡辺(1990)がいう「結構類」「多少類」に属する語が概ね一致するのである。

渡辺(1990)ではその分類の切り口として数量限定機能を特に取り上げていない。しかしアプローチの違う二つの研究による分類の結果このような一致が起こるということは、数量限定機能を有する語群と有さない語群でその他の統語的、意味的特性にも十分に有

意な差が見られるということを表している。それはすなわち数量限定機能を有するか有さないかは量的程度副詞と純粋程度副詞がそれぞれ持つ特徴や性質に還元されると見てもよいということである。

そういった観点から量的程度副詞と一致すると考えられる「結構類」「多少類」についてもう少し見てみると、これらに共通する性質は「評価系」だという点である。この評価という言葉については少し説明が必要である。渡辺(1990)について論じられた田和(2011)の言葉を引用すると、「「評価」とは「一般的常識」や「先入観」といった話し手の内面にある価値尺度の範囲の内で、どこに位置づけられるのかを品定めすること」(p28)であるとしている。

これまでのことをまとめると、渡辺(1990)においては程度副詞の数量限定については一言も触れられていないが、程度副詞の中で数量限定機能を有する語、すなわち量的程度副詞に属する語はある種の評価性を性質として内包していると考えることができる。

最後に、仁田(2002)は程度や量を限定する働きを持つ副詞的成分について比較的細やかに論じている。その中で量的程度副詞の数量限定機能は大きく分けて(15)のように個体の数量を限定をする働きと、(16)(17)のように動きの量を限定する働きの二つに分かれるとしている。(15)～(17)は仁田(2002)が提出した用例である。

(15)「ちょっとカネがあるヤツはみんなそうしている」

(16)「小野寺さん・・・ずい分探したわ」

(17) 手をほんのちょっと伸ばしさえすれば、すぐ届くところに啓子の肉体があった。

［仁田(2002.pp184-186)］

(15)の「ちょっと」が限定しているのは「カネ」の量であり、(16)の「ずい分」が限定しているのは「小野寺さん」を「探した」時間の量であり、(17)の「ちょっと」が限定しているのは「手を伸ばす」距離の量である。「動きの量を限定」する場合は、(16)のように「時間的広がり」を表すものと、(17)のように「空間的広がり」を表すものとに分けられるという指摘もなされている。

ここまで４つの研究を提示しつつ量的程度副詞の研究過程についておおまかに述べた。もちろんこれ以外にも関連する論考はいくつかあるが、この４つの研究は程度副詞研究の幹にあたるものとして特に代表的なものである。その他の研究に関しては次章以降、論を進めるにあたってその都度引用・参照していくこととする。

ここまで見てきたことを箇条書きでまとめると(18)のようになる。

(18) a 量的程度副詞は数量限定機能を持った程度副詞であり、同じ程度副詞の中でも数量限定機能のない純粋程度副詞と区別されうる。

b 量的程度副詞は数量限定を行なうが、その形は多少未分化であり、不徹底なものもある。

c 量的程度副詞は語彙的性質として評価性を内包していると考えられる。

d 量的程度副詞の用法としては個体の数量を限定をする働きと、動きの量を限定する働きがある。

また本研究で研究対象とする量的程度副詞は(19)の通りである。これらは量的程度副

詞に属する語として疑いのない語である。比較の構文でのみ用いられる語―例えば「モット」「ズット」等―は数量限定にも用いられることもあるが、研究対象からは除外してある。

(19)　カナリ、ズイブン、スコシ、ソウトウ、ダイブ、チョット

２．２．２　量の副詞

次に量の副詞という語群について概説する。

先ほども言及した仁田(2002)では程度副詞とそれに隣接する量の副詞を一つの語群として設定し、「程度量の副詞」と呼んだ。そしてその語群を「程度限定のみを行なうもの」、「数量限定のみを行なうもの」、「そのどちらをも行なうもの」と３分類し、それぞれ「純粋程度の副詞」「量の副詞」「量程度の副詞」とした。

「純粋程度の副詞」、「量程度の副詞」は既出の森山(1985)ではそれぞれ「純粋程度副詞」「量的程度副詞」と呼ばれているものであり、その内容は同じであると考えてよい―混乱を避けるため、以下、引用以外では仁田(2002)がいう「純粋程度の副詞」「量程度の副詞」はそれぞれ「純粋程度副詞」「量的程度副詞」と置き換えることにする―。(20)を見るとその関係が分かりやすい。

(20)

	程度限定	数量限定	語例
純粋程度副詞	○	×	非常に　とても　大変(に)　すこぶる
量的程度副詞	○	○	ずいぶん(と)　だいぶ　かなり　うんと
量の副詞	×	○	たくさん　いっぱい　たっぷり　どっさり

量の副詞の代表的な用法は(21)(22)のようなものである―(21)(22)は仁田(2002)で用いられた用例である―。

(21)「たくさん農園を作ったんだね」

(22)　国会の予算審議はまだたっぷり時間がある。　[仁田(2002. p192)]

(21)の「たくさん」は対象である「作った農園」の数量を限定しており、(22)の「たっぷり」は主体である「時間」の量を限定している。そして仁田(2002)は「量の副詞の代表的で中心的な働きは、主体や対象の個体の数量限定である」(p192)としている。

しかし、もちろん量の副詞が行なうのが主体や対象の個体の数量限定だけというわけではない。

影山(1993)は動詞を「他動詞」「非対格自動詞」「非能格自動詞」にわけ、(23)のようにそれぞれの動詞が「たくさん」と共起する際の解釈の違いについて論じている(pp54-55)。

(23)　たくさん飲んだ＝飲んだ量がたくさん≠飲んだ人がたくさん【他動詞】

たくさん生まれた＝生まれた子供がたくさん【非対格自動詞】

たくさん遊んだ＝遊んだ量がたくさん≠遊んだ人がたくさん【非能格自動詞】

［影山(1993.p54)］

(23)の例から「たくさん」は、他動詞と共起した場合は目的語の数量を、非対格自動詞と共起した場合は主語の数量を、非能格自動詞と共起した場合は行為の量―仁田(2002)では「動きの量」と呼ばれるものであり、本研究でもこれを「動きの量」と呼ぶ―を表すということを論じている。つまり、共起する動詞のタイプによって解釈が異なるということである。

このように動きの量を限定する用法があるにも関わらず、仁田(2002)が量の副詞の基本的な用法を「主体と対象の個体の数量限定」としたのは、その使用の絶対数と関わりがあると考えられる。可能性としては動きの量を表すことも可能であるし、使用例も見つかるのであるが、量の副詞の用例に当たってみると主体や対象の個体の数量限定として用いられる例がはるかに多いことが分かる。

また程度限定機能を有するか否かによって量の副詞と量的程度副詞は截然と分かたれるわけだが、数量限定機能に限っていうと両者が似通った部分を持っているのは確かである。(24)と(25)を見比べてみると分かる。

(24)　ゴ飯ヲタクサン食ベタ。【量の副詞】

(25)　ゴ飯ヲカナリ食ベタ。　【量的程度副詞】

数量性の大小の違いを別にすれば、「食ベタ」数量を表す点においてはあまり意味的な差を感じることができず、両語群がある種の似通いを有していることが分かる。

こういった似通いのために、量的程度副詞と量の副詞の語を併せて「量の副詞」とする立場もあるが、本研究ではこの二つは明確に区別しておく―似たように見えるがその内容を詳しく見ると両者はまったく違う限定のメカニズムをもっていることが分かるからであるが、それについては第４章において論じる―。

また、両語群が決定的に違うふるまいを行なう場面も当然ながら存在する。例えば、この量の副詞は(26)のように他の語―ここでは「ズイブン」―による限定を受けえるが量的程度副詞の多くは(27)のように他の語による限定を受けえない[7]という違いが観察される。

(26)　ズイブンタクサン買ッタネ。

(27) *ズイブンカナリ買ッタネ。

[7]　量的程度副詞の中でも小さい程度を表す「スコシ」「チョット」は「ゴクスコシ」「ホンノチョット」のように他の語による限定を受けえる。これは２.２.１で説明したように量的程度副詞の語群としての広がりを示唆しているわけだが、これについては第３章で詳説する。

量の副詞に属する語は一般的な副詞の３分類においては情態副詞に属するとされている。量的程度副詞は当然程度副詞に属するとされる。やはりそういった意味でも両語群は一線を画すと言えるだろう。

このようなことから、明らかに量の副詞として認められるのは(28)の通りである。

(28)　イッパイ、タクサン、タップリ、ドッサリ

以上、得られたことをまとめると(29)の通りである。

(29)　a 量の副詞の基本的な用法は主体や対象の数量を限定することである。
　　b 量の副詞は量的程度副詞と用法的に重なる部分がある。

２．２．３　否定程度副詞

２．１．３では程度副詞は肯定文において用いられるということを確認した。そのため否定文脈において程度限定を行なう副詞は「程度副詞」という枠組みには入らないと考えるのが一般的である。

工藤浩(1983)では(30)のような語群を提示しつつ、これらは否定の程度性を限定したい場合に用いるものだとしている(pp186～187)。この(30)のような語群を本研究では

「否定程度副詞[8]」と呼ぶことにする。

(30)　アマリ、スコシモ、ゼンゼン、ソレホド、タイシテ、チットモ

否定程度副詞は否定の文末形式と呼応するため、一般的な副詞の３分類においては陳述副詞に属する。

仁田(2002)では否定程度副詞は「否定文脈で使われる程度に関わる副詞」(p166)として簡単に説明されている。これらの語は(31)のような「形容詞の表す属性･状態の程度限定を行う構文」に現れると同時に(32)(33)のように「数量の限定を行う構文の中にも現れうる」としている(p167)―(31)～(33)は仁田(2002)による用例である―。

(31)　今日は【タイシテ/少シモ/全然】暑くない

(32)　酒を【タイシテ/少シモ/全然】飲まなかった

(33)　【タイシテ/少シモ/全然】歩かなかった　［仁田（2002.p167）］

以上のようなことから、すべての否定程度副詞が数量限定機能を持つことがわかる。

[8]　本研究ではこれらの語群を否定程度副詞と呼ぶが、これは用語として合意のあるものではない。伝統的な慣例に即して言うならばこれらの語は「否定の陳述性を有する陳述副詞」というべきであろう。しかし、否定の陳述性を有する陳述副詞には「ケッシテ」「カナラズシモ」などのような語も当然含まれるわけで、こうした語に数量限定性は確認されない。そうすると「否定の陳述性を持ち、なおかつ程度限定機能や数量限定機能を持つ副詞」を呼ぶ用語が必要となるわけだが、この用語を指定したものは管見では認められない。よって、便宜上「否定程度副詞」という用語を用いることにする。

工藤浩(1983)は否定程度副詞を「状態の程度を限定する程度副詞の性質を兼ねそなえたもの」とし、「それらとの対立·張り合い関係の中で、いわゆる程度副詞は肯定文脈に傾向するのだと、まずは考えられる」(p187)としている。つまり、程度副詞と否定程度副詞は肯定か否定かといったみとめ方を基準とした対称的な対応関係にあるということである。しかし否定程度副詞がすべて数量限定性を有するという事実から考えると、対応関係にあるのは程度副詞ではなく、量的程度副詞であるとした方がより正確であろう。

否定表現の研究である工藤真由美(2000)は否定形式と呼応する副詞を共起する述語のタイプの違いから３つの類に分け、その実態について詳細に記述している。

次頁の(34)を見ると分かりやすいが、一つは名詞述語、形容詞述語、動詞述語と共起する「けっして」「かならずしも」「まさか」等の類、一つは形容詞述語、動詞述語と共起する「ちっとも」「あまり」「たいして」の類、そしてもう一つは動詞述語とのみ共起する「とても」「めったに」「どうにも」等の類である。否定程度副詞は当然二番目の類―(34)におけるＢ―に属する。

また、名詞述語に関しては程度性を有する一部のもの以外とは共起しないということも指摘されている(p108)。つまり、否定程度副詞が共起する成分は量的程度副詞が共起する成分と同じなのである。ここからも否定程度副詞が量的程度副詞と肯否のみとめ方を基準とした対称的対応関係にあることが支持される。

さらに、否定程度副詞に関してはさらに否定のあり方の違いから「完全否定」と「不完全否定」の二つに分かれるということも指摘されている(p107)。これは量的程度副詞の中にも大きな数量を表すもの―例えば「カナリ」など―と小さな数量を表すもの―例

えば「スコシ」など―が存在することと並行的な関係を有していると考えられる。

(34)

	述語のタイプ		否定のあり方	語例
A	名詞述語	判断	断定：完全	けっして、べつに
	形容詞述語		断定：不完全	かならずしも、あながち、まんざら、
	動詞述語			いちがいに
			推量	まさか、よもや
B	形容詞述語	量・程度	完全	ちっとも、すこしも、いささかも、みじ
	動詞述語			んも、まるで、まるっきり、ぜんぜん、
				さっぱり、いっこうに
			不完全	あまり、たいして、さして、さほど、そ
				れほど、そんなに、そう
C	動詞述語	実現	不可能	とても、とうてい
			困難	なかなか、どうにも
			頻度(時間)	めったに、ついぞ、ひさしく
			(量)	(ろくに)

ただこれらの語は「否定のありかた」として「程度」と「量」があると示されているだけでその程度性や数量性がどのように実現されているのかに関する詳しい記述がないため、限定方式の内容に関しては検証を要すると考えられる。

以上、得られたことをまとめると(35)の通りである。

(35) a 否定程度副詞は量的程度副詞と肯否のみとめ方を基準とした対称的対応関係を持つと考えられる。

b 否定程度副詞の中には表す数量が大きいもの「完全否定」と、小さいもの「不完全否定」がある。

２．２．４　概略副詞

副詞の３分類の一つである程度副詞は、一般に相対的な状態性[9]の意味をもつ語にかかってその程度を限定する機能を持つと考えられている。しかし形容詞をはじめとした状態性を有する語がすべて相対的な状態性を有しているわけではない。例えば「等シイ」「同ジ」などは非相対的な状態性を有している[10]。そういった語の状態性の度合いを限定するのが概略副詞[11]である。

---

[9] 仁田(2002)はこういった「相対的な状態性」を「程度性」と表現している。程度性は、「属性(質)や状態が幅・度合い・スケールを帯びて、その属性や状態として成り立っていることから生じる」とあり、またその属性(質)・状態に関しては「定まった終端性・限界を持たない」ものとしている(p147)。そういった「終端性・限界を含んでいない」という差のために、ある語は程度副詞の修飾を受けえるのであり、また「終端性・限界を含んでいる」ためにある語は程度副詞の修飾を受け得ないのだということである。

[10] 仁田(2002)の言葉を借りればこれらの非相対的な程度性を有している語は、言語的意味の中に「終端性・限界」を含んでいる語である(p147)。

[11] ここで用いた概略副詞という用語も一般的な合意がある語ではない。それが指し示すものは同じなのだが、花井(1980)では「概略表現の副詞」、工藤(1983)では「概括量副詞」、仁田(2002)では「概略・概括的な程度量の副詞」という用語が用いられている。「概略副詞」は森山(2001)

花井(1980)は程度副詞との比較により概略副詞の性格を明らかにしようとしたものである。程度副詞が相対的状態性を属性として持つ概念を修飾するものなのに対して、概略副詞は「ある状態を基準として、そこへの接近を程度において修飾するのだ」(p80)とした。つまり、「大キイ」「小サイ」「近イ」「遠イ」といったような相対性を有する語は程度副詞による限定を受け、「等シイ」「同ジ」といったような相対性を有することなくただ一点の基準点を持つ語は概略副詞による限定を受けるということである。具体的な語としては(36)にあるような語群があげられる。

(36)　オオカタ　オオムネ　ダイタイ　ホトンド

工藤浩(1983)でも程度副詞との比較という観点から概略副詞について言及されている。共起関係に関することについては花井(1980)で得られたこととほぼ同じことが述べられているのだが、相対性を持った語と共起する程度副詞と、相対性を持たない語と共起し非相対的な状態への近づきの程度を表す概略副詞は「ほぼ相補的な分布を示す」(p179)と指摘されている。

仁田(2002)ではさらに細かい観察がなされている。まず概略副詞を「極として成立することで程度性を持たない属性・状態、および量に対して、その属性・状態や量としての成り立ちへの度合いを表し、その成り立ちへの度合いが、百パーセントではなくそれに近い度合いである、ことを表している副詞」(p196)と定義づけた。そしてこの定義を

で用いられており、その表現の簡潔さから本研究でもこれに倣うことにした。

もとにして、概略副詞がさまざまな成分と共起する場合の用例をあげつつ概略副詞の性格を説明している。

(37)　その乱流の最小波長が、砂漠の砂の直径に、ほぼ等しいというのである。

(38)　荻原課長と下村の勧告退職は、ほぼ内定していた。　［仁田(2002. pp196-197)］

(37)の「ほぼ」は「等しい」度合いが100パーセントにどのくらい近いかという程度を限定していると見ることができる。(38)の「ほぼ」も「内定していた」度合いが100パーセントにどのくらい近い度合いであるかを限定しているといえる。この仁田(2002)の定義を利用すれば概略副詞の性格に関してはほとんどすべて説明がつく。

しかし森山(2001)がこういった過去の研究を評価した上で、「こうした従来の研究は、程度修飾からの観点によるものが中心である。ただし、個々の用法の分析は、必ずしも十分ではない」(p113)としているように、数量限定については過去の研究ではほとんど触れられていない。

概略副詞は、量的程度副詞が程度限定、数量限定の両方の場面において用いられるのと同じく、数量限定機能を有する。それは(39)(40)のような例からも明らかであろう。

(39)　モラッタ水ハダイタイ飲ンダ。

(40)　兵士ハオオカタ生キ残ッタ。

(39)の「ダイタイ」、(40)の「オオカタ」は明らかにそれぞれ「モラッタ水」を「飲

ンダ」数量、「生キ残ッタ」「兵士」の数量といった数量的側面を限定している。

このように明らかに数量限定機能があるわけだが、過去の研究ではほとんどこの機能については触れられていない。

先ほど程度副詞と概略副詞が程度限定場面において共起する形容詞述語は相補的な関係を持つということを述べたが、(39)(40)を見る限りでは数量限定場面においてはそのような共起する述語の違いは感じられない―(39)(40)に量的程度副詞を代入してみても文が成立することからもそれは明確である―。だとしたら、程度限定機能の検証だけを以て、それが概略副詞の性格のすべてだと結論づけるのには無理がある。

ただ、概略副詞の数量限定に関して論じられているものがまったくないわけではない。花井(1980)は(41)(42)のような例をあげて概略副詞の数量限定について多少言及している。

(41)　つぼが少しこわれた。

(42)　つぼはおおむねこわれた。　［花井(1980. p77)］

(41)の「少し」は量的程度副詞、(42)の「おおむね」は概略副詞である。花井(1980)は概略副詞にも量的程度副詞と同じように数量を限定する働きがあると認めた上で、両者の間に「質的な相違はない」(p77)としている。

「つぼが少しこわれた」と「つぼはおおむねこわれた」ではかなり大きな質的相違があると思われるが、この「質的な相違はない」という記述をどのように捉えるべきだろ

うか―この問題は第６章にて論じる―。

仁田(2002)は「男たちはほぼ笑った」という例をあげて、この例が成立するのは「存在する「男たち」の数量に対する概括的な捉え方を表すようになるから」(p198)と概略副詞の数量限定機能に触れているが、これに関する分析や考察は一切なされていない。

このように実質的に概略副詞の数量限定についてはまったくの手つかずと言ってもよい。

また、この概略副詞は副詞の３分類ではどこに分類されるのだろうか。程度副詞と隣接する語群であることは確かだが、相対的状態性を有する形容詞の程度性を限定するのが程度副詞の定義だとすると、程度副詞には属さないことになる。となると、結局情態副詞ということになるが、極めて程度副詞寄りの情態副詞ということになるだろう。

ここまで分かったことをまとめたものが(43)である。

(43) a 概略副詞は程度限定機能を果たす場合には、ある状態を基準として、そこへの接近の程度を修飾するものであり、非相対的な情態性を有する形容詞と共起する。これは程度副詞が相対性を有する形容詞と共起することと相補的な関係を持つものである。

b 概略副詞の数量限定についてはほとんど手つかずの状態である。

２．２．５　その他の語群

本研究の対象は数量限定を行なう副詞であるわけだが、そこに入らずとも数量限定を

担う語群というのがいくつかある。それらについて簡単にここで述べておく。

２．２．５．１　数量詞

一般に数量詞と呼ばれるものは「数詞＋類別詞」―ここには「㎞」や「ℓ」等の数量単位も含める―という構成を持った特定の数量を表すものである。(44)～(48)がその例である。

(44)　リンゴヲ三ツ食ベタ。

(45)　議員ヲ二人選出シタ。

(46)　30㎞歩イタ。

(47)　１週間待ッタ。

(48)　５回行ッタコトガアル。

(44)の下線部の語は「食ベタ」「リンゴ」の数量、(45)は「選出シタ」「議員」の数量、(46)は「歩イタ」距離の量、(47)は「待ッタ」時間の量、(48)は「行ッタ」度数などを限定している。特定の数量を具体的に表すことができることからも、数量限定を行なう語群の中でも最も基本的なものだと言える。

数量詞に関しては遊離の問題などがたびたび論じられたりすることもあり、本研究で対象としている「数量限定を行なう副詞」に比べてはるかに研究が進んでいる分野であ

る。しかしそれらの多くは本研究とはあまり関連性のない事項のため、ここでは言及しない。

２．２．５．２　全称数量詞

宇都宮(1995)では広い意味での「数量詞」を７つに分類してある[12]。その一つに「集合の元をあますことなく指し示すもの」(p2)として(49)のような「全称数量詞」があげられている。

(49)　スベテ、ゼンイン、ゼンブ、ミンナ

「ゼンブ食ベタ」「ミンナ来タ」などは文の数量的側面を限定しているが、加藤(1997)が言うように「全体を量として指し示すという点でやや特異な性質を有している」(p34)。

仁田(2002)においても「全部の類」として似たような語群が設定され、量の副詞の「周辺に位置する存在」と説明されているが、仁田(2002)が提示した語には「半分」「少数」といった語も含まれているため、「全称数量詞」とは多少範囲が異なる面はある。全称数量詞は全体数量を表すものであり、全部の類は全体数量に対する割合のあり

[12] 宇都宮(1995)における７つの分類とは「定数」「全数」「個別数」「部分数」「量数」「概数」「疑問数」である(p2)。当然のことながら宇都宮(1995)が指し示す「数量詞」と本研究の指し示す「数量詞」は違うものである。

方を表すものであることから、全称数量詞の延長線上に全部の類があると考えてよいだろう。

この語群はある場面では副詞的な働きを担うことは確かだし、数量詞と違い相対的な数量を表しているという点では数量限定を行なう副詞の一つであるとも考えられるが、いわゆる主語や述語に自由に立つことができるという点で、その他の典型的な連用修飾に用いられる副詞とは区別される。

２．２．５．３　形式副詞

形式副詞とは奥津(1980)等によって使われている用語であり、「補足成分を要求して副詞句をつくる副詞」(p149)とされている。(50)(51)がその例である。

(50)　二郎ハ死ヌホド疲レタ。

(51)　ビックリスルクライ広イ家。

(50)(51)の例でいうと、「補足成分」とは「死ヌ」「ビックリスル」を指す。この補足成分と形式副詞である「ホド」「クライ」が結びつき、「死ヌホド」「ビックリスルクライ」という形全体として副詞句を作り、後接する成分に対して限定を行なっている。

「ホド」「クライ」の他にも「バカリ」「ダケ」「カギリ」などがあるが、数量限定

として用いられるのは「ホド」と「クライ」である[13]。

奥津(1980)では形式副詞「ホド」が程度限定に用いられる場合、その類型は３つに分類されるとしている。

(52)　死ヌホド疲レタ。

(53)　病気ニナラナイホドニ練習シナサイ。

(54)　日本ハアメリカホド大キクナイ。

(52)を「非常の程度」、(53)を「通常の程度」、(54)を「同程度」と呼んでいる。被修飾成分の程度的側面を限定するという点においては程度副詞との似通いが認められるが、非修飾成分に語彙的制約が大きいという点と、肯定文、平叙文以外とも共起するという点においては性質を異にする。これは川端(2002)でも指摘されている(p42)。

奥津(1980)などによって発展を見た形式副詞であるが、その数量限定機能を指摘したのは井本(1999)である。

井本(1999)は「ほど節」が各種動詞と共起した場合の解釈の違いについて研究したものである。「ほど節」も程度副詞と同じように解釈のされ方に多様性がある。「ほど節」が表す意味には(55)～(60)のように６種類あると示されている(pp45-47)。(55)～(60)の

13　もちろん「三日ダケ待ッテクダサイ」のような例では「ダケ」はある意味「三日」という数量を限定しているわけだが、形式副詞全体の「三日ダケ」がこの文の数量限定機能を担っているわけではない。数量限定を担っているのは「三日」の部分であり、「三日」は数量詞である。

用例は井本(1999)が提示したものである。

(55)　おなかを壊すほどアイスクリームを食べた。　【目的語が大量】

(56)　庭を埋め尽くすほど花が咲いた。　【主語が大量】

(57)　背中が赤くなるほど次郎を叩いた。　【事象回数が大量】

(58)　足がつるほど泳いだ。　【行為の量が大量】

(59)　見違えるほど痩せた。　【非常の程度】

(60)　軒先に届くほどジャンプした。　【1回の強い動き】

［井本(1999.pp45-47)］

提示された(55)～(60)のうち(55)～(58)が数量限定機能を果たしていることが分かる。２．２．１において、量的程度副詞が数量限定をおこなう際には様々な解釈になり得るということを指摘した森山(1985)を紹介したが、それと照らし合わせてみても形式副詞が量的程度副詞と似たようなふるまいを見せていることが分かる。

しかし形式副詞とはいうものの、「補足成分」がなくては機能しないという点からも、一般に言う副詞とは性質を異にするのも確かである。実際、形式副詞という語は、用語として定着しているとは言いがたく、前述の川端(2002)では「程度副詞相当句「Ｐほど」」と表現されていたり、井本(2004)でも「「ほど」構文」などとされている。

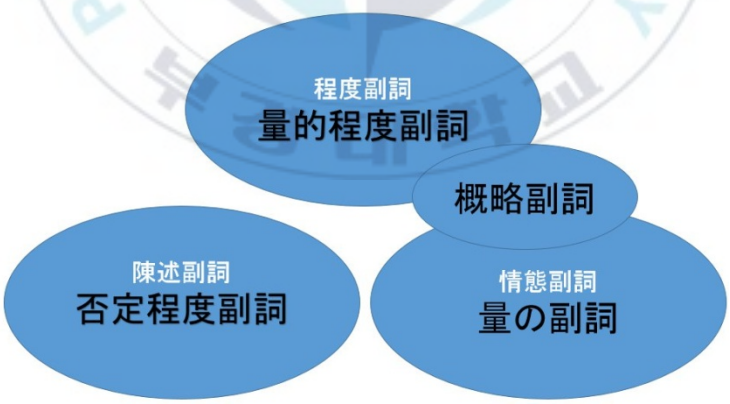
２．３　論点の設定

前節まで、過去の研究を参照しつつ数量限定を行なう副詞とその他の語群について、どこまで研究が進んでおりどのような事項が既知であるかを見てきた。次に、ここまで見てきた前提を踏まえた上で、本研究の指針を示すことにする。

まず、本研究で研究の対象とする４つの語群―「量的程度副詞」「量の副詞」「否定程度副詞」「概略副詞」―は、数量を限定する機能を持つという点で共通点を持つわけだが、その性格が一様でないことは先行研究を通してよく分かることと思われる。

それを端的に表しているのが、副詞内での各語群の立場である。これは(61)を見られたい。

(61)



(61)を見れば一目瞭然であるが数量限定を行なう副詞は、副詞の３分類のすべてに別

れて分布している。このことから、これらの語群は「副詞」であるとか「数量を限定する副詞」というカテゴリーによって一括りにされるものの、その性格は多岐に渡っていることがよく分かる。

概略副詞だけは情態副詞とも言えるし、程度副詞とも言える。これは程度副詞の範囲をどう見るかによって変わってくることだが、ここでは概略副詞がどの副詞に分類されるかはあまり重要なことではないため、とりあえずはこのように両副詞の中間的位置づけであるとしておく。

各語群が別々のカテゴリーに属しているということは、それぞれの語群が数量限定機能という働きを共有しつつも、それ以外の機能的な部分では棲み分けを行なっているということである。その棲み分けがどのような形で行なわれているのかを考えるのがこの研究の最終的な目的である。

その目的を達成するために、以下の３つの論点を提示したい。これらの論点からそれぞれの語群の特性を観察し、それぞれの語群がお互いにどのように共通点と相違点を有するかを考えていく。

あるものの分類を行なう場合にその基準となるのが、比較しようとするもの同士の共通点と相違点である。本研究のテーマの場合、共通点はすでに「数量を限定する」ということで了解されている。ならば、これから探るべきはそれぞれの語群の相違点である。どのような場面・状況においてふるまいに違いが生じるのか、そして生じたふるまいの違いは何に起因するのかという点である。

そういった相違点を探るため、次章から始まる各論では以下の三つの論点をキーワー

ドとしてそれぞれの語群の内実について考えていくことにする。

２．３．１　数量性

まず一つ目の論点となるのは、それぞれの副詞が持つ数量性である。当然本研究で対象とする４つの語群は数量を限定するという性質を共通項として有しているわけであるが、その数量限定の実現のされ方はそれぞれの語群において異なりが見られる。

副詞による数量限定はどういった成分を限定しているかによって大きく２つに分かれる。主体・対象の数量を限定する場合と、動きの量を限定する場合である。例えば(62)～(64)である。

(62)　人ガタクサンイル。

(63)　リンゴヲタクサン食ベタ。

(64)　タクサン遊ンダ。

それぞれの「タクサン」は(62)では「人」の数量を、(63)では「リンゴ」の数量を、(64)では「遊ンダ」量を表している。(62)(63)と(64)が決定的に違うのは(62)(63)は文中にある主体と対象の名詞―ここでは「人」と「リンゴ」―の数量を限定しているのに対して、(64)の「タクサン」は何らかの名詞の数量を限定するわけではなく、述語動詞

として用いられている「遊ンダ」の持つ動きの量を限定している。

このように主体や対象の位置にある名詞の数量を限定するか、それとも共起する動詞が内包する数量的尺度を限定するかによって大きく二つに分かれるのである。

また「動きの量」の用法は、(65)のように「空間量」を表す場合と、(66)のように「時間量」を表す場合がある。これは仁田(2002)において指摘されている(p186)。

(65)　カナリ走ッタ。

(66)　玄関前デカナリ待ッタ。

ただし、前後の文脈によっては(65)の「カナリ」も時間量を表していると考えることもできる。仁田(2002)も「時間量と空間量は截然と分かれるわけではない」「空間量の増大は必然的に時間量の増大を招来する」という面があると論じており、この用法の区別は厳密にできるものではないことが分かる。

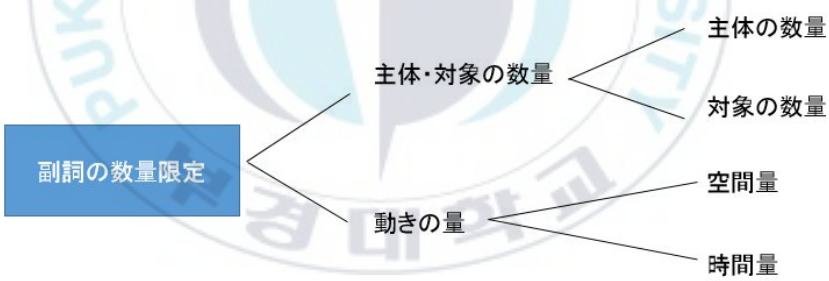
２．２．１では量的程度副詞の数量限定機能として、個体の数量を限定する場合と動きの量を限定する場合があることを確認した。しかし２．２．２において、量の副詞は主体と対象の個体の数量限定が主な働きであるとされ、動きの量を限定するのは量の副詞の基本用法ではないという論説があることも紹介した。

こういったことから、語群によりどのような数量を限定する力が強いかには偏りがあると考えられる。そういったことを考えるのがこの「数量性」という論点である。

(67)に数量限定の分類を図示したものを示しておく[14]。まず、何らかの名詞の数量を限定しているかどうかがポイントになる。何らかの名詞の数量を限定している場合は「主体・対象の数量」になり、その数量を限定される名詞が主体であれば「主体の数量」、対象であれば「対象の数量」となる。もし、何らかの名詞の数量を限定していない場合は「動きの量」として区分される。そして更にその「動きの量」が空間量的側面から限定されていれば「空間量」となり、時間量的側面から限定されていれば「時間量」となる。

仁田(2002)も論じた通り、この区別は曖昧な部分が多いのだが、論理的にはこのように分類できるということを提示しておく。

(67)



14　こういった分類は何を目的とした論考を行なうかによって異なる。例えば仁田(2002)は本稿で「主体・対象の数量」を表すとしたものの中でも「動きの量」に関わるものがあるとしているし、佐野(2006)では「カナリ彼ヲ見カケタ」と言ったような「カナリ」の用法を「度数」用法として独立したものとして扱っている。本研究では「度数」用法も「動きの量」の用法として分類する。当然分類を細分化しようと思えばいくらでもできるのだが、本研究での目的が用法の分類ではないため、統語的な関係による分類をおこなった(67)程度の下位分類に留めておく。

２．３．２　陳述性

否定程度副詞はその性質上、否定の表現と呼応するという陳述性を持つ。これが最も分かりやすい陳述的な縛りであるが、その他三つの副詞も何らかの陳述的制限を持つもの―もしくは持たないもの―と考えられる。

例えば２．２．１で示した通り、量的程度副詞は肯定文、平叙文でのみ使われるという陳述的制限を持つ。一般的に肯定文、平叙文というのは無標の文法形式であるため、そこに制限がかかっているとは見えにくい部分があるが、これも歴とした陳述的な制限であり、否定程度副詞の持つ陳述性と同等に扱われるべき事項の一つである。

それぞれの副詞がどのような陳述的な制限を持つのか―もしくは持たないのか―、またその陳述的制限はそれぞれの語群のどのような性質に因っているのかという点から各語群の特性を考えていく。この陳述性というのが二つ目の論点である。

２．３．３　名詞性

仁田(2002)において程度と数量を限定する副詞が詳細に分析・考察されていることは既に述べたが、その中で各々の語が持つ名詞性の高低という観点が指摘されている。

仁田(2002)は純粋程度副詞、量的程度副詞、量の副詞の順番で「名詞性が高くなっていく」と指摘し、「名詞性の高さは、また、副詞の表す意味の抽象性に関わっている。

抽象性が低い方が名詞的に捉えやすくなる。＜程度＞は＜量＞に比して抽象性が高い」(p189)といったことを述べている。

つまり、それぞれの語が持つ名詞性の高低はそれぞれの語が表す意味と密接な関わりがある。この名詞性の高低を考えることを三つ目の論点として設定する。

名詞性の高低を判定する際の基準として、３つのテストを提示する。まず一つ目は(68)である。

(68)　取り立て助詞「ハ」を後接し得るか

工藤浩(1983)では量的程度副詞には「ハ」や「モ」のような取り立て助詞が後接しないことが指摘されているのだが、その理由は量的程度副詞には「ハ」や「モ」で取り立てたりするだけの「実質的な概念性がないため」(p186)とされている。逆に言えば「ハ」や「モ」を後接させ得る語には「実質的な概念性」があるということになる。

(69)　赤イ花ハ私ノデス。

(70)　赤イノハ私ノデス。

(71) *赤イハ私ノデス。

(69)～(71)を比べてもわかるように、「ハ」で取り上げるの成分は名詞的な性質を含んでいないといけない。

そういった理路から「ハ」の後接が名詞性の高低の判断に用いられる。

二つ目は(72)である。

(72)　連体助詞「ノ」を後接し得るか

「ＡノＢ」という連体修飾の形があるが、この形は基本的にＡがＢという名詞の意味の外延を狭める働きを持つ。「梅ノ花」と言った場合、「梅」は後接する「花」の意味を限定している。ということは、Ａの位置に立つ語はやはり実質的概念性を有し、Ｂの位置に立つ名詞の意味を限定していなければならない。

そうすると「ハ」や「ノ」といった助詞を後接できる語というのは、実質的概念性を有していなければならない。つまりそれは名詞的性質を帯びるということと同意である。

こういった理路から「ハ」や「ノ」の後接の可否が各種副詞の名詞性の高低の判断に用いられるのである。

最後は(73)である。

(73)　他の語による修飾を受け得るか

工藤浩(1983)では、「スコシ」や「チョット」が例外になるのだが、量的程度副詞が他の語による修飾を受けえないことが指摘されている。この理由もやはり「他の語によって限定されたりするだけの実質的な概念性がないため」(p186)とされている。

例えば「赤イ花」という修飾関係を想定してみよう。これは「赤い」という属性を表す形容詞が、「花」という実質的概念を修飾している。この修飾関係は修飾を受ける「花」に実質的概念があるからこそ、「赤イ」という語により修飾を受け「どの花であるか」といった「花」の意味の外延を狭めることができるのである。実質的概念がないものは他の語による修飾を受けることはできない。そして、やはりその実質的概念は名詞的性質と密接な関わりがある。

以上、(68)(72) (73)が副詞の名詞性を判断する基準となる。

名詞性の高低が意味の抽象性と関わりがあるということは仁田(2002)の指摘だが、意味の抽象性は、それに付随する数量的な諸々の事項とも関連性があると考えられる。

以上「数量性」「陳述性」「名詞性」の３つが数量を限定する機能を有する副詞の機能的特性を考えていく上での論点である。ここであげた論点を詳細に検討にしていくことによって、数量を限定する機能を持つという点で共通点を有する４つの副詞が、どのような役割の違いを持ち、お互いにどのような関係性を持つものなのかを考えていく。

次章から本論に入り、４つの語群の内実を詳細に検討していくわけだが、まずは最も先行研究の充実している量的程度副詞について論じることから始める。

第３章　量的程度副詞

まず、本章で論じる量的程度副詞という語群について、もう一度確認しておこう。

量的程度副詞とは一言で言うならば、数量限定機能を有する程度副詞のことである。まず、程度副詞の条件としては後接する語の程度的側面を限定する機能がなければならない。それは、例えば(１)のようなテストで判断できる。

（１）　＿＿＿＿＿面白イ。

「ヒジョウニ」「カナリ」などは(１)の下線部に入って自然な日本語の文を作る。そして後接する「面白イ」の程度性を限定することができる―どのくらい「面白イ」かを限定することができる―。よって「ヒジョウニ」「カナリ」は程度副詞である。

一方、「ゼンブ」という語も(１)の下線部に入り得る。そして「ゼンブ面白イ」が日本語として自然な表現であることは間違いない。しかし「ゼンブ」は「面白イ」という語の程度的側面を限定していない。よって「ゼンブ」は程度副詞ではない。

(１)に入って「面白イ」の程度性を限定することができ、なおかつ(２)の下線部に入ることができるものが量的程度副詞である。

（２）　金ガ＿＿＿＿＿アル。

「トテモ」や「ヒジョウニ」といった語は(１)に入ることはできるが、(２)に入ることはできない。よって量的程度副詞ではない。(１)だけに入ることができるのは「純粋程度副詞」である。

既に２．２．１であげたが、量的程度副詞として疑いの余地のないものは(３)(４)の通りである。(３)と(４)に分けたのは(３)が比較的数量大を表すものであり、(４)が比較的数量小を表すものであるためである。

（３） カナリ、ズイブン、ソウトウ、ダイブ　【数量性大】

（４） スコシ、チョット　【数量性小】

このような合意の下、本章では量的程度副詞について考えていく。

３．１　数量性

ここでは２．３．１で設定した分類に沿って、量的程度副詞がどのような数量性を持つものなのかを考えていく。

３．１．１　主体・対象の数量

（５）～(10)は量的程度副詞がそれぞれ文の主体の名詞の数量を限定している例である。

（５）　現実には開放的チャネルと変わらないケースもかなりみられ、選択した流通業者との関係の維持に多大の努力を必要とする

（６）「選挙目当てのパフォーマンスではないか」と疑問視する意見もずいぶんあった。

（７）　彼のデザインや建築に見覚えのある人は相当いるのではないだろうか。

（８）　これまであった商品戦略への不満はだいぶ消えた。

（９）　みそ汁とご飯をちょっとだけよそい、大皿の端に少し残っていた青菜の炒め物といっしょに、かきこむように食べる。

(10)　僕の中では、よく展覧会に出ているような『書』というものを全否定しようかなという感じがちょっとありまして…。

数量性大の量的程度副詞も、数量性小の量的程度副詞もどちらも主体の数量を限定する用例が確認された。（５）～(10)の順に言うと、「かなり」は「ケース」の数量を限定しており、「ずいぶん」は「意見」、「相当」は「人」、「だいぶ」は「不満」、「少し」は「青菜の炒め物」、「ちょっと」は「感じ」をそれぞれ限定している。

続いて対象の数量を限定する場合である。

(11)　原爆にかかわっての本はかなり読んだつもりだったが、

(12) そのほか、会食や懇談の機会なども随分作ってもらった。

(13) 最近、おかげさまで、ビッグプランを相当取ってくれたりとか、ナチュールゲルクリームを販売してくれたりとか、そういったところがじわじわと増えてきていて、そういった芽を育てていきたいなと思っているんです。

(14) 幕府が橋をかけようとしたことに猛烈に反対し、お金もだいぶ使ったらしいことがわかってきた。

(15) 夕食すらもカップ焼ソバを少し食べただけで、休みを取ろうとしなかった。

(16) 見渡してみたら意外と近所に、無農薬野菜をちょっと作っている、といった兼業農家の方もいらっしゃることがあります。

これもすべての量的程度副詞において用例が確認された。(11)～(16)の順に言うと、「かなり」は「本」の数量を限定しており、「随分」は「機会」、「相当」は「ビッグプラン」、「だいぶ」は「お金」、「少し」は「カップ焼きソバ」、「ちょっと」は「無農薬野菜」の数量、つまり文中において動詞の対象となる名詞の数量を限定していることが分かる。

こうして実際の用例がすべて確認できるように、すべての量的程度副詞には主体であれ対象であれ名詞の数量を限定する機能が備わっていることが分かる。また、それぞれの量的程度副詞は、表す数量性の大小等を気にしなければ、他の量的程度副詞と入れ替えが可能であるので、それぞれの語は語彙的な制限が弱いと言える。

またそれと同時に、量的程度副詞は様々な数量の内容を限定していることに気が付く。

例えば、「ソウトウ」という語を用いた(７)(13)を取り上げてみる。

（7） 彼のデザインや建築に見覚えのある人は相当いるのではないだろうか。

(13) 最近、おかげさまで、ビッグプランを相当取ってくれたりとか、ナチュールゲルクリームを販売してくれたりとか、そういったところがじわじわと増えてきていて、そういった芽を育てていきたいなと思っているんです。

（7）の「相当」は「彼のデザインや建築に見覚えのある人」の数を表している。また、(13)の「相当」は「取ってくれた」「ビッグプラン」の数を表している。つまり、前者は「人の数」であり、後者は「プランの数」であり、それぞれ種類の違う内容の数量をを「相当」という語が限定しているのである。

もし、このような数量を数量詞を以て表そうとした場合、当然ながら違う数量詞を用いなければならない。「人の数」を表すなら「〜人」だし、「プランの数」なら「〜個」や「〜本」などになる。

つまり、量的程度副詞が何らかの名詞の数量性を表す場合、量的程度副詞はその表される名詞の種類によって様々な解釈がなされるということであり、解釈の内容は限定すべき名詞の種類に依存しているということである。

数量詞の場合、「〜人」とした場合には、それが表せるのは「人の数」だけである。(17)のように、犬の数を表すこともできないし、セミの数を表すこともできない。一方、(18)のように量的程度副詞はこれらの名詞の数量をすべて限定できる。

(17) 【人／*犬／*セミ】ガ100人イル

(18) 【人／犬／セミ】ガカナリイル

こういったことから考えると、量的程度副詞は限定すべき名詞の内容に応じて数量を限定できるということであり、それにより量的程度副詞が数量詞に比べて語としての具体性が低く依存的、付属的な性質を持つものであるということが分かる。

続いて、動きの量を表す場合について見ていく。

３．１．２　動きの量

(19)～(24)は量的程度副詞が動きの量を限定している用例である。

(19) ここはどこから入ってもかなり歩くことになるため、訪れる人は非常に少なく、内房で唯一の未開拓釣り場といえる。

(20) モーはわたしを背負ったまま、もうずいぶん歩いている。

(21) でも先輩は金髪娘ともそうとう遊んでいるんでしょ。

(22) 市木君はコンビニでだいぶ働いたのよね？

(23) 少し走ったところで、アブディラーヒがまた車を止めた。

(24) みんなして、ここでちょっと休むのが、一番よさそうに思うが。

(19)～(24)の順で言うと「かなり」は「歩く」量、「ずいぶん」は「歩いている」量、「そうとう」は「遊んでいる」量、「だいぶ」は「働いた」量、「少し」は「走った」量、「ちょっと」は「休む」量をそれぞれ限定している。

動きの量は、２．３．１において下位分類として「空間量」と「時間量」を設定したが、(19)～(24)の用例はどちらに分類すればよいか曖昧なものが多い。(19)の「かなり」が「歩く」距離に焦点を当てているとすれば「空間量」に分類されることになるし、「歩く」時間であればそれは「時間量」に分類されることになる。しかし当然、歩く距離が増えれば当然歩く時間も増えるのであり、その区分けをすることはここではあまり意味を持たない。

こういった解釈の多様性は共起する動詞の性質に依存するものである。(24)の「ちょっと休む」というのは時間量的な解釈しか許容しないが、同じ「チョット」を用いたものでも(25)のように空間量的解釈を許容するものもある―もちろん(25)は時間的解釈も許容している―。

(25)　ニューヨークは、ちょっと走ると広大な自然公園に入る。

動きの量を表す量的程度副詞がどちらの下位分類に落とし込まれるかは共起する動詞の性質によって変わってくるものである。これは前節で見た、主体や対象といった名詞の数量を限定する場合と同じである。つまり、どういった成分を限定しているかに関わらず、限定すべき概念が潜在的に持つ数量的尺度を、その概念性に応じて限定するのが

量的程度副詞の役割なのである。

例えば、どう考えても時間量を表しているとしかとれないケースもある。それは(26)～(29)のように「寝ル」「待ツ」「経ツ」や「見ツメ合ウ」などと量的程度副詞が共起する場合である。

(26) 私たちもかなり待たされた。

(27) 「やぁ」と手を挙げて、「ずいぶん寝てたね」と目を細めた。

(28) 人々が家に帰ってだいぶたつ。

(29) 顔を離して、また少し見つめ合います。

このような動詞は動きの量を時間量でしか表すことができない。「待ツ」「寝ル」などの動詞が動きの量において時間的な尺度しか想定され得ないからである。

以上より、すべての量的程度副詞は動きの量を限定する働きがあると考えられる。量的程度副詞が表している数量的概念は動作量であったり時間量であったりするわけだが、それは潜在的に共起する動詞が文脈上表わし得る動きの量の種類に応じて量的程度副詞が依存的に機能しているということでもある。

以上、量的程度副詞の解釈の可能性、つまりは量的程度副詞の数量限定の幅について見てきた。ここまでの結論としては量的程度副詞はすべて「主体・対象の数量」「動きの量」を表す。そして、その表す数量的概念は共起する名詞や動詞、または文脈に依存しており、非常に広い幅を有していることが分かった。

３．２　陳述性

続いて量的程度副詞の陳述性について考えていく。

３．２．１　肯定文・平叙文

２．１．３においても述べたように、 程度副詞は基本的に肯定文、平叙文に用いられるものである。量的程度副詞は程度副詞の下位項目なので、当然この陳述的特性を帯びている。(30)～(32)は量的程度副詞が否定文脈で使われないことを表したものである。

(30) *人ガ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】イナイ。

(31) *ゴ飯ヲ【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】食ベナカッタ。

(32) *【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン/スコシ/チョット】遊バナカッタ。

いわゆる「みとめ方」は肯定と否定に二分される。そのうちの肯定側の限定を量的程度副詞が担当する。そして、否定側の限定は第５章で論じる否定程度副詞(「アマリ」「ゼンゼン」など)が担当する。

また量的程度副詞のもう一つの陳述的特性は平叙の文脈で用いられるということである。これは工藤浩(1983)において指摘されたことであるが、その中で平叙文での使用と

命令文での使用の違いを表す例として(33)(34)があげられている(p194)。

(33)　ごはんを【かなり／相当】食べた。　　【平叙文】

(34) ?ごはんを【かなり／相当】食べろ。　　【命令文】　［工藤浩(1983.p194)］

しかし平叙文以外の文というのが命令文だけというわけではない。

中山(1996)は程度副詞と各叙法での共起の可否について調べたものである。その中でも本研究で対象とする量的程度副詞の多くは、「勧誘」「命令」「依頼」の叙法との共起に制限を持つと述べられている。「勧誘」は「～ましょう／～ませんか」、「命令」は「～しろ」、「依頼」は「～してください」がその代表である。(35)～(37)を見ればその共起制限はよく分かる。

(35) *【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン】歩キマショウ　　【勧誘】

(36) *【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン】歩ケ　　【命令】

(37) *【カナリ/ソウトウ/ダイブ/ズイブン】歩イテクダサイ　【依頼】

「勧誘」「命令」「依頼」の共通点は「聞き手に何らかの行為の実現を働きかける」表現形式である。量的程度副詞はこのような表現形式とは共起するのが難しい。それは中山(1996)だけではなく、丹保(1981)、林(1997)、工藤浩(2000)、川端(2000)などでも広く指摘されている。

一方、同じ量的程度副詞であっても、「スコシ」「チョット」にはこのような制限が

ない。

(35)’【スコシ/チョット】歩キマショウ　　【勧誘】

(36)’【スコシ/チョット】歩ケ　　【命令】

(37)’【スコシ/チョット】歩イテクダサイ　【依頼】

つまり、数量性大を表す量的程度副詞は聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式では用いられず、数量性小を表す量的程度副詞はそのような形式でも用いられるということである。こういったことはどのような性質によるものなのだろうか。

３．２．２　聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との共起・非共起

ここまで聞き手に何らかの行為の実現をはたらきかける表現形式との共起の可否が、数量性大の量的程度副詞と数量性小の量的程度副詞とでは異なることを見た。では、なぜその共起の可否に違いが出るのか、それぞれの場合に分けて考える。

３．２．２．１　数量性大の量的程度副詞の主観性

数量性大を表す程度副詞は、なぜ聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式

と共起しにくいのか。

それは程度副詞の根本的な性質を考えると理解できる。石神(1981)には以下のような記述がある。「程度副詞とは、言語主体が頭の中に描く像と、現実の素材との関係性を主体的にとりあげ表したものである。素材とする事象を前にして、どのような程度副詞を用いるかという主体的選択を行なうことは、どのような像を主観的に設定して関係性をとりあげるかということである」(p44)。また森田(2002)にも「程度副詞は、動作性のみならず状態性も含めて、その事柄の呈する程度や分量をどのくらいと話者が認識しての説明的修飾と考えられる」(p107)とある。つまり程度副詞は程度や数量を主体的、主観的に捉えてその程度なり数量なりの限定を行なうものである。

仁田(1991)では聞き手への働きかけの文が成立する条件が述べられている[15]が、そのうちの一つでも条件を満たさなければ働きかけの文は成立しないとしている。量的程度副詞を用いた聞き手に何らかの行為の実現を働きかける文が非文となるのは、この仁田(1991)がいうところの［Ⅱ,b］の条件、「聞き手は、自分の意志でもって、その動きの実現化を計り、その動きを遂行・達成することができる」(p239)に抵触してしまうからである。

---

[15] 仁田(1991)における聞き手へのはたらきかけの文が成立する条件とは以下の通りである(pp239～240)。
［Ⅰ,a］話し手は相手たる聞き手に対して働きかけを行いうる立場・状況にある。
［Ⅰ,b,1］話し手は、相手たる聞き手がある動きを実現することを、望んでいる。
［Ⅰ,b,2］話し手にとって、相手が実現する事態は、都合のよい・望ましい・好ましいものである。
［Ⅱ,a］話し手の働きかけを遂行する相手が聞き手として存在する。
［Ⅱ,b］聞き手は、自分の意志でもって、その動きの実現化を計り、その動きを遂行・達成することができる。
［Ⅲ］命令されている事態は、未だ実現されていない事態である。

量的程度副詞が含まれた文で何らかの行為の実現を働きかけられても、量的程度副詞は話し手が主体的、主観的に数量を限定しているため、聞き手は限定される数量に対するイメージを話し手と共有することができない。そうなると提示された働きかけの「動きの実現化」を計ることができないし、その結果「遂行・達成する」こともできなくなる。それが量的程度副詞と聞き手への何らかの行為の実現を働きかける表現形式を帯びた文の共起を阻むメカニズムだと考えられる。

だが、ここで重要なのは、単に量的程度副詞がこういった叙法とは共起しないという現象的側面ではなく、その現象を引き起こす量的程度副詞が有する根本的な性質にある。量的程度副詞は話し手がある数量の多寡を主観的に認識して限定を行なうという性質を持っている。これは例えば数量詞の持つ概念とは異なる。

数量詞を用いた文(38)と量的程度副詞を用いた文(39)を比較すればその差はよく分かる。

(38) 【１時間/５㎞】歩イタ。

(39) 【カナリ/ズイブン/ソウトウ/ダイブ】歩イタ。

(38)の数量詞が表す「１時間」「５㎞」は非常に客観的なものである。正確な機材さえあれば、どこで誰が測定しても「１時間」は「１時間」、「５㎞」は「５㎞」である。しかし量的程度副詞が表す数量はそうではない。同じ「カナリ歩イタ」でもそれが表す数量は話し手の主観に任される。

そういう主観性のため陳述的制限が生じるのである。

量的程度副詞が有する主観性が共起を難しくするのは、聞き手に行為の実現を働きかける表現だけでない。例えば量的程度副詞と希望を表す「〜タイ」という表現は共起しにくいのだが、この非共起も主観性という概念から説明ができる。

(40)　ぼくはいき〔ママ〕ていろんなことを【*カナリ／*ソウトウ／いっぱい】したいです。

(41)　美味しいものを【*ダイブ／*ズイブン／沢山】食べたい。

(40)(41)は原文では「いっぱい」「沢山」となっているところに量的程度副詞を入れ替え、非文になるかどうかを試したものである[16]。量的程度副詞を用いた場合に不自然な文になることは了解されるだろう。

(40)(41)において量的程度副詞を用いた文が不自然になるのは、限定を行なう対象である行為が未実現であり、実現されていない行為の数量を主観的に捉え、限定を行なうのが難しいからである。そのため希望を表す「〜タイ」を伴う表現と量的程度副詞は共起しにくい[17]。

16　ここでは原文に「いっぱい」「沢山」という量の副詞が使用されているわけだが、当然これらの文は非文にはならない。量の副詞は聞き手に何らかの行為の実現を働きかける形式とも共起し、量的程度副詞とはふるまいを異にするが、それについては次章で詳しく論じる。

17　「カナリシタイ」とか「カナリ行キタイ」といった文を想定すること自体は可能だが、それは「シタイ」「行キタイ」の数量を限定しているのではなく、「シタイ」「行キタイ」程度を限定しているのである。つまり「シタイ」や「行キタイ」という感情が今現在存在するのは確かで、そういった感情は既に実現しているので、「シタイ」程度「行キタイ」程度を限定する意味であれば問題なく成立するのである。

また、量的程度副詞は(42)(43)のように「～ば」「～と」といった条件節の内部での使用も難しい。

(42) そういう国宝を【*カナリ／*ソウトウ／たくさん】抱えれば、国家は安泰である

(43) 「…実際には、【*カナリ／*ソウトウ／たくさん】売れると印税率が増すから、もっと実益は少なくなるんだけど」

条件節というのは実現していない事態を仮定・想定する場合に使われるからである。また(44)(45)のような場合も同じく共起が難しくなる。

(44) ふろで、【*カナリ／*ソウトウ／たくさん】ゆげができるのは、なぜかな。

(45) また、スポーツを【*カナリ／*ソウトウ／たくさん】したボーダーはグルコサミンやコンドロイチンという関節によいサプリメントをあげてください。

(44)(45)は限定を行なうべき事態が個別的な事態ではなく、一般的な事態であり、話し手と聞き手の間で表現すべき数量に対するイメージの共有が必要となる場面であるので、量的程度副詞による主観的限定が行ないにくいと考えられる。例えば、(44)を一般的な事態ではなく特定的で個別的な事態に変えて表現するならば、(44)’のように自然な表現となる。

(44)’昨日ノ風呂デ、【カナリ／ソウトウ／タクサン】ユゲガデキタ。

特定的な個別的事態であれば、その事態について話し手が「できた湯気」の量を限定するのは「カナリ」でも「ソウトウ」でも構わないということである。要するに(44)(45)などはある決まった事態を特定して限定しているのではなく、一般的な事態として取り上げているので、そこに主観的な限定が加えられないのである。

３．２．２．２　数量性小の量的程度副詞の客観性

ここまでの議論で、数量性大の量的程度副詞がある種の主観性を有するために聞き手に何らかの行為の実現をはたらきかける表現形式では用いられないことがわかった。では、なぜ数量性小を表す量的程度副詞は数量性大を表す量的程度副詞とはふるまいを異にするのだろうか。

この問題に関しては川端(2000)においてはこのような解釈がなされている。「スコシ」「チョット」は「何らかの存在は否定しないが、量の大小に関する想定や一定量という幅の概念を排除することを意図した発話である」。「「存在する」という事実の認定の表示として機能するため、背後のスケールによって規定されることから脱却する。すなわち、情報を理解する上での個人差を考慮外とした客観的な情報になるため、確定的な指示情報になることができる」(p71)。

例えば、「チョット待ッテクダサイ」のような言明があった場合、話し手は待つべき時間の幅が「長い」ということを排除することを意図して「チョット」という語を用い

ており、そこには「チョット」の数量の大きさに関する話し手と聞き手の間における合意が既にできている、ということなのである。そのため数量の限定方式において主観的な方向に偏る数量性大の量的程度副詞に対して、数量性小を表す「スコシ」「チョット」は客観的な方向に偏るのである。

ただし、大前提として数量性大の語にしても数量性小の語にしても、数量詞のような確定的な数量情報にはなっていない。そのため、主観的な方向に偏るとか、客観的な方向に偏るというのはあくまでも相対的なものである。

工藤浩(2000)は「スコシ」や「チョット」を「評価性が薄い」語とし、これらが聞き手に行為の実現を働きかける表現においても使用されることを示している(p226)。

川端(2000)は「客観的」という語を使い、工藤浩(2000)は「評価性が薄い」という語を使ったが、結局両者が表すところは同じである。評価とはあくまでも主観的なものである。評価性は主観性に裏付けられている。

また川端(2000)の解釈が正しいかどうかは別としても、聞き手に何らかの行為を要求する文が成立するということは、それが聞き手に対して何らかの行為の実現を働きかけること自体が遂行可能な情報として機能しているということを意味している。そういった事実が「スコシ」「チョット」の場合、相対的に高い客観性を有しているという事実を担保している。

こういった性質を有するため、「スコシ」「チョット」は数量性大を表す量的程度副詞が共起できなかった「〜タイ」を用いた希望を表す文や条件節の入った文などでも問題なく使用できる。(46)(47)である。

(46) 「【すこし／チョット】髪の毛を切りたいのですけど。かまわないでしょう？」

(47) 【スコシ／ちょっと】考えれば分かるとおり、マイカーをもっている人が日常、電車やタクシーを適宜利用するのとまったく同じことです。

このようなことから、同じ量的程度副詞においても数量性大を表す語と数量性小を表す語では陳述的な制限が変わってくることが分かる。

その理由はその語が持つ主観性の高さ―反対にいえば客観性の高さ―と密接な関係がある。数量性大を表す量的程度副詞は主観的な基準を以て表すべき数量を限定するため、話し手と聞き手の間で数量性の合意が求められる叙法においては用いることができない。しかし数量性小を表す量的程度副詞はその主観性が相対的に低く客観性が高いと考えられる。それは数量性小を表す語がそもそも数量の大小の幅を想定しているものでないからである。そのために話し手と聞き手の間で数量性の合意に関するすり合わせを行なう必要がなく、このような叙法においても問題なく使われるのである。

３．３　名詞性

続いて、量的程度副詞の名詞性について考えていきたい。量的程度副詞は当然伝統的な品詞分類では副詞に分類されるわけだが、名詞的な性格を帯びている部分もある。た

だし、その名詞的性格の帯び方も同じ量的程度副詞の中で異なりを見せると考えられる。助詞の後接を許容するかどうかという観点から見ていこう。

名詞性の高低を判断する方法としては、それぞれの副詞の後ろに助詞の「ハ」や「ノ」が接続するかどうか、その他の語による修飾を受け得るかどうかを観察するというやり方をとる。この名詞性の高低のテストの理路に関しては２．３．３で述べてある。

３．３．１　「ハ」の後接

まず、取り立て助詞の「ハ」がそれぞれの量的程度副詞に後接可能かどうかを見ていこう。

(48)　他に文房具代や通学の電車賃もいるし、少しは後期の教科書代などに残しておかねばならないし、金欠病は慢性でした。

(49)　「窓がないからに決まっているじゃないか。少しは頭を使って、自分で考えてみろよ」

(50)　「ほーう、お前が話のあった結城か、お前、工作機械にちょっとは経験があるんか」

(51)　琥珀っぽい茶色の瞳を近くで見ると、ちょっとは優しいところもあるように思えた。

(48)～(51)は量的程度副詞に「ハ」が後接している例である。これを見ると分かるように、数量性大を表す量的程度副詞に「ハ」が後接する例は見つからなかった。また作例を試みても「カナリハ」「ズイブンハ」などが規範から逸脱していることはすぐに分かる。こういったことから数量性大を表す量的程度副詞には「ハ」で取り立てるだけの

実質的な概念が含まれていないことが分かる。

３．３．２　「ノ」の後接

連体格助詞「ノ」が量的程度副詞に後接するかどうかについて見てみる。

(52)　卵白のなかに、ビオチンの吸収をさまたげるアンチビタミンがあるが、かなりの卵を食べないとその作用はあらわれない。

(53)　おかげで、相当のデータが蓄積されましたがね。

(54)　少しのおこづかいをあげただけで大喜びするから、「孫よりかわいい」となる。

(55)　長子はちょっとのあいだ、黙っていたが、「どこにヒバリの巣があるか分かるの？」　と言った。

「カナリ」「ソウトウ」「スコシ」「チョット」に関しては(52)～(55)のような例が数多く見つかった。それぞれ「かなり」は「卵」の数量を、「相当」は「データ」の数量を、「少し」は「おこづかい」の量を、「ちょっと」は「あいだ」の時間量を限定している。

(52)～(55)の例からも、量的程度副詞が後接する名詞成分の性格に依存して様々な解釈を見せていることが分かる。「あいだ」という語には時間的尺度以外の尺度を想定す

ることができない。そのため「ちょっと」は時間量を表す解釈になるのである[18]。

「ズイブン」「ダイブ」に関しては「ノ」を介して後接する名詞の数量性を限定している用例は確認することができなかった。実際、量的程度副詞が「ノ」を介して後接する名詞成分を限定する際の解釈について詳細に論じた笹本(2004)においても、「ズイブン」「ダイブ」は考察に含まれていない。

ところで、量的程度副詞が「ノ」を後接させ名詞を限定している場合、前述したように様々な意味解釈を表すのであるが、基本的に限定されるべき名詞の数量的側面を限定している。これは当然だと思われるかもしれないが、そうとも言えない。例えば数量詞が「ノ」を介して何らかの形でその後ろの名詞にかかっている場合について見てみる。

(56)　3000㎞ノ高速道路ヲ走ッタ。

(57)　カナリノ高速道路ヲ走ッタ。

(56)の場合、数量詞「3000㎞」は「ノ」を介して「高速道路」にかかっているわけだが、解釈としては「道路の長さが30000㎞の高速道路を走った」ということになる。一方(57)は「かなりの数の高速道路を走った」という解釈になる。つまり「3000㎞」という数量詞は、走った高速道路の「属性」としての距離を表しているのであり、「カナリ」は走った高速道路の数量を表しているのである[19]。

---

[18] この「ノ」を介して量的程度副詞が表す意味に関しては佐野(1996)、笹本(2004)などに詳しい。

[19] このことは加藤(1997)においても言及されている。数量詞はそのもの自体の存在個数を表す存在

しかし、この数量詞と量的程度副詞が副詞的に用いられる場合には両者は意味解釈の違いをもたらさない。

(58)　高速道路ヲ3000㎞走ッタ。

(59)　高速道路ヲカナリ走ッタ。

(59)の場合、「カナリ」が表しているのは「走った」空間量もしくは時間量である。前後の文脈がないので断定できないが、もし空間量を表していると考えた場合には(58)の「3000km」とは意味的に重なる部分が出てくる。つまり(58)(59)が同じ現実を表している可能性があるのである。

しかし、(56)と(57)では同じ現実を表している可能性はない。前述したように(56)の「3000km」は高速道路の「属性」としての距離を表しているのであり、(57)の「カナリ」は走った高速道路の数を表しているのである。ここでは「カナリ」を例として取り上げたが、この「カナリ」の部分に「ソウトウ」「スコシ」「チョット」を入れてみても結果は同じである。

こういった解釈がずれこむという事実は、量的程度副詞の持つ名詞性が希薄であることを示している。(56)の「3000㎞ノ高速道路」における「3000㎞」は「高速道路」の属

数量詞と、そうではない非存在数量詞にわけられる。そして「ノ」を介して―つまり連体数量詞として―後接する名詞にかかっていく場合には、前者は「属性」を表し、後者は「集合的認知」を表すとしている。

性を表しているわけだが、属性というのはそもそも実質的要素が必要不可欠なものである。例えば、「北陸ニ位置スル高速道路」や「桜ガ見エル高速道路」や「東京カラ名古屋マデツナガル高速道路」などが属性である。その一つとして「3000㎞ノ高速道路」がある。つまり属性として機能するためには後接する名詞「高速道路」を他の高速道路と区別するための実質的概念性を必要とするのである。しかし「カナリ」をはじめとした量的程度副詞は語として実質的な概念を持ちえないため、「〇〇ノ高速道路」といった場合に属性的解釈がなされずに、数量的解釈に落ち着くのである。

３．３．３　被修飾

名詞的性格を判断するための最後の項目は各量的程度副詞が「被修飾語」を受けるか、という点である。量的程度副詞には他の語による修飾を受けるだけの実質的概念が備わっているだろうか。

(60)　ごく少し左に傾いているが、母屋に比べれば大したことはなく、左にそりかえっている程度。

(61)　ほんのちょっと会わなかっただけなのに、恋人の姿をひと目見ただけで、ジェイドの胸は高鳴った。

(60)(61)を見ると明らかなように「少し」は「ごく」の、「ちょっと」は「ほんの」

の修飾を受けている。これは工藤(1983)や三宅(2003)でも指摘されていることである。

一方、数量性大を表す量的程度副詞を何らかの語が限定している用例は見つからなかった。作例を試みてみても、「ヒジョウニカナリ」「トテモズイブン」「チョットソウトウ」「タイヘンダイブ」のような語句が逸脱性を有していることはすぐに了解されるだろう。こういった性格は量の副詞「タクサン」が「トテモタクサン」というように修飾を受け付けることとは対照をなしている。これについては次章で詳しく述べる。

３．３．４　名詞性の高低の異なり

ここまで、「ハ」と「ノ」の後接の可否と他の語による修飾を受けるかという観点から量的程度副詞の持つ名詞的性格について考えてきた。指摘しておくべきことは、同じ量的程度副詞に属していてもそれぞれの名詞性の高低が異なりを見せるということである。この名詞性という観点から言うと、量的程度副詞は３つに分けられる。

(62)「ズイブン」「ダイブ」…「ハ」や「ノ」を後接させない。他の語による修飾も受けない。

(63)「カナリ」「ソウトウ」…「ノ」を後接するが、「ハ」の後接はできない。他の語による修飾も受けない。

(64)「スコシ」「チョット」…「ハ」や「ノ」を後接させることができる。他の語による修飾も受ける。

こういったことから単純に考えると、(62)～(64)の順に名詞的性格が強くなると考えられる。特に数量性小を表す量的程度副詞は３．２でも論じたが、陳述的な部分においてもその他の量的程度副詞とのふるまいの違いが観察される。そしてそれは語の持つ主観性の相対的な低さ―客観性の高さといってもよい―に起因している。名詞性が―あくまでも相対的に―高いということは客観性が高いということにつながり、こういった名詞性や客観性の高低がそれぞれの語のふるまいを左右していることが分かる。

３．４　まとめ

本章では、量的程度副詞の性格を数量性、陳述性、名詞性という観点から見てきた。ここまでの過程で得られたことをまとめてみよう。

まずは数量性についてである。量的程度副詞がどのような数量を限定するものかについて論じた。その結果、量的程度副詞はすべて「主体・対象の数量」「動きの量」を表すことが分かった。そして、その表す数量的概念は共起する名詞や動詞、または文脈に依存しており、共起する成分が想定する尺度に応じて解釈されるため、非常に広い解釈の幅を有しているということが分かった。

次は陳述性である。量的程度副詞はまずは肯定文脈で働く。しかし肯定文脈であればどのような叙法にも用いられるわけではない。「聞き手に何らかの行為の実現を働きかける」形式を帯びた表現、すなわち「勧誘」「命令」「依頼」といったような表現の文脈では用いられない。それは量的程度副詞が有する主観性のためである。そのため「勧

誘」「命令」「依頼」以外のモダリティを帯びている場合でも、聞き手と話し手がそこで話題となる数量性を共有できない場合には量的程度副詞は用いられないことが分かった。

ただし、「スコシ」「チョット」のような数量性小を表す語はふるまいを異にする。この２語は数量性大の語とは違い、表す数量の幅が極めて小さく、話し手と聞き手の間で数量性のイメージを簡単に共有できる。そのため、この２語を用いた数量性は相対的に客観性を帯びた情報として存在することになる。故に、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式とも共起が可能なのである。

最後は名詞性である。量的程度副詞は名詞性の高低という観点から考えると３つに分類されることが分かった。その中でも「スコシ」「チョット」は名詞性が相対的に高く、客観的な性質を有しているということが分かる。これが陳述的側面を含めた語のふるまいに大きな影響を与えていることが示唆された。

第４章　量の副詞

本章では量の副詞について論じる。具体的な論述に入る前に量の副詞という語群について再度確認しておこう。

量の副詞は、定義としては「数量限定のみを行なう副詞」である。「のみ」という語があるのは、この語がないと前章で論じた量的程度副詞も量の副詞に組み込まれてしまうからである。量的程度副詞は「カナリ面白イ」のように程度限定にも用いられるため、量の副詞とは一線を画す。そのため量の副詞は、(１)の下線部には入るが(２)の下線部には入らないものであるということになる。

（1） 金ガ＿＿＿＿＿＿＿アル。

（2） ＿＿＿＿＿＿面白イ。

この(１)(２)のテストから、量の副詞であると導き出せる代表的なものは(３)のようなものである。

（3） イッパイ、タクサン、タップリ、ドッサリ

このような合意の下、本章では量の副詞の性格・性質について考えていく。

４．１　数量性

まず、量の副詞の数量性がどのような形で実現されているかを見ていく。

４．１．１　主体・対象の数量

（４）～（７）は量の副詞が主体の数量を限定している用例である。

（４）　生ものには酸素や酵素がいっぱい入っています。

（５）　だから町には喉を潤すための生ジュース屋がたくさんある。

（６）　ひとつは多彩な具がたっぷり入ったイカめし。

（７）　あの人については話がどっさりあるんです。

（４）～（７）の下線で表示した量の副詞は、すべてがそれぞれ主体として表されている名詞の数量が大であることを表している。「いっぱい」は「酸素や酵素」、「たくさん」は「生ジュース屋」、「たっぷり」は「具」、「どっさり」は「話」の数量を限定している。

続いて対象の数量を表す場合である。

（８）　人形とぬいぐるみをいっぱい持っている。

（9） わたしたちのくらしは，石油や石炭をたくさん燃やしてエネルギーを得るしくみになっています。

(10) だとしたら、新鮮な野菜をたっぷり食べられる、質の良い食事を出すレストランをみんなが求めることです。

(11) ここは海港都市で、奢侈商品・高価な宝石・すばらしく大粒の真珠などをどっさり積みこんだインド海船が続々とやってくる港である。

（8）～(11)の量の副詞も、文中で対象的役割を果たす名詞の数量を限定している。それぞれ「人形とぬいぐるみ」「石油や石炭」「新鮮な野菜」「大粒の真珠」の数量をそれぞれが表している。

このようなことから、量の副詞が主体や対象の数量を表すことは間違いない。仁田(2002)でも「典型的な量の副詞の中心的な用法は、主体や対象の個体の数量限定である」(p192)としてある。

しかしここで一つ指摘しておかなければならないのは、それぞれの副詞の互換性の問題である。例えば(5)における「生ジュース屋がたくさんある」の「たくさん」の部分に他の量の副詞を入れてみると、その自然さが失われる場合がある。

（5）’生ジュース屋が【たくさん/イッパイ/?タップリ/?ドッサリ】ある。

（5）’のように「イッパイ」以外の語は、「たくさん」の代わりに用いられるとまったくの非文とは言えないかもしれないが、不自然さを有する文となってしまう。これは

量の副詞の語彙的な制限のためである。

まずこの語彙的な制限として考えられるのはそれぞれの副詞が数的なものを表すか、量的なものを表すか、ということである。(12)はそれぞれの副詞が「人」の数を限定している場合である。

(12)　広場ニ人ガ【イッパイ／タクサン／?タップリ／?ドッサリ】集マッテイル。　【数的】

「イッパイ」「タクサン」は自然だが、「タップリ」「ドッサリ」を用いると不自然である。

では量的な尺度を限定する場合はどうであろうか。(13)は「水」の量を限定している場合である。

(13)　水ヲ【イッパイ／タクサン／タップリ／ドッサリ】買イ込ンダ。　【量的】

この場合は全ての量の副詞において、不自然さは感じられない。

(12)(13)から考えると「イッパイ」「タクサン」は数的尺度の限定にも量的尺度の限定にも用いられ、「タップリ」「ドッサリ」は量的尺度の限定に用いられやすい傾向があることが指摘できる。

(14)(15)は「イッパイ」がそれぞれ数的、量的尺度の限定に用いられている例である。(16)(17)は「タクサン」の例である。

(14) しかたないので林田とふたりで上野公園というところをウロウロしてみた。テントがいっぱいあった。 【数的】

(15) 酷な自然環境の中で元気に暮らしている人たちの食べ物には、きっと元気の素がいっぱい詰まっているはず。 【量的】

(16) 実力を認めてくれる人はたくさんいた。 【数的】

(17)「香川県人は、うどんをたくさん食べるので、塩の摂取量が多く、脳卒中が多いそうですね」 【量的】

飛田・浅田(2004)『現代副詞用法辞典』を見るとこういった量の副詞の語彙的性格についての言及が見られる。「タップリ」は「豊富・大量消費の暗示」、「ドッサリ」は「重量感を伴った多量の暗示」と記述されている(p66)。この記述は極めておおざっぱなものではあるが、「タップリ」「ドッサリ」が数的な尺度の限定には用いられにくいという緩やかな語彙的制限を持つことは分かる。

４．１．２ 動きの量

続いて動きの量である。仁田(2002)では量の副詞が動きの量を表すこともないわけではない、とした上で「量の副詞にあっては、動きの量限定は、中心的な働きではない、周辺的な存在である」(p192)としているが、そのあたりも含めて確認をしていこう。

４．１．２．１　「イッパイ」「タクサン」

まず「イッパイ」が用いられている用例(18)(19)である。

(18)「大晦日は勝って、いい正月を迎えたい。決勝戦だから、いっぱい動いてレベルの高いところを見せないとね」

(19)「守屋君たちも入ったら？　今日、いっぱい歩いたんだし」

(18)(19)の「いっぱい」はそれぞれ「動く」量、「歩いた」量を表していると言える。こういう用法においては量的程度副詞とは目立った違いはない。

次に「タクサン」が用いられている用例(20)である。

(20)　久しぶりにたくさん歩いて疲れもしたが、何よりも頭の中が混乱していた。

(19)の「いっぱい」と(20)の「たくさん」は「歩いた」量を限定しているわけだが、これらの場合「歩いた」空間量を限定しているのか、時間量を限定しているのかは曖昧である。もちろんそれを特定することにあまり意味がないことは既に述べてあるが、量の副詞も「時間量」解釈を取り得るのであろうか。

３．１．２では量的程度副詞が「寝ル」「待ツ」などといった動詞と共起する場合には、時間量の解釈がなされることを述べた。それはそれらの動詞が限定を受けるべき尺度と

して時間的な尺度しか内包していないからである。用例を見てみよう。

(21) アサコはおばを見つけると駆けだし、おかあさん、いっぱい待った？と英語で言いながら、おばと抱き合った。

(22) 久しぶりに３連休をとって、イッパイ寝てしまった朝の出来事です。

(21)(22)は「イッパイ」がそれぞれ「待ツ」「寝ル」と共起している例である。このことから「イッパイ」は時間量を限定する機能もあることがわかる。しかし、この「イッパイ寝ル」や「イッパイ待ツ」という表現は―もちろんこうやって用例が見つかる以上日本語として存在しているわけだが―多少規範から外れた表現であるという印象を受けることも確かである。

また「タクサン」の場合も(23)のような例が見つかる。

(23)「楽しかったわ。お酒も飲んだし、美味しいものも食べたし、男たちともたくさん寝たわ」

(23)の場合、「たくさん」は「寝た」という動詞と共起しているわけだが、この場合の解釈は「寝た」時間量を表しているわけではないことはすぐに分かる。また「タクサン」が「待ツ」と共起する例は見つからなかった。

しかし、インターネット上の文章に対象を広げて用例を探してみると、「タクサン」や「イッパイ」が「寝ル」と共起している例はわずかながら見つかる。

(24)　もうこの時期になったらお産に備えてたくさん食べてたくさん寝てましたよ。

(25)　やること沢山なのにいっぱい寝たい。

(21)～(25)を鑑みると、「イッパイ」や「タクサン」の時間量的解釈は、規範から離れた砕けた表現なのではないかという感を受ける。

また、量的程度副詞が時間的概念を含んだ動詞と共起した(26)～(28)の例においても、ここに「イッパイ」や「タクサン」を入れると時間量の解釈が成り立たず、おかしな文になることが分かる。

(26)　それから【かなり／*タクサン／*イッパイ】たって警察官が桜井の原稿を持って来てくれた。

(27)　午後四時を【かなり／*タクサン／*イッパイ】過ぎた。

(28)　もし【かなり／*タクサン／*イッパイ】経過しても駄目なら、調べてしっかりもう一度記憶しておく。

ここまでのことを総合的に考えてみると、「イッパイ」「タクサン」においては「動きの量」を限定する用法はあるが、その中の特に「時間量」を表す用法は多少砕けた表現としてのみ存在するのではないかと考えられる。(24)(25)がまさに砕けた表現であり、数量を表すという「イッパイ」「タクサン」の基本的性質から少しずつ用法がずれて、許容されてきた表現なのではないだろうか。

４．１．２．２　「タップリ」「ドッサリ」

次に「タップリ」が主体や対象といった特定の名詞の数量を限定せず、動詞自体が内包する数量性を限定している＝「動きの量」を限定している例である。

(29)　６日間で十七万九千円。　自由時間にハワイ観光もたっぷりできます。

(30)「かけて行ったよ」が、この曲の一番の聞かせ所です。声をたっぷりのばして歌いましょう。

この場合、(29)(30)の「たっぷり」が何らかの数量を表していると言えるだろうか。(29)の「たっぷり」は「ハワイ観光ができる」時間量、(30)は「声をのばす」時間量を表していると言えるかもしれないが、この語が焦点を当てているのはその時間量ではなくて、それぞれの文の中で表現された内容の実現のされ方・あり様ではないだろうか。

(29)(30)において「タップリ」がそれぞれ限定しているものが一義的には時間的なものではあるのは確かである。しかし「タップリ」が限定するのは、その「時間量」の大小というよりも、ハワイ観光をしたり、声を伸ばしたりする「時間」がどのような形で実現されるかという部分ではないか。

ある行為や動きがどのように実現されるか、という質的な部分を限定するのは情態副詞の担当する分野である。量の副詞は数量的な部分を限定するという役割を以て、ある動きの実現のされ方のうちの質的な部分を限定する役割を担っているわけだが、この

「タップリ」の文中でのふるまいを見ると、数量的な部分が希薄になり、その他の情態的な部分―つまり「どのように」という部分―が強調されているように感じられる。

これは量的程度副詞には感じられない部分である。量的程度副詞はあくまでも共起する成分の数量的尺度を限定する働きだけを担っている。文の中の動詞が「どのような」情態で動きを実現しているかにはほとんど関わらないのである。

(31)の例はその「タップリ」の情態性をさらによく表していると考えられる。

(31)　ヨーロッパの邸宅のような空間にも夢心地　広東料理の“真髄”をたっぷり　ホテル　グランパシフィック　メリディアン広東料理「楼蘭」

(31)はあるホテルのレストランの宣伝文句である。「広東料理の真髄をたっぷり味わってください」とか「広東料理の真髄をたっぷり込めました」といった内容であるのだが、そもそも「真髄」というのは数や量で表せるものなのだろうか。表せないのだとしたら、その数量で表せないものの数量を、どうやって「たっぷり」は限定しているのだろうか。「たっぷり」は数量を限定しているのではなくて、「真髄を「十分に」味わってください」というように、「真髄の味わい方」の実現のされ方、つまり情態的な側面を限定しているのだと考えられるのである。

次に、「ドッサリ」が用いられる例も見ていこう。

(32)　腑抜けたように腕から力が抜けてゆき、胸に抱えた荷物をどっさり落としてしまいそうだ。

(32)は「荷物」という語がヲ格でマークされている。そのため、「落とす」「荷物」の数量が「どっさり」という量の副詞で限定されていると見られるかもしれないが、そのように解釈する日本語ネイティブ話者が存在するだろうか。

この(32)では「荷物を落とす」という行為の実現のあり方・あり様が、重量感を語彙的に含んだ「どっさり」という語で限定されていると考える方が妥当である。

しかし例えば、共起関係だけを取り出し、「どっさり」の位置に他の量を表す語を入れてみると(32)’のようになるが、この場合括弧内の語が限定するのは「落とした荷物」の数量である。

(32)’ 胸ニ抱エタ荷物ヲ【カナリ／スコシ／タクサン】落トシタ。

もちろん(32)においても「どっさり」という語が重量感を表すため、その重量感の前提として、「胸に抱えた荷物」の量が大であるという量的意味も含んでいることは間違いないが、(32)の「どっさり」が焦点を当てているのは「多量」という数量的概念の方ではなく、「重量感」というその動きの実現のされ方・あり様の方である。

ここまで見てきた(29)～(32)のことを総合的に考えてみると、「タップリ」「ドッサリ」という語は、ある特定の名詞の数量を表さない場合―つまり主体や対象の数量を限定しない場合―に用いられると、その動きの数量的側面を限定するのではなくて、動きの実現のされ方を限定する方に傾くのではないだろうか。それはすなわち典型的な情態

副詞への近づき、とでも言えるだろう。

２．１．２でも述べたように、情態副詞は工藤浩(2000)の言葉を借りると「動作や変化のしかた(様態)、あるいは出来事の付随的なありかた(状態)を表して、主として動詞を修飾する副詞である」(p166)とされている。もちろん量の副詞はすべて「出来事の数量的なあり方を表して動詞を修飾する」ということでこの情態副詞に属するものである。

しかし「イッパイ」「タクサン」と「タップリ」「ドッサリ」では明らかに共起する動詞に対する関わり方が違う。この４語は共通的に共起する動詞の数量的側面を限定する機能を有している。しかし、後者の２語は共起する動詞に対して表す数量的情報に加えて、その数量性がどのように実現されているか、どのようなあり方・あり様なのかに対する情報をも色濃く含んでいるのである。

以上、量の副詞の数量性について考えてきた。まとめると、まず主体や対象の数量を限定する機能はすべての量の副詞が持つことが分かった。仁田(2002)も述べたように、やはりこの語群の典型的な用法はこの主体や対象の数量限定であろう。「動きの量」を表す例に比して驚くほど用例の絶対数が多い―「動きの量」を表す例はほとんどない―。

そしてその「動きの量」を限定する機能に関してはバラつきが見られる。すなわち「イッパイ」「タクサン」は「動きの量」を表す機能はあるとしてもその中でも特に「時間量」を表す機能は弱い。また、「タップリ」「ドッサリ」に関しては動きの量を表す場合には、その数量的な側面よりも共起する動詞の動きの実現のされ方・あり方の方を限定する力が強くなっており、純粋に「動きの量」を表しているとは言い難い。

このことから「イッパイ」「タクサン」と「タップリ」「ドッサリ」では同じ量の副

詞に属しながらも方向性の違う語群として下位分類すべき可能性を有していると考えられる。

４．２　陳述性

３．２では、量的程度副詞は聞き手に何らかの行為の実現を働きかける形式を帯びた表現においては用いられないということについて論じた。量の副詞の陳述性を考える際にもこの形式との共起関係を考えていくことが大きなポイントとなる。

４．２．１　聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との共起

量の副詞は量的程度副詞とは違い、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式の中でも問題なく用いられる。まずはこのことを用例をあげて確認しておこう。

(33)「先生、東京のディスコのお話いっぱいして」　【依頼】

(34)「何回でもいいよ。いっぱいしよ」　【勧誘】

(35)「たくさん召し上がれ」　【命令】

(36) そして肌のふれあう遊びをたくさんしてください。　【依頼】

(37)　ご飯にたっぷりかけて食べてください。　【命令】

(38)　唇にはほんのりやさしいフルーツ色のグロスをたっぷりのせましょう。【勧誘】

(33)～(38)は「イッパイ」「タクサン」「タップリ」がそれぞれ「勧誘」「命令」「依頼」といった形式を持った表現の中で数量限定機能を発揮していることを示している。前章で論じたように、当然この(33)～(38)の下線部でマークした量の副詞の位置に数量性大の量的程度副詞を入れると、不自然な文になってしまう。(33)'～(35)'を見れば一目瞭然である。

(33)'＊「先生、東京のディスコのお話【カナリ／ダイブ】して」　【依頼】

(34)'＊「何回でもいいよ。【ソウトウ／ズイブン】しよ」　【勧誘】

(35)'＊「【カナリ／ソウトウ】召し上がれ」　【命令】

しかし、なぜ同じように数量限定をするものとして使われているにも関わらず、量的程度副詞は用いられず、量の副詞は用いられるのであろうか。

量的程度副詞が聞き手に何らかの行為の実現を働きかける文末形式を帯びた文と共起しないのは、量的程度副詞自身が持つ主観性のため、と前章では結論付けた。しかし、そもそも何らかの数や量を表す際に数量詞を用いて確定的に表現しない以上、量的程度副詞が表す数量も、量の副詞が表す数量も、ある種の主観性を帯びることになりはしないだろうか。

こういった副詞と文末表現との共起の問題については、以前からしばしば論じられて

きた。量的程度副詞と量の副詞の問題について直接論じたものは管見では見当たらないが、その周辺に位置する研究はたくさんある。それを統括してみる。

４．２．２　評価性と情態修飾性

結論から言うと、量的程度副詞と量の副詞の聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との共起可否の差は、量的程度副詞の内包する評価性と量の副詞の持つ情態修飾性によるものである。

まず量的程度副詞が評価性を内包するものであることは既に２．２．１において述べた。評価とは田和(2010)によると「「一般的常識」や「先入観」といった話し手の内面にある価値尺度の範囲の内で、どこに位置づけられるのかを品定めすること」(p28)である。つまり、ある事象の数量を「カナリ」とか「ソウトウ」という言葉を使って限定することは全的に話し手の内面にある価値尺度のあり方に根拠を持つのである。だから、その「カナリ」「ソウトウ」という語で限定された数量性は第三者に対する確定的な数量指示情報として機能しない。

しかし情態副詞に属する量の副詞は違う。宮島(1983)は情態副詞の性質について以下のように述べている。

ある意味では、情態副詞も属性形容詞も、すべて評価のうえになりたっている。

かれは　ゆっくり　あるいて　いた。

花が　きれいに　さいた。

というとき、ハナシテが「ゆっくり」「きれいに」と評価したから、これらの単語がつかわれたのであって、ほかの人がみたら、ちがった評価をしたかもしれない。しかし、このばあい、評価すなわちハナシテの主体性は、これらの単語をえらびだしてつかうことのなかにあり、単語の意味自体のなかには、評価的な要素はない、すなわち、だれもが「ゆっくり」「きれいに」と評価すべく、対象にそのような客観的属性がそなわっているものとして表現しているのである。(pp109-110)

また工藤浩(2000)の解釈も見てみよう。

太郎は　上手に　歌を歌った。

ご飯が　おいしく　炊けた。

これらは、文の叙述内容としての、行為(中)の様態や、出来事の(成立後の)状態を価値の側面から限定するものであり、叙述内容の内部にあってそれを詳しくする(情態副詞に似た)修飾成分である。そのため、これらは、

太郎、上手に　歌を歌え／歌おうよ／歌ったか。

ご飯が　おいしく　炊けない／炊けたらなあ／炊けたか。

など、種々の除法性をもつ文に自由に用いられ、「文の陳述的なタイプ」に基本的に制限がないのである。(p223)

工藤浩(2000)も宮島(1983)とほぼ同様の内容を論じている。この二つの引用から言えることは、情態副詞は、ある事象を「そのような客観的属性がそなわっているものとして」表現したり、「価値の側面から」限定するものなのである。ある事象の数量の大小の基準をいったん自分の内部で引き受けて個人的に評価する量的程度副詞とは性質が異なるのである。

ただし、その違いというのは実際判別が難しいものであることも確かである。宮島(1983)が言うように、ある数量を限定する際、「タクサン」という量の副詞を選び出すという点においては話し手の「主観性」「主体性」が発揮されてしまうからである。量的程度副詞においては、この「主観性」「主体性」は話し手がある数量を自分の中の基準に照らし合わせて限定するという過程において発揮される。

結果的に、どちらの場合にも数量を限定する上での主観的判断が入ってくることになり、談話レベルで「カナリ食ベタ」「タクサン食ベタ」と表現された場合には、我々にはそこに内包された性質の違う「主観性」を区別できないのである。

しかし、そういう「主観性」の違いがあるからこそ、逆説的ではあるが、聞き手に何らかの行為の実現を要求する表現形式での使用において量的程度副詞と量の副詞とでは共起の可否が変わってくるのである。

量の副詞は評価的な属性を有していない。「評価性」＝「主観性」の反対、つまり「客観性」を有している。だからこそ前章でも紹介した仁田(1991)による聞き手への働きかけの文が成立する条件の一つである［Ⅱ,b］「聞き手は、自分の意志でもって、その動きの実現化を計り、その動きを遂行・達成することができる」(p239)に抵触しない

のである。

少なくとも量の副詞が用いられた聞き手へ何らかの行為の実現を働きかける文は「自分の意志でもって、その動きの実現化を計り、その動きを遂行・達成することができる」だけの数量的具体性＝客観性を帯びているということだけは間違いないのである。

４．２．３　量の副詞の客観性

ここまでの議論から「イッパイ」「タクサン」「タップリ」が量的程度副詞とは違い、ある種の客観性を内包し、聞き手へ何らかの行為の実現を働きかける形式でも用いられることが分かった。しかし、「ドッサリ」の場合はどうだろうか。

「ドッサリ」も量の副詞に含まれる語である。しかしこの語が「勧誘」「命令」「依頼」のモダリティ表現と共起している用例は、本研究の調査対象のコーパスからは抽出することができなかった。ということは、「ドッサリ」は「イッパイ」「タクサン」「タップリ」とは性質の違う語だということになるのだろうか。

結論を先取りすると、「ドッサリ」も後者３語と根本的な性質は変わらないと言えるわけだが、それを導き出すための理路としてまず(39)(40)の用例を見られたい。

(39)　あの助平爺こ、お金でもどっさり持っていれば話は別さ。

(40)　死にたくない、死にたくない、生まれてきたばかりで死ぬなんてひどすぎる、チョコレー

トというものをどっさり食べてみたい、優しい老人のそばにいたいと。

(39)(40)はそれぞれ「ドッサリ」が用いられ、何らかの数量を限定している例である。この「ドッサリ」の部分には数量性大を表す量的程度副詞―「カナリ」「ズイブン」「ソウトウ」「ダイブ」―が代わって入ることができない。

まず(39)であるが、これは「どっさり」のあとに条件節を表す「ば」という助詞が続いている。３．２．３でも述べたように、量的程度副詞は語自体が持つ主観性のために条件節では用いられない。だから「カナリ持ッテイレバ」というような言い回しは非文になる。

また(40)も同じである。この「どっさり」の後に「食べてみたい」という表現が続いているが、この希望を表す表現とも量的程度副詞は共起しない。限定を行なう対象である行為が未実現であり、実現されていない行為の数量を主観的に捉え、限定を行なうのが難しいからである。

このような事実から考えると「ドッサリ」も基本的には量的程度副詞とは一線を画し、量の副詞と同じように働いていると考えられる。語としての客観性を有しているからこそ、条件節の中で用いられたり、未実現の事態でも限定することができるのである。

そもそも、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける形式と共起するかしないかを左右するのは、結局語としての性質として評価性を有するか、客観性を持つかである。そういった形式を持った文内で共起した例が確認されるということは、その根本的性質が「ある形式との共起」という目に見える形で表出してきたということに過ぎない。重要

なのは「ドッサリ」も「イッパイ」「タクサン」「タップリ」と同じ客観性という内的性質を含んでいるということである。

以上、量の副詞の陳述性について考えてきた。量の副詞は量的程度副詞と違い聞き手に何らかの行為の実現を働きかける形式とも共起することが分かった。そしてそれは両語群の持つ語としての性質の違い―主観的か客観的かといった差異―であることが分かった。

また、ここまで言及はしなかったが、量の副詞も量的程度副詞と同じく肯定文脈でのみ働く。「人ガタクサン来ナカッタ」「昨日ハイッパイノマナカッタ」といった文が逸脱性を有していることは論じるまでもないだろう。ただし、「タクサンハ～」のように、ある特定の語は助詞の「ハ」を後接させることによって否定文脈で用いられることもある。これについては次節で検討する。

４．３　名詞性

ここでは量の副詞の名詞的性格について考える。量的程度副詞の名詞性について論じた３.３と同じ構成をとる。

４．３．１　「ハ」の後接

まず、量の副詞が「ハ」を後接できるかについて見ていく。

(41)　一度にたくさんは食べられないので、毎日少量ずつとるとよいでしょう。

(42)　地下鉄ですから、たくさんは持てないけれど、リュックサックを背負って、近所の人の分も飲料水を持ってきました。

(41)(42)のように「タクサン」が助詞の「ハ」を後接している例は数多く見られた。ただ、どちらも「ハ」の後は否定の形式「食べられない」「持てない」が来ている。「タクサン」は「ハ」を伴うことができるが、その場合否定表現と共起することになる。工藤真由美(2000)においても「タクサン」が「ハ」を伴って不完全否定[20]を表すことが指摘されている。

しかし、この性質は数量を表す表現に一般的に見られることとは言えない。数量詞などは「ハ」を後接しつつも否定を表さない例が多く見られる。(43)～(45)である。

(43)　と言っても、僕の場合は必ずフルスイングで素振りを五回はするし、打ち直しを含めると一ラウンドで百回以上振っている計算になるので、それなりの運動にはなります。

20　不完全否定とは工藤真由美(2000)によると「示された数値と０(無)との間を表す＜～以下＞の意味」である(p106)。

(44)　この宿の一年のうち六ヶ月は開いていて、ヨハン・ハウザーの一家が住んでいる。

(45)　あの本は、少なくとも三十回は書き出したと思う。

「タクサン」が「ハ」を伴った場合不完全否定の用法になることは、取り立て助詞「ハ」による取り立てが不完全であることを示している。それは(43)～(45)のように数量詞が様々な陳述的制限から自由であることと比べるとよく分かる。

その他の量の副詞はどうだろうか。仁田(2002)「「タクサン」「イッパイ」「タップリ」「ドッサリ」に関しては「「ハ」の後接は可能である」(p188)としている。しかし、調べた結果「タクサン」以外の量の副詞が「ハ」と後接する例は見つからなかった。

ただ、コーパスにおいて調査対象とする媒体をインターネット上の文章まで広げると、いくつかの用例が見られることが分かった。まず(46)である。

(46)「薬は」「そんなにいっぱいは飲んでないよ。この一週間はデパスとアモバン二錠ずつで眠るようにしてるし」

これは「イッパイ」が取り立て助詞「ハ」と共起している例である。この用法は「タクサン」の用法と同じであり、「ハ」を伴って不完全否定を表している。

次に「タップリ」が「ハ」を後接している例である。

(47)　濃い醤油に砂糖たっぷりはただの濃い味になるだけです。

(48)　肉がメインだから肉がたっぷりはうれしいことです。

(47)の場合は本来「濃い醤油に砂糖たっぷり(入っているの)はただの濃い味になるだけです」、(48)は「肉がたっぷり(あるの)はうれしいことです」のような関係であるべき表現であり、括弧内の表現が省略されてできた砕けた表現の一つであると言える。

「イッパイ」や「タップリ」に「ハ」が後接するかどうか、というのは難しい問題である。ある程度砕けた表現までを範囲としてとれば可能だとも言え、そうでないとも言える。とにかくここで言えるのは「タクサン」に「ハ」が後接する例は豊富に見つかる、ということである。

４．３．２　「ノ」の後接

４．３．２．１　二つの用法

ここでは、量の副詞が連体格助詞「ノ」を後接する用例について見る。まず、「タクサン」「イッパイ」が用いられている(49)～(52)である。

(49)　「難民受け入れを決めたとき、彼らの複雑な背景を考えれば、たくさんの精神障害者が出ることは、ある程度、予想がついていたはずです。

(50)　「調査書くん」では、たくさんの関数やＶＢＡ(マクロ)を使用しているので、正常に動かなくなる可能性も大きいのです。

(51)　ランチは、ゴロンとした具がいっぱいのみそ汁に、定番から選べるおにぎり２個とお漬物のセット(五百五十円)がお得。

(52)　ビックリするアイディアがいっぱいのライブ。

(49)～(52)はすべて量の副詞が「ノ」を後接させている例であるが、よく見てみると、(49)(50)と(51)(52)、すなわち「タクサン」と「イッパイ」では構造が少し異なっている。

(49)の「たくさん」が限定しているのは「の」の後ろに続く「精神障害者」の数量である。また、(50)においても「たくさん」は後ろの「関数やＶＢＡ(マクロ)」の数量を限定している。

しかし(51)の「いっぱい」が限定しているのは「の」の後ろに続く「みそ汁」ではない。前にある「具」の数量である。(52)の場合も前にある「アイディア」の数量を「いっぱい」が限定している。

この異なる二つの構造を簡略化して書きだすと(53)(54)のようになり、それぞれの量の副詞が限定しているのは名詞Ａの数量である。仮に(53)のような場合をⅠ型、(54)のような場合をⅡ型としておこう。

(53)　量の副詞ノ名詞Ａ　　【Ⅰ型】

(54)　名詞Ａ(ガ)量の副詞ノ名詞Ｂ　　【Ⅱ型】

「タップリ」「ドッサリ」の場合はⅠ型の用法もⅡ型の用法も見られた。(55)(56)がⅠ型の例、(57)(58)がⅡ型の例である。

(55) 旬のあじをたっぷりの野菜と合わせた、ほっとする味わいの和食献立です。 【Ⅰ型】

(56) このボケきゅうりを縦二つに切って、種をスプーンで掻き出します。どっさりの塩で四、五日漬け、ザルにあけて水を捨ててから、またどっさりの塩で重しをして漬けます。 【Ⅰ型】

(57) オリエンタルムードたっぷりのチバ・ソムのタイ古式マッサージ用ルーム。 【Ⅱ型】

(58) トンコツスープ、紅ショーガどっさりのラーメンを食って外に出ると観光客のオバサンたちが大ぜいやってきてサインだ写真だとなってしまった。 【Ⅱ型】

「タップリ」の例はⅠ型、Ⅱ型共に豊富に見つかる。「ドッサリ」の例はⅠ型、Ⅱ型共に用例の絶対数が少ないが、(56)と(58)を見る限り、どちらの用法でも使えることは間違いない。

では「イッパイ」「タクサン」に関してはそれぞれⅡ型、Ⅰ型の用法しかないだろうか。

「イッパイ」は用例を探してみてもⅠ型の用法は見当たらなかったが、「タクサン」の場合はⅡ型の用法にあたる(59)(60)のような用例が見つかる。

(59) 父も子だくさんの家に産まれたのですが、もう産まないということで留吉という名をつけられたのです。

(60)　具沢山のカレーを二種とサラダを詰めて、鮮やかな色の布に包んで持って行きましょう。

(59)(60)の例はⅡ型の例である。このような例は豊富にある。ただ、「タクサン」に濁音がついて「ダクサン」に変化するという特徴がある。これを純粋に量の副詞の「タクサン」の用法として認めるかどうかは難しいところである。

４．３．２．２　述語としての働き

さて、ここまでのことを整理してみよう。この量の副詞に「ノ」が後接する２つの用法をまとめると(61)のようになる。

(61)

	イッパイ	タクサン	タップリ	ドッサリ
Ⅰ型	×	○	○	○
Ⅱ型	○	△	○	○

この用法の異なりは何を意味するのか。まずⅠ型の用法は量的程度副詞にも見られた用法であり、「ノ」に続く名詞の数量性を限定する機能を持つ。Ⅱ型の用法は、量的程度副詞には見られない用法である。これは先行する名詞の数量を表すという特性を持つ

わけだが構造的には、先行する名詞＝主体、量の副詞＝述部という関係になる。(62)を例にあげると、主体＝「具」に対する述部＝「いっぱい(である)」のように対応しているというわけである。

(62) ［具がいっぱい］のみそ汁　【Ⅱ型】

ということは、Ⅱ型の用法においてはそれぞれ量の副詞は何かを限定するという役割ではなく、主体の量的状態を表すという役割を担っており、述語としての機能も持ち合わせているということになる。

工藤浩(1983)では程度副詞の特徴の一つとして「「だ・です」を伴って、述語に立つこともない」とし、それは主語の属性を規定するだけの実質的概念性がないことに帰するとしている(p186)。逆に言えば述語に立つことができるものは実質的概念性があるということであり、それは名詞性の高さにつながる。つまりⅡ型的用法があるということは、量の副詞の名詞性の高さを表すことと同意なのである。

また、述語として用いられる機能は(63)～(65)にもあるように、Ⅱ型の機能を持つ量の副詞に共通するものである。

(63) 子どもたちは言いたいことがいっぱいだ。

(64) ユニットバスなのが惜しいけど収納もたっぷりだし、けっこう掘り出し物件かも…

(65) 写真は人気店「アイスベリー」のキングピンス。大きい器に、十人分ほどの氷がどっさり。

(63)～(65)はすべて主体である「言いたいこと」「収納」「氷」に対する述語として量の副詞が用いられている。

一方、「タクサン」はⅡ型の用法を△としたわけだが、「タクサン」が文の述語として機能している用例も見つかる。(66)(67)である。

(66)　もういい、あなたに振り回されるのはたくさんだ。

(67)　贋物のメキシコはもうたくさんだよ。

しかし、(66)(67)の「たくさん」は主体に対する述語としての機能はあるものの、数量を表してはいない。これは名詞的な用法であり、数量を表す「タクサン」とはまた別の用法であり、区別して考える必要がある。

また、非常に少数ではあるが(68)のような例もあることはある。

(68)　人数がたくさんだと手挽きは大変だけど、休日に家でゆっくりコーヒーを楽しみたいときは、ゴリゴリと自分の手で豆を挽くのもよいものだ。

(68)の場合、「たくさん」は「人数」に対する述語として機能するとともに、数量を表している。

こうしたことから「タクサン」がある主体に対する述語として機能している場合には(66)(67)と(68)の場合のように２種類があり、そうした事実が(61)の表でⅡ型の用法を

△としたことと重なってくるのである。

ここまで見てきたことをまとめてみよう。量の副詞に「ノ」が後接する場合にはⅠ型とⅡ型のように二つの用法がある。Ⅰ型は量的程度副詞にも見られる用法であり、後接する名詞の数量性を限定する機能を果たす。一方、Ⅱ型は主部に対する述語として働くという特性から生じた用法であり、先行する名詞の数量を限定する。「イッパイ」にはⅠ型の用法がない。また「タクサン」はⅠ型、Ⅱ型両方の用法があるが、Ⅱ型として用いられた場合、数量を表さないこともある。

４．３．３　被修飾

ここでは量の副詞が被修飾語を受け付けるかどうかという点を見る。

(69)　こんな顔だし、それに前の学校のときは手足の痣がもっといっぱいあったし。

(70)　「きみはずいぶんたくさん台所用品を持ってるんだね」

(71)　かなりたっぷりと化粧品を使っているに違いないのだ。

(69)は「もっと」が「いっぱい」を、(70)は「ずいぶん」が「たくさん」を、(71)は「かなり」が「たっぷり」を修飾している例である。これら３語に関してはこのような何らかの語により修飾を受けている例が豊富に見つかるが、「ドッサリ」に関しては見つからなかった。

何らかの語による修飾を受けるということは、修飾を受けるだけの実質的概念が潜在的に備わっているということになる。

４．３．４　名詞性の高低の異なり

以上、量の副詞の名詞性の高低について見てきた。得られたことを表にすると(72)のようになる。

(72)

	イッパイ	タクサン	タップリ	ドッサリ
「ハ」の後接	△	○	△	×
「ノ」の後接	○	○	○	○
被修飾	○	○	○	×

(72)の表を見ると量の副詞は量的程度副詞に比べて全体として名詞性が高いと言える。この名詞性の高さが４．２で見た、語としての客観性の高さの証左であり、陳述的制限の少なさにつながる。

４．４　まとめ

本章では、量の副詞の性質を数量性、陳述性、名詞性という観点から見てきた。ここまでの過程で得られたことを少しまとめてみよう。

まずは数量性である。仁田(2002)が指摘したように量の副詞の典型的な用法は主体や対象の数量を表す用法である。この用法はすべての量の副詞が有している。しかし表す内容に注目すると、「イッパイ」「タクサン」は数的・量的どちらの尺度の限定にも用いられるが、「タップリ」「ドッサリ」は緩やかではあるが量的な尺度の限定に用いられる傾向がある。

動きの量を表す用法もあるにはあるが、特に時間量を表す機能は非常に弱い。また「タップリ」「ドッサリ」は純粋に数量的限定を行なっているというよりは、動きがどのように実現されるかといった様態的な表現の方に重点が置かれ、典型的な情態副詞にふるまいが近くなることが確認された。

次に陳述性である。量的程度副詞と違って、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける形式を帯びた表現とも共起することが分かった。それは量の副詞が持つ数量的具体性＝客観性の高さに由来するものである。

最後に名詞性である。語によって少々異なりはあるが、量の副詞は総じて名詞的性質が強いことが確認された。特に、「ノ」の後接について詳細を検討していくと、単に後接する名詞の数量性を限定するだけでなく、主体に対する述語として機能しているケースが確認された。述語的に用いられるということは名詞性の高さを担保するものである。

第５章　否定程度副詞

本章で論じる否定程度副詞は否定文脈で程度や数量の限定を行なう語群である。具体的な論考に入る前に否定程度副詞という語群について確認しておこう。

否定程度副詞の定義を簡単に言うと「否定文脈で程度限定を行なう副詞」である。そして２．２．３でも述べたが、これらの語は程度限定を行なうと同時に数量限定を行なう機能も有している。そのため本研究の考察対象になる。

具体的な語は(１)(２)にあげた語であるが、その中でも特に(１)が「不完全否定」を表し、(２)が「完全否定」を表す。

（１）　アマリ/サホド/タイシテ

（２）　スコシモ/ゼンゼン/チットモ

では、このようなことを踏まえた上で、否定程度副詞の性格・性質について考えていくことにしよう。

５．１　数量性

まず、否定程度副詞の数量性について見ていく。否定程度副詞は古くから肯定・否定のみとめ方を基準として程度副詞と対称的な対応関係を有するものであるという認識が

持たれていた。しかし、程度副詞が数量限定機能を有するか否かで「純粋程度副詞」と「量的程度副詞」に分けられることと、否定程度副詞のすべてが数量限定機能を有することとを勘案すると、みとめ方を基準とした対称的対応関係にあるのは正確には「量的程度副詞」と「否定程度副詞」ということになる。

量的程度副詞と否定程度副詞が対称的関係にあるのならば、その数量性のあり方も対称的であることが予想されるが、実際はどうだろうか。以下、量的程度副詞との比較を行ないながら否定程度副詞の数量性について考えていきたい。

５．１．１　主体・対象の数量

まず(３)～(８)は否定程度副詞が主体の数量を限定している用例である。

（３） 今日、この和音を口にし、実践する人はあまりいない。

（４） 討伐隊の隊員で、胸に山刀が突き刺さっている。雪はさほどかぶっていない。

（５） 七百年代にできた『日本書紀』までにかなり時間がたっているわけで、その間記録も大してないから、どこまで正確なのかというと、疑わしい点もいくつかある。

（６） 真犯人しか知りえないような秘密の暴露が自白の中に、少しも含まれていではないか、そういうことを具体的に分りやすく論じていましたね。

（７） 「最終スティントでは何が起きたのか分からない。とにかくフロントのグリップが全然なかったんだ」

（８） ところが、アメリカにはどこか弱点を探そうと思っても、それがちっともない。

（3）の「あまり」は「実践する人」 の数量を、（4）の「さほど」は「雪」の数量を、（5）の「大して」は「記録」の数量を、（6）の「少しも」は「秘密」の数量を、（7）の「全然」は「グリップ」の数量を、（8）の「ちっとも」は「弱点」の数量をそれぞれ限定している。

続いて否定程度副詞が対象の数量を限定している場合である。

（9） ところが、酒が出ても遠藤はあまり飲まなかった。

(10) さほど酒をいただいたわけではないが、微酔が磐音に気まぐれを起こさせた。

(11) 「ビールの量は？」 「一本か二本です。このくらいのを」 下山はたいして飲んでいないのを強調するかのように、両手で示した。

(12) 夫は失業中の身でありながら、親戚の者の就職の世話を無視するばかりか、妻子に暴言·悪態をつき、少しも生活費を入れてなかったために妻から離婚請求をされた例。

(13) 家のハムスターは、生野菜はたくさん食べるけど、水をぜんぜん飲みません。

(14) 「ちっとも食べなかったじゃないか。ちっとも」

（9）(10)の「あまり」「さほど」は「酒」の数量を、(11)の「たいして」は「ビール」の数量を、(12)の「少しも」は「生活費」の数量(額)を、(13)の「ぜんぜん」は「水」の数量を、(14)の「ちっとも」は何らかの「食べ物」の数量をそれぞれ限定している。

主体の数量を表すにしても、対象の数量を表すにしても否定程度副詞を用いた例は豊富に見られる。この辺りは量的程度副詞と同じである。

５．１．２　動きの量

動きの量を表す場合について見ていく。

(15)　平素あまり乗らなかったマイカーをまた病院通いに使い始めて間もないある日、交差点で信号待ちの際何気なく見た積算走行距離計が一万二千八百四十二キロメーターだった。

(16)　事故といっても、環状線の高架に車がぶつかり安全かどうかの確認待ちだったので、さほど待たされなかったけど、それでも十分以上は遅れた。

(17)　「この本を読んだ人は、一生地球を打つな、あなたが地球を打ってもボールは大して動きません」

(18)　「そうねえ、四十半ばくらいかしら、ちょっと小太りで、ネクタイもきちんとしめて服装もいいんですが、少しも喋らずそわそわと…」

(19)　「そうじゃない。けども全然動かんのだ。」

(20)　心はちっとも動いていません。

(15)の「あまり」は「マイカーに乗る」量を、(16)の「さほど」は「待たされた」時間量を、(17)の「大して」は「動く」量を、(18)の「少しも」は「喋る」量を、(19)の「全然」は「動く」量を、(20)の「ちっとも」は「動く」量を、それぞれ限定している。

(16)を見ても分かるように、時間量を表すことも可能である。(21)～(25)を見ると、それぞれの否定程度副詞が動きの量の中でも特に時間量を表す例について確認することができる。

(21)　あまり休まず次の動作に移ろう。

(22)「ふざけんな、大して生きてもいないくせに意味なんか聞くな」

(23)　老人二人は、思い立つと、もう子供のように、少しも待てないといった感じで、じりじりしている。

(24)　二月二十八日、土曜―全然眠れなかった。

(25)　日にあたったのと興ふんのせいでまるでばらの花のようあたしはちっとも眠らなかった

以上のような各用例を見ると、否定程度副詞は量的程度副詞との比較においてほぼ同じような数量性を有していると考えられる。否定程度副詞同士を入れ替えても、数量性の大小を別にすれば非文となることもない。否定程度副詞と量的程度副詞の関係は予想通り肯否のみとめ方を基準とした対称的対応関係にあると言えるだろう。

ただ、二つの語群間の関係はそういった対応関係として整理することができるが、否定程度副詞の数量限定の内容についてもう少し詳しく見ていくと、この語群に属する語がすべて同じような働きを持っているわけではないということが分かる。以下それについて考える。

５．１．３　不完全否定の語と完全否定の語の働きの違い

工藤真由美(2000)は(26)(27)のような例をあげて、否定程度副詞は「形容詞述語とも

動詞述語とも呼応が可能なので、構文的位置が重要となる」(p111)としている。

(26)　スーパーにはあまりいいお魚はなかった。

(27)　スーパーにはいいお魚はあまりなかった。　［工藤真由美(2000. p111)］

(26)と(27)とでは「あまり」の機能が異なり、全体として文が意味するものも違う。(26)の「あまり」は意味的に「いい」の程度性を限定している。一方の(27)では「あまり」は「なかった」にかかっており、数量性を限定していると言える[21]。

つまり否定程度副詞は、程度的尺度も数量的尺度も限定することができるわけだが、特に直後にある成分を限定する性質があるのである。もちろん、これは否定程度副詞に限ったことではない。肯定文脈で働く量的程度副詞も同様である。

(28)　スーパーニハカナリイイオ魚ガアッタ。

(29)　スーパーニハイイオ魚ガカナリアッタ。

(28)の「カナリ」は「イイ」程度を限定しており、(29)の「カナリ」は「アッタ」数量を限定している。つまり、量的程度副詞も否定程度副詞と同様に形容詞述語、動詞述

21　否定程度副詞は否定形式と結びつくわけだが、(26)の例のように意味上は肯定形式の表現と結びつく場合がある。これは否定の呼応のずれであり、工藤真由美(2000,p112)において詳述されている。

語共に共起が可能なため、特殊な前提がない限り、直後の成分を限定するということである。

しかし、否定程度副詞の場合はすべての語がそのように機能するとは言いきれない。例えば(26)(27)の「あまり」を「ゼンゼン」に入れ替えてみたものが(30)(31)である。

(30) スーパーニハゼンゼンイイオ魚ハナカッタ。

(31) スーパーニハイイオ魚ハゼンゼンナカッタ。

「ゼンゼン」を用いた場合は(30)(31)両者とも数量限定を行なっていると解釈できる。「あまり」を用いた(26)とは違い、(30)の場合「ゼンゼン」が直後にある「イイ」を限定しているとは言えない。

これは(30)においては「ゼンゼン」は直後の「イイ」を飛び越えて、更に後方に位置する「ナカッタ」にかかっているということである。つまり、「ゼンゼン」は「アマリ」に比べて数量限定をする力が強いと考えられるわけだが、それを確認するために「否定程度副詞＋程度的尺度を持った成分＋数量的尺度を持った成分」という形態を備えた用例をいくつかあげて、もう少し検討してみよう。

(32) 黄海沿岸の港からはいれば、あまり高い山もなく、水路によって陽都あたりまではらくに行ける。

(33) これもあまり良い名前とはいえません。

(34) 脱税事件の具体例がいくつかあげられており、金融割引債や絵画にもふれているが、さほ

ど目新しい切り口はない。

(35)　その点では両者の間にさほど大きな違いはないのではなかろうか。

(36)「大して面白いこと、ないなあ…」

(37)　三十八年生きて来て、たいしていいこともなかった。

(32)～(37)の例はすべて、直後の程度性をもった成分を限定していると考えられる。(32)(33)の「あまり」は「高い」「良い」、(34)(35)の「さほど」は「目新しい」「大きな」、(36)(37)の「大して」「たいして」は「面白い」「いい」を意味的に限定している。

もし、その後ろにある数量性をもった成分を限定しようとするなら、工藤真由美(2000)の指摘通り、否定程度副詞の位置を数量性をもった成分の直前に移すのが普通であろう。

では、「ゼンゼン」を使った例はどうか。調べてみたところ(38)の一例しか見つからなかった。

(38)　渋谷にレコードを買いに行ったが全然いいレコードがなくて、つまらない。

(38)の「全然」は程度性を持った「いい」の直前に位置しているが、意味的にはその後ろの「ない」を数量限定していると考えるのが普通である。つまり「イイレコードガ全然ナイ」と同意である。

「アマリ」「サホド」「タイシテ」に関しては、その直後に否定の形式でない語が来

る例(32)～(37)が豊富に見つかった。しかし、「ゼンゼン」にはそれがたったの一例しか見つからないのである[22]。

「ゼンゼン」の用例が少ないので、(32)～(37)の例に「ゼンゼン」を代入して検討してみよう。

(32)’黄海沿岸の港からはいれば、ゼンゼン高い山もなく、水路によって陽都あたりまではらくに行ける。

(33)’これもゼンゼン良い名前とはいえません。

(34)’脱税事件の具体例がいくつかあげられており、金融割引債や絵画にもふれているが、ゼンゼン目新しい切り口はない。

(35)’その点では両者の間にゼンゼン大きな違いはないのではなかろうか。

(36)’「ゼンゼン面白いこと、ないなあ…」

(37)’三十八年生きて来て、ゼンゼンいいこともなかった。

(32)’～(37)’を見ると、「ゼンゼン」が程度性を持った語の直前にあるが、意味的にはその後ろにある語の数量性を限定していることが分かる。(32)’は「高い山もゼンゼンなく」、(33)’は「良い名前とはゼンゼンいえません」、(34)’は「目新しい切り口はゼンゼンない」、(35)’は「大きな違いはゼンゼンない」(36)’は「面白いこと、

22 もちろん「ゼンゼン」には、「全然大丈夫デス」のような「ゼンゼン」が肯定形式の語と共起する用法もあるが、これは除外して考える。

ゼンゼンない」、(37)’は「いいこともゼンゼンなかった」と同意である。

これは「ゼンゼン」は後ろに程度性を持つ語と数量性を持つ語がきた場合に、数量性を持つ語と結び付く力が強いということの表れである。また、そのような語は「ゼンゼン」だけではない。どうやら完全否定に分類される「スコシモ」「チットモ」も数量限定性が強いと思われる。(32)～(37)に「スコシモ」「チットモ」を代入してみるとその傾向が確認される。

５．１．４　数量を限定する力の強弱

なぜ不完全否定の語は相対的に程度限定性が強く、完全否定の語は数量限定性が強くなるのだろうか。

まず「ゼンゼン」について考えてみる。工藤真由美(1999)において、「ゼンゼン」が否定形式と共起している例は100例以上見られたが、その中で形容詞述語と共起している例は５例しかなかったという記述がある(p95)。「ゼンゼン」は形容詞述語とも共起するが、主として動詞述語と共起する副詞なのである。そして「ゼンゼン」と同一のグループとされているのは「サッパリ」「マルデ」である。「サッパリ」「マルデ」は形容詞述語と共起するケースがあるものの、やはり動詞述語と共起する力の方が強いとされている(pp95-99)。

つまり、「ゼンゼン」はそもそもの性質として動詞と結びつく力が強い。基本的に程度的成分は形容詞、数量的成分は動詞によって表されるため、動詞と結びつく力が強い

ということは結局、数量限定機能が強いということになる。

では、「スコシモ」「チットモ」の場合はどうだろうか。三宅(2003)によれば「スコシモ」「チットモ」はそれぞれ、「スコシ」「チョット」に取り立て助詞の「モ」が後接してできた語である(p119)。だとすれば、「スコシモ」「チットモ」にも元の語である「スコシ」「チョット」が有する性格が内在していると考えてもよい。

「スコシ」「チョット」は第３章で詳しく見たように、量的程度副詞に属するわけだが、そのふるまいはその他の量的程度副詞とは一線を画している。名詞性が高く、陳述的な部分でも制限が少ない。工藤浩(1983)も「スコシ」「チョット」に関しては「量性が強い」(p196)と指摘している。

つまり「スコシモ」と「チットモ」は程度限定にも、数量限定にも用いられるが、その他の語に比べて数量限定機能が強いのである。そのため後ろに程度的尺度を内包する語と、数量的尺度を内包する語が来た場合、その数量限定機能の強さから直後にある形容詞を飛び越えて更に後方に位置する動詞と共起しやすくなるのではないだろうか。

以上が完全否定の否定程度副詞と不完全否定の程度副詞のふるまいの違いに関する見解である。

またこのような現象は角度を変えて言えば完全否定の否定程度副詞においては、否定の「呼応のずれ」が起こらないことと同意である。

否定の呼応のずれとは、否定形式と結び付くはずの否定程度副詞が意味的には肯定の形式の語と結び付いている現象を指す。(32)～(37)は否定程度副詞がすべて直後の肯定形式の語と結び付いているわけだから、否定の呼応のずれが起きている。しかし(32)’

～(37)’では「ゼンゼン」はその後ろにある否定形式の述語と結び付いているわけだから呼応のずれが起きていないのである。工藤真由美(2000)においても、否定の呼応のずれのケースがいくつか報告されているが、そのなかに「ゼンゼン」や「スコシモ」「チットモ」を含んだ例は見られない。

また、工藤真由美(2000)では(38)のような例があげられている。

(38) 「それほど簡単にことが運ぶとははじめから思ってないさ」 ［工藤真由美(2000.p113)］

(38)は「それほど」が意味的には直後の「簡単に」を限定している例であるが、形式的に呼応すべき「思ってない」とはかなり距離が離れている。もし、この「それほど」の位置に完全否定の「スコシモ」「ゼンゼン」「チットモ」を代入してみると、(38)’のようになり、かなり自然さが落ちる文となる。

(38)’？「【スコシモ／ゼンゼン／チットモ】簡単にことが運ぶとははじめから思ってないさ」

しかし(38)”のように３つの完全否定の否定程度副詞の位置を変えると自然な文となる。

(38)”「簡単にことが運ぶとははじめから【スコシモ／ゼンゼン／チットモ】思ってないさ」

(38)’(38)”における自然さの違いは、意味的にも形式的にも呼応している完全否定の否定程度副詞と「思ってない」との距離のためだと考えられる。(38)では「それほど」は形式的に呼応する「思ってない」と距離的に離れているが、意味的には直後の「簡単に」と呼応しているために、不自然な感じがしないのであろう。こういったことからも完全否定の否定程度副詞は動詞述語と結び付く力が強い＝数量限定機能が強いということが分かる。

以上、ここまで否定程度副詞の数量性がどのように実現されているかについて見てきた。当初の予想通り、否定程度副詞は量的程度副詞と肯定・否定のみとめ方を基準とした対称的対応関係を有していることが確認された。しかし、否定程度副詞の内部についてよく観察してみると、その性格は一様でないことが分かる。すなわち、完全否定の語と非完全否定の語では数量を限定する力に差があるのである。

５．２　陳述性

続いて否定程度副詞の陳述性について見ていこう。第２章でも触れたが、否定程度副詞は否定形式と必ず共起するため、「否定の陳述性を持つ陳述副詞である」という認識が一般的である。否定形式と共起するということは前提として、それ以外にどのような陳述的特性を持つか考えてみよう。

３．２、４．２ではそれぞれ量的程度副詞と量の副詞の陳述性について、主に聞き手に何らかの行為の実現を働きかける文末表現形式との共起の可否を中心に論じた。そして、

その可否を決める要因は、それぞれの語群が潜在的に内包している客観性と主観性という概念で説明できるとした。果たしてこの否定程度副詞はどのような性質を基礎として、どのような陳述性を持つのだろうか。

数量限定機能としては肯否のみとめ方を基準とした量的程度副詞との対称的対応関係にあることが示された。そのため、陳述的側面においても同じような働きを果たすと考えられる。

では、否定程度副詞は聞き手に行為の実現―否定の場合には行為を行なわないことの実現―を促すモダリティ表現と共起が可能であろうか。

５．２．１　聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との非共起

仁田(1991)によれば、相手に対する否定の働きかけの表現には否定命令＝「禁止」と否定事態への依頼＝「否定依頼」があるとされる(pp232-233)。(39)～(42)は仁田(1991)であげられた「禁止」、「否定依頼」の用例である。

(39)「生意気を言うな」　【禁止】

(40)　無駄なことはおやりなさるな。　【禁止】

(41)　下らない噂を流さないでくれたまえ。　【否定依頼】

(42)「どうか私に恥をかかせないでください。」　【否定依頼】［仁田(1991.pp232-234)］

(39)～(42)が潜在的に限定されるべき数量性を有していることは、「生意気ヲタクサン言ウ」「無駄ナコトヲイッパイヤル」「噂ヲスコシ流ス」「「ナンドモ恥ヲカカセル」といったような数量限定語句を挿入した言い回しが可能だという事実からも肯定される。しかし(39)～(42)に否定程度副詞をいれると、不自然な文になる。

(39)’?「生意気をサホド言うな」

(40)’?無駄なことはタイシテおやりなさるな。

(41)’?下らない噂をスコシモ流さないでくれたまえ。

(42)’?「どうか私にゼンゼン恥をかかせないでください。」

もちろん否定表現が数量限定表現と相容れないというわけでもない。それは(43)のような表現が可能なことからも分かる。

(43)　「おい、一枚も残すな。」　［仁田(1991. p232)］

(39)～(42)と(39)’～(42)’の例から、否定表現においても聞き手に何らかの行為を行なうこと―この場合は行なわないこと―を働きかける文を成立させるには、話し手と聞き手がお互いにその行為に関する具体的な数量のイメージを共有できるような客観的な語句を使用しなければならない。そして、その場面で否定程度副詞が用いられないということは、否定程度副詞がある種の客観性を欠いた性質を有し、反対に言えば主観的な意味合いを持ち合わせていることを示唆していることになる。

５．２．２　「アマリ」の二つの用法

しかし、唯一「アマリ」のみは禁止や否定依頼の場面でも用いられる。工藤真由美(1999)も(44)(45)のような例をあげ、「あまり」は「禁止文あるいはそれに準ずるモダリティ形式と共起しうる。この「あまり」は「たいして、さして、さほど、それほど」に言い換えることはできない」(p103)としている。

(44)　あの男をあまりからかわないでちょうだいね。

(45)　酒はいくら飲んでもいいが、物はあまり食ったらいかん。　［工藤真由美(1999.p103)］

確かに(44)(45)を見ると「アマリ」が数量限定機能を果たしていながらも、禁止のモダリティー表現と共起していることが確認される。だとすれば否定程度副詞の中でも「アマリ」だけは、話し手と聞き手が数量の大きさについてのイメージを共有できるだけの客観性を内包していると考えられることになり、その他の否定程度副詞とは性質が異なることになる。

しかし、先に結論から言っておくと、「アマリ」もその他の否定程度副詞と同じく主観的に数量を限定する機能を果たしている。その理路を述べるためにまず「アマリ」の用法について整理しておこう。

服部(1993)は「アマリ」の用法には大きく分けて二つあるとした。

(46)　これはあまり美しくない。　　【弱否定型】

(47)　あまり飲むと体に悪い。　　【過度型】　［服部(1993.pp1-2)］

(46)の「あまり」は「弱否定型」用法として使われており、(47)の「あまり」は「過度型」の用法として使われている。簡単に言うと「弱否定型」は否定形式と呼応し、述語で表される事態の程度や数量が大ならざることを表す表現である。一方「過度型」は「アマリニ」に置き換えられることが可能な場合が多く、何らかの程度や数量が一般的な基準を超えることを表す表現である。

しかし過度型の用法には制限が多い。(48)(49)を比較してみれば一目瞭然である。

(48) ?この問題はあまり難しい。

(49)　コノ問題ハ【トテモ/ヒジョウニ】難シイ。

つまり、何らかの程度や数量が一般的な基準を超えているからといってすべての場合において過度型の用法が許容されるわけではない。

服部(1993)では過度型の用法が成立しやすい条件についていくつか述べられているが、そのうちの一つとして「「あまり」を含む文が禁止や、否定的な勧告、否定的な当為の判断などであって、当該の事態の防止や回避を望ましいものや必要なものとする場合には、過度型の「あまり」が適切に使用できる」(p15)としている。(50)～(52)はそこであげられた用例である。

(50)　しばらくの間、あまり歩き回らないほうが良い。

(51)　ただし、あまり手でいじりまわさないことがたいせつ。

(52)　あんまり変なことを言うんじゃないぞ。　［服部(1993.p15)］

要するに、(50)の例で言えば、「［あまり歩き回らない］方が良い」という否定形式と直接結びつく関係ではなくて、「［あまりに歩き回る］ことをしない方が良い」という関係なのである。実際に「アマリ＜タクサン＞歩キ回ラナイ方ガ良イ」というように、「タクサン」を補うと意味が明確化されるという点からも、こういった禁止などのモダリティ表現と共起する「アマリ」は純粋に否定表現と呼応する弱否定型の用法とは違った用法であると考えられる。

本章で論じている否定程度副詞の「アマリ」は、否定形式と呼応し程度性なり数量性を限定する語でなければならない。そういった観点から考えると、「アマリ」の過度型の用法は否定程度副詞の「アマリ」の用法からは外すのが適当であると考えられる。

例えば「トテモ」という語は程度副詞として一般に認められている語だが、否定文脈で用いられることもある。そういった場合―例えば「私ニハトテモデキナイ」など―には「トテモ」は程度性を限定する語とはみなされない。程度副詞に関する論考で「トテモ」を論じる際に、否定文脈で用いられる「トテモ」までを考察に入れるということは普通考えられない。同じ「トテモ」であっても用法が違う場合には別個のカテゴリーとして考えるのが妥当である。「アマリ」の場合もそれと同じである。

そのような理路からすれば、「アマリ」を含めたすべての否定程度副詞は聞き手に対

して何らかの行為を働きかけるモダリティを帯びた文末表現とは共起しないと言える。

５．２．３　完全否定と不完全否定の客観性の違い

以上のような観察、考察から否定程度副詞が聞き手に行為の実現を働きかける形式とは共起しないことは分かった。その理由としてはやはり否定程度副詞が語としての主観性を有しているからだと考えられる。

(53)　それゆえ、この阿弥陀仏をどのように頼み、どのような心であればお助けくださるかというと、自分の罪の深いことを気にせず、ただかの阿弥陀仏を二心なくひたすらお頼みして、すこしも疑う心がなければ、かならずお助けくださるのだ。

(54)　週末を色んな精霊のイベントを見るのに使って補習を全然やらないと、グッドエンディングに必要なポイントを獲得できないので欲張りすぎないこと。

(53)の「すこしも」、(54)の「全然」はそれぞれ「すこしも疑う心がなければ」、「補習を全然やらないと」といったように、条件を表す助詞「ば」「と」と共に使われ、条件節の内部の数量性を表すものとして機能している。３．２では量的程度副詞はそれらの語群の語の持つ主観性のために条件節等でも使われないということを指摘したが、この「すこしも」や「全然」は明らかに条件節の内部で用いられており、そうなるとこれまでの議論に矛盾を生じさせることになる。

しかし、量的程度副詞の中でも小さい数量を表す「スコシ」「チョット」などはその限りでないことも論じた。「スコシ」「チョット」は量的程度副詞に属する語ではあるが、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける形式とも共起することから、その他の量的程度副詞よりも主観性が低く、評価性が低いという語的特性を持つことも指摘した。

その時に援用したのは川端(2000)である。ここでは再掲となるが、「スコシ」「チョット」は「何らかの存在は否定しないが、量の大小に関する想定や一定量という幅の概念を排除することを意図した発話である」。「「存在する」という事実の認定の表示として機能するため、背後のスケールによって規定されることから脱却する。すなわち、情報を理解する上での個人差を考慮外とした客観的な情報になるため、確定的な指示情報になることができる」(p71)。

「スコシモ」「ゼンゼン」が条件節で用いられているのも、結局はこの理屈と同じである。例をあげて考えてみよう。

(55) 【スコシモ／ゼンゼン】飲マナカッタ。

(55)の「スコシモ」「ゼンゼン」は「飲ンダ」量＝「飲マナカッタ量」が０であることを表している。そのため、話し手と聞き手は「飲ンダ量」についての合意を持つことができる。

(56) 【アマリ／タイシテ】飲マナカッタ。

一方、(56)「アマリ」「タイシテ」は「飲ンダ」量が０ではなく「少シハ飲ンダ」ことを暗示しているが、その「飲ンダ量」については話し手と聞き手の間で合意を持つことが難しい。話し手が「飲ンダ」量を「アマリ」「タイシテ」と判断したとしても、その基準は全的に話し手の基準に一任されている。

そういう意味で、主観性と客観性という観点から考えると不完全否定の否定程度副詞と完全否定の否定程度副詞を比べた場合、前者の方が後者に比べて表す数量性が主観的であるということができる。だから、話し手と聞き手はその数量的イメージを共有することができるため (55)(56)のように「スコシモ」や「ゼンゼン」の条件節内部での使用が許されるのである。

しかし、だとしたら完全否定の否定程度副詞が聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式においては用いられないのはなぜだろうか。その表す数量が０であるという合意の得られやすい数量性を持つなら、話し手と聞き手の間で数量の多寡に関するイメージが共有されていることになるため、そのような表現でも使われてしかるべきである。

その理由は、聞き手に対して何らかの行為の非実現を求める際に特に数量的に０であることを求める必要がないからであると考えられる。

(57) a「肉ヲ買ッテキテクダサイ。」

b「ドノクライ？」

例えば、(57)のような会話があったとする。これは特に不自然な会話ではない。aの言明に対して、bは「買ってこいという肉の数量はどのくらいか」を問うことができる。ただし、(58)はどうだろうか。

(58) a「ヤッパリ、肉ヲ買ッテ来ナイデクダサイ。」
　　b「ドノクライ？」

(58)の会話は不自然である。「買ッテコナイデクダサイ」という言明は既に「買ってこいという肉の数量が0である」という数量的情報が含まれているのである。

つまり、「～スルナ」や「～ナイデクダサイ」といった「禁止」や「否定依頼」の文では、その言明がおこなわれる際に既に「0」という数量的情報が組み込まれている。だから、「ゼンゼン飲マナイデクダサイ」「チットモ飲マナイデクダサイ」と言う必要がない。

もし何らかの副詞を添えるとしたら「ゼッタイニ飲マナイデクダサイ」といったような「飲マナイ」という行為がどのように実現されるべきか、というような様態的指示になる。

ここまでの議論をまとめてみよう。まず否定程度副詞は量的程度副詞と同じく聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式とは共起しない。しかしその原因は不完全否定の否定程度副詞と完全否定の程度副詞とではメカニズムが異なる。前者の場合は量

的程度副詞と同じ理由である。すなわち語の特性として表される数量性が主観的なものだからである。一方、後者の場合は条件節などでも用いられるように数量的主観性は非常に低い、すなわち客観的な数量性を持っているものであると考えられる。しかし聞き手に行為の実現―非実現―を働きかける場合には「禁止」や「否定依頼」といった機能を持つ文の特性上、０である数量を敢えて読み込む必要がないため非文となるのである。

５．３　名詞性

ここでは否定程度副詞の名詞的性格について考える。

５．３．１　「ハ」の後接

直感的にも分かることだが、否定程度副詞が取り立て助詞の「ハ」を後接する用例は見つからなかった。

４．３では量の副詞の「タクサン」が取り立て助詞の「ハ」を伴って否定文脈で用いられることを指摘した。

(59)　一度にたくさんは食べられないので、毎日少量ずつとるとよいでしょう。

この(59)の場合、「ハ」は「タクサン」という多量を取り上げ否定表現と合わせるこ

とで、「食べられる量は多量ではない」ということを表すわけだが、否定程度副詞はそもそもの捉え方が否定的であるため、わざわざその数量を取り立てる必要もないということがその理由であろうと考えられる。

また、「スコシモ」「チットモ」などはそもそもの形が「スコシ」「チョット」に取り立て助詞の「モ」が後接している状態として成立している。

５．３．２　「ノ」の後接

次に連体助詞「ノ」の後接である。多量の用例が見つかるのは「アマリ」が「ノ」を後接させている例であろう。

(60)　あまりのおどろきに、定正は、たちすくんでしまいました。

(61)　奈良で、あまりの暑さに夏バテをしてしまって、お寺の名前はきおくにありません。

しかし、(60)(61)の「あまり」は数量を表していない。(60)においては「おどろき」、(61)においては「暑さ」の程度を「あまり」が限定している。これは５．２．１で指摘した「過度型」の用法である。この用法は本研究での考察の範疇には入らないことは既に述べた。

次に見つかるのが「サホド」が「ノ」を後接させている例である。これも相当数存在する。

(62)　さほどの荷物ではないが、夕食のあいだに運んでおくと言う。

(63)　さほどの料金ではない。

(62)は「荷物」の数量が「さほど」ではないこと、(63)は「料金」が「さほど」ではないことを表している。否定文脈で用いられており、何らかの数量を表していることから、(62)(63)は本研究の考察対象に入る用法である。

その他「タイシテ」「スコシモ」「チットモ」「ゼンゼン」に「ノ」が後接する例は採集することができなかった。では、なぜ「サホド」のみが「ノ」を後接することができるのだろうか。

「サホド」という語は見方を変えると「形式副詞によって形成された副詞句」であるとみなすことができる。形式副詞についは２．２．５．３で述べたが、補足成分を要求して副詞句をつくる副詞のことである。例えば、「死ヌホド」「言エナイクライ」という表現があるとすれば、「死ヌ」「言エナイ」の部分が補足成分であり、これに形式副詞である「ホド」「クライ」が後接することによって全体として副詞句を形成している。「サホド」は既にこれ自体が一語として認識されているが、そもそも「サ」という補足成分と「ホド」という形式副詞が合わさってできたものである。

「ホド」は補足成分とともに副詞句を構成するわけだが、その出自は名詞である。そのため当然名詞性も高く、「ノ」の後接を許すのである。副詞句を構成する「ホド」が「ノ」を伴いそのさらに後ろの名詞に数量的限定を加えている例は数多く存在する。

(64)　ボナパルトとジョゼフィーヌの関係について書こうとしたら何冊でも書けそうだし、実際数えきれないほどの本が出ているが、いまだに多くの点が曖昧で、結論が出ていない。

(65)　少し酸っぱく重い食感のライ麦パンに、こぼれるほどのキャビアをのせて口に運ぶ。

(64)の「数えきれないほど」は「本」の数量を、(65)の「こぼれるほど」は「キャビア」の数量を表している。

否定程度副詞の中で「サホド」のみが「ノ」を後接できる背景には、このような形式副詞的性格が影響している。

しかしそういってしまうと「サホド」を否定程度副詞として扱ってよいのか、形式副詞として扱うべきなのではないのか、という議論も起こりかねない。ただ、「サホド」の「サ」が単独では用いられないという事実から、この議論は退けることができるだろう。「サホド」は形式副詞的性格を帯びた否定程度副詞である。

「ハ」の後接の可否を考えてみると「サホド」が「形式副詞的」であるに過ぎないことがよくわかる。普通「〜ホド」の形をとる形式副詞は「ハ」の後接も受け入れることができる。

(66)　ブランドは、もちろんひとつなので選ぶほどはないけど、用途的にはかなり揃っている。

(67)　「でも美味しそう。寝る前になら、食べてもいいでしょ？　お酒っていっても、酔っぱらうほどは入ってないよ」

しかし「サホドハ」という表現は自然な表現としては受け入れられない。もちろん「サホド」が表すのが相対的に小さい量のため「ハ」の後接を許さないといった側面も考えられないでもないが、どっちにせよ表層として「サホド」は「ハ」を後接できないのであり、そういった点で形式副詞とは一線を画している。

５．３．３　被修飾

名詞性をはかる最後は、否定程度副詞が修飾語による修飾を受け付けるかどうかである。これも直感的に分かることだが、やはり否定程度副詞が何らかの語による修飾を受ける例は確認されなかった。しかし(68)(69)のような例がある。

(68)　出張があって、残業があって、給料をもらって、ボーナスが出て―となると、たしかにそう大して違和感を持つ必要はないのかもしれない。

(69)　というのは、我々は何か行為をしているとき、いろんな感情、心理が絡みあっておって、一つの感情で行為をするということはそう余りないと思います。

(68)(69)は一見「そう」が後接する「大して」「余り」を修飾しているような印象を受ける。しかし「ソウ」はこのような使い方で用いられる場合、必ず否定形式の文末表現を要求する。そう考えると「ソウ」が修飾しているのは否定程度副詞でははなくて、(67)の場合は「違和感を持つ必要はない」、(68)の場合は「ない」という概念であろう。

５．３．４　低い名詞性

ここまでのことをまとめてみよう。

まず、全体として否定程度副詞の名詞性は非常に低いと考えられる。「ハ」「ノ」の後接、被修飾の可否という点で許容されるのは唯一「サホド」が「ノ」を後接する場合のみであった。それ以外では名詞的な性格は見出せなかった。

第４章で見た量の副詞は、逆に名詞的性質の強い語群であった。そしてそのため客観性が高く陳述的な制限も弱いという結論を出したわけだが、この否定程度副詞においてはその真逆の性質が認められたと言える。

５．４　まとめ

最後に、ここまで見てきた否定程度副詞の性質についてまとめてみよう。

否定程度副詞は量的程度副詞とほぼ同じような数量性を有していることが分かった。主体や対象の数量を表すことはもちろん、動きの量を表す場合においても、量的程度副詞とほぼ肯否のみとめ方を基準とした対称的対応関係にある。

否定程度副詞の働きの内容について詳しく見てみると、不完全否定の語と、完全否定の語の間で多少異なる部分が観察された。これはそれぞれの語群が動詞述語と共起する力の強弱により説明される事柄で、不完全否定の語よりも完全否定の語の方が表す数量性が強いことが確認された。

陳述性に関しては、大前提として否定程度副詞は否定の文脈表現と共に用いられるということがある。また、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける形式では用いられないことがわかった。しかし、そのメカニズムはまたしても不完全否定の語と完全否定の語とで異なる。前者は話し手が意図する数量性を聞き手が共有できないために共起しないのであるが、後者の場合は意味上その数量を完全否定の否定程度副詞を用いる必要性がないために共起しないのである。

否定程度副詞の名詞性に関しては、傾向として非常に低いことが分かった。ほとんど名詞的特徴を有していないと言えるだろう。

PUKYONG NATIONAL UNIVERSITY 부경대학교

第６章　概略副詞

各論として扱う最後は概略副詞である。この語群についても第２章で説明してあるが、詳しい議論に入る前に、もう一度この語群の特徴について整理しておこう。

まず、この語群に属する語としては(１)などがある。

（1） オオカタ、オオムネ、ダイタイ、ホトンド

概略副詞は程度限定機能と数量限定機能を併せ持つ。その点で量的程度副詞と同じような機能を有するわけだが、程度限定機能だけに目を向けるとこの二つの語群は限定すべき成分が相補的な関係にある。

（2） カナリ【大キイ／遠イ】。

量的程度副詞は当然のことながら、(２)の【　】内の形容詞のように相対的な程度性を有した語と共起する。これらの語は語彙的に限界点を持たない。しかし、一方の概略副詞はこのような相対的な程度性を持つ語とは共起せず、ある限界点を持った語と共起する。

（3） オオカタ【同ジダ／等シイ】。

（3）の【　　】内の「同ジダ」「等シイ」などは、語彙的に限界点を有する。すなわち、完全に同じであったり等しかったりする点というものが存在する。

共起する成分が相補的というのは（2）（3）において副詞と共起する成分を入れ替えた（4）（5）が非文になるということである。

（4）*カナリ【同ジダ／等シイ】

（5）*オオカタ【大キイ／遠イ】

こうした性格を定義したのが仁田(2002)である。「極として成立することで程度性を持たない属性・状態、および量[23]に対して、その属性・状態や量としての成り立ちへの度合いを表し、その成り立ちへの度合いが、百パーセントではなくそれに近い度合いである、ことを表している副詞」(p196)である。

しかし、本研究で扱うのは数量限定についてである。量的程度副詞と概略副詞が程度限定の機能を担っている際は共起する語が相補的であることは既に述べたが、数量限定機能を担っている場合には共起する動詞にそういった相補性は見られない。両語群が同

23　仁田(2002)の定義の中には「量」という語が出てくるが、これは「ダイダイ２杯飲ンダ」「ホボ３㎝伸ビタ」のような場合に出てくる「数量」のことである。この「ダイタイ」「ホボ」はそれぞれ後接する「２杯」「３㎝」の概括数量を示す働きをしている。本研究でいう数量とは「ダイタイ飲ンダ」や「木ノ葉ガホボ落チタ」のような副詞自体が数量を表すものを指すものであり、仁田(2002)が言う「量」とは違うものである。

じ動詞と共起する。

それを例にあげたのが花井(1980)である。(６)(７)のような例をあげて量的程度副詞と概略副詞が同じように数量限定機能を果たすということを指摘している。

（６） つぼが少しこわれた

（７） つぼはおおむねこわれた　［花井(1980.p77)］

(６)は量的程度副詞「少し」、(７)は概略副詞「おおむね」がそれぞれ「こわれた」という同一の動詞と共起している。この場合(６)(７)の解釈はそれぞれ二通り考えられる。一つは単数のつぼの壊れた度合いが「少し」「おおむね」という場合と、もう一つは壊れたつぼの数量を表す場合とである。

花井(1980)は、その二つの解釈可能性を指摘した上で、「数量の概念を修飾する限りにおいては、一般の程度副詞と概略表現の副詞の間に質的な相違はない」(p77)としている。

果たして(６)と(７)の間に質的な相違がないというのが支持されるべき事柄だろうか。もしそうだとしたら量的程度副詞と概略副詞は程度限定場面では相補的な関係性を示すが、数量限定場面では同じように数量を表すという共通の性格を有することになる。

そういった点を念頭におきつつ、概略副詞の基本的性質について見ていくことにしよう。

６．１　数量性

ここでは概略副詞の数量性について見ていく。

６．１．１　主体・対象の数量

概略副詞が主体や対象の数量を限定している例を(８)～(10)にあげる。

(８)　ロンドンと一回話すと王様の小遣いが大方なくなった。
(９)　裁判をやっているらしいということは知ってはいても、職制も従業員もおおむね当たらずさわらずであった。
(10)　たとえば、近年になって電子秤が普及したので、実験に使われていた天秤がほとんど捨てられる運命となった。

(８)は「大方」が「なくなった」「王様の小遣い」の数量を、(９)は「おおむね」が「当たらずさらわず」という態度をとる「職制」「従業員」の数量を、(10)は「ほとんど」が「捨てられる運命となった」「天秤」の数量を表している。

続いて対象の数量を表す例である。

(11)　おかげさまで、僕は僅か一夜にして、アタリＳＴのゲームソフトを大方網羅してしまっ

た！

(12) 研究学園都市の場合にかぎらず、科学技術会議の答申で要望された施策はおおむね実施に移された。

(13) 学生時代は、日本映画はほとんど見なかったけれども、外国映画で、評判のものは、だいたい見ていたと思います。

(14) たくましい大柄な体がその空間をほとんどふさいでいる。

(11)の「大方」は「網羅してしまった」「ゲームソフト」の数量を、(12)の「おおむね」は「実施に移された」「施策」の数量を、(13)の「だいたい」は「見ていた」「外国映画」の数量を、(14)の「ほとんど」は「ふさいでいる」「その空間」の数量を限定している例である。

(８)～(14)の例からも分かる通り、概略副詞が主体や対象の数量を表す用法を持つのは間違いない。また、これまで見てきた他の数量を表す副詞に関しても、すべて主体や対象の数量を表す機能を有している。この機能は数量を表す副詞には必須の機能であると言えよう。

６．１．２　動きの量

動きの量を表す用法である。

(15) わたしはといえば、途中おおかた眠っていた。

(16)　当時宇治に籠居を余儀なくされていた父忠実のもとにおいて成長したようである　が、宮廷出仕後も、父の平常の居所である宇治と京都との間をしばしば往復し、殊に晩年失脚後の一年余は概ね宇治に籠居していた。

(17)　安土の城を書こうと決めてから最初の二、三年はだいたい史料を読むだけ。

(18)　ほとんどレコードを聞いていましてね。

(15)～(18)を詳しく検討すれば分かるが、これらの例はすべて「時間量」を限定している例である。(15)の「おおかた」は「眠っていた」時間量を、(16)の「概ね」は「宇治に籠居していた」時間量を、(17)の「だいたい」も「史料を読む」時間量を、(18)の「ほとんど」も「レコードを聞いていた」時間量を表している。

時間量の他には概略副詞が動きの量を限定している用例を見つけることはできなかった。こういったことからも概略副詞は動きの量を表す中でも、特に時間量を表すことに特化しているということができるだろう。

６．１．３　表現性の違い

ここまでのことから考えると、概略副詞は数量限定の場面において「主体・対象の数量」を表すことが主な働きになるわけだが、その主体や対象の数量を表す例をよく観察すると、これまで見てきた量的程度副詞や量の副詞などとは性質が少し異なるということに気づく。もう少し言うと、表現性が異なるということになるのだが、その理路につ

いて説明する。

６．１．３．１　基準値の必要性

表現性の異なりを考えるため、まずは(19)を見てみよう。

(19)　大きくなるまで食べられないものがずいぶんあったわ。

(19)は量的程度副詞である「ずいぶん」が「食べられないもの」の数量、すなわち「主体の数量」を表している例である。この(19)の「ずいぶん」の位置に概略副詞を入れてみると、(19)’のように不自然な表現となる。

(19)’?大きくなるまで食べられないものが【オオカタ／オオムネ／ダイタイ／ホトンド】あったわ。

しかし反面、次の(20)(20)’のように両者を入れ替えても非文とならないものもある。

(20)　アテネを目指す新チームはゼロからのスタート。銀のメンバーはだいぶ残っているが、世界も力を蓄え、上位を狙っている。

(20)’アテネを目指す新チームはゼロからのスタート。銀のメンバーは【オオカタ／オオムネ／ダイタイ／ホトンド】残っているが、世界も力を蓄え、上位を狙っている。

同じ主体の数量を表す場面にも関わらず、(19)’では非文となり(20)’では自然な文として許容されるという違いは、概略副詞の根本的な性格を元に説明できる。

花井(1980)は概略副詞の性格を「ある状態を基準として、そこへの接近を程度において修飾する」(p80)としている。この花井(1980)の考察には本研究で扱っているような数量限定機能は含まれていないが、数量限定の場合もこれを適用できる。

花井(1980)が言うところの「程度」に数量的な概念も含まれていると考えると、概略副詞は「ある状態を基準」として、そこへどれだけ数量的に「接近」しているかを表すものということになる。ならば数量限定が成立するためには「ある状態を基準」とするもの、すなわち「基準値」が不可欠である。(19)’にはその基準値がなく、(20)’にはその基準値があるのである。

この基準値については「ホトンド」についての論考である大倉(1985)でも言及されている。大倉(1985)はその基準値の中でも特に数量にかかわる基準値を「極限状態設定語」としている。用例を見ると分かりやすい。(21)(22)である。

(21) まず、第一に解説のページがどの項目も一定量に限定されているため、発展的な興味深い内容はほとんどすべて削除されてしまっています。

(22) 特に、大ぜいを対象にして話すときには、全員を一人一人見るというわけにはいかないが、あるブロック、ブロックの代表者を探し、その人と目をつないで話すようにすると、その人が代表となってだいたい全員に話している感じを与えるものだ。

(21)は「ほとんど」の「極限状態設定語」として「すべて」が、(22)は「だいたい」

の「極限状態設定語」として「全員」が用いられている。この「すべて」や「全員」を基準値として、今表そうとしている数量がどれだけ接近しているかを「ほとんど」「だいたい」が表しているのである。

これを踏まえた上で、再び(20)(20)’を考えてみよう。

(20)　アテネを目指す新チームはゼロからのスタート。銀のメンバーはだいぶ残っているが、世界も力を蓄え、上位を狙っている。

(20)’アテネを目指す新チームはゼロからのスタート。銀のメンバーは【オオカタ／オオムネ／ダイタイ／ホトンド】残っているが、世界も力を蓄え、上位を狙っている。

この(20)の文が言わんとするところは「アテネオリンピックを目指す新チームには前回のオリンピックで銀メダルを獲得したメンバーが「だいぶ」という語で限定できるほど残っている」ということである。これが(20)’のように概略副詞に入れ替えることができるのは、前回のチームのメンバーの総数が、明示されてはいないが想定可能だからである。「前回のチームのメンバーの総数」＝「極限状態設定語」＝「基準値」が想定可能なため、その基準値からの数量的な接近の度合いを概略副詞が限定できるのである。

つまり「極限状態設定語」＝「基準値」が潜在的に存在していればそれが明示されていようがなかろうが、概略副詞が限定を行う上で問題が生じないのである。

一方(19)’の場合は基準値に当たるものがない。

(19)’?大きくなるまで食べられないものが【オオカタ／オオムネ／ダイタイ／ホトンド】あったわ。

「食べられないもの」の数を限定したくても、その基準となる数量の値が存在しないので(19)’は非文となるのである。

つまり、概略副詞が数量限定として用いられるためにはまず数量的な基準値が想定可能でなければならない。その基準値とは表すべき数量の極限状態を設定したもの、すなわち「全体数量」である。そしてその全体数量である基準値との接近の数量的度合いがどのくらいかを表すのが概略副詞の機能なのである。

６．１．３．２　基準値の異なり

しかし、その他の数量を表す副詞―量的程度副詞、量の副詞、否定程度副詞―にしてもある数量を「ズイブン」とか「タクサン」とか「アマリ」と限定する過程においては何らかの基準が必要となる点では異なるところがない。

例えば、(23)(24)のような発話を想定してみよう。

(23)　昨日ハ、オ酒ヲ【カナリ／ズイブン／イッパイ／タクサン】飲ンダ。

(24)　昨日ハ、オ酒ヲ【アマリ／タイシテ】飲マナカッタ。

(23)(24)の場合、「カナリ」とか「アマリ」等のように数量を限定する基準は、「一般的な飲酒の量」であるとか「自分の普段の飲酒量」などである。ある人にとっての「タクサン」が、またある人にとっては「スコシ」になるかもしれない。ある人が自分の飲酒の量を「アマリ飲マナカッタ」としても、他の人が見たら「タクサン飲ンデイタ」という指摘を受ける可能性もある。

つまり、量的程度副詞、量の副詞、否定程度副詞が表す数量の基準値となるものは、一般的な数量的基準があるとしても、究極的には個人の主観に委ねられており、その基準を話し手と聞き手が共有していなくても特に問題はないのである―もちろんそれが聞き手に何らかの行為の実現を働きかける場合には問題が生じる―。

一方で概略副詞の要求する基準値というのは発話がなされる時点で話し手と聞き手の間でその全体量についての合意が形成されていて、聞き手が想定可能でなければいけない。

このように概略副詞とその他の数量を表す副詞では、数量を表す際の基準値の取り方が全く異なるのである。

６．１．３．３　表現性の違い

ここまでの議論で、概略副詞が数量を表す際の基準値の取り方と、それ以外の副詞が数量を表す際の基準値の取り方が異なることがわかった。基準値のとり方の違いはそれが表す数量の表現性の違いへと結びつく。

結論から言うと、概略副詞は「数量の割合」を表し、それ以外の副詞は「数量の多寡」を表すのであるが、まず「数量の割合」を表すという点から確認してみよう。

我々は日常生活を営む上で「～割」や「～%」といった割合を表す言葉を使用するが、「～割」「～%」という言い回しも、全体量である基準値からの近づきがどのくらいであるのかを表すものである。

(25)　そして、ゴミの再資源化は90%可能だということも分かった。

(26)　両方の免疫を持たない子供は１歳児で３割弱、２歳児で１割いた。

(25)(26)における「90%」や「３割弱」「１割」というのは何に対する「90%」なのか、「３割弱」なのか、「１割」なのかがわからなければまったく意味をなさない。つまり全体量である基準値が必要である。そして更に、これらの文が伝えようとしているのは「何トン」とか「何人」とかいうような０トン、０人という点を基準としてどれだけの大きさを持つものなのかを表す数値ではない。重要なのはある基準値からどれだけ近づいているか―離れているか―なのである。

ただ、概略副詞には大きな割合を表す語しかない。小さな割合をも自由に表せる「～%」「～割」とはそういった意味では性格を異にする点もあるが、「割合」を表すという意味では概略副詞と「～%」「～割」という表現とは近いものがあることは確かである。

また一方、量的程度副詞、量の副詞、否定程度副詞が表すのは「数量の多寡」である。

表すべき数量が、前項で説明したような主観的な基準値からどれだけ離れており、どのくらいの多さなのか、どのくらいの少なさなのかを表すものである。

この「数量の割合」「数量の多寡」の違いは(27)～(29)を見るとよく分かる。

(27)　オ酒ヲ【オオカタ／オオムネ／ダイタイ／ホトンド】飲ンダ。

(28)　オ酒ヲ【カナリ／ズイブン／タクサン／イッパイ】飲ンダ。

(29)　オ酒ヲ【アマリ／タイシテ】飲マナカッタ。

(27)～(29)どれも「飲ンダオ酒」の数量を限定するという点で共通している。しかし(27)のような発話が成り立つためにはどういった数量を基準とした「オオカタ」なのかが話し手と聞き手の間で共有されていないといけない。そしてその基準値を全体数量としたうちのどのくらいの割合を飲んだのかを表すのが「オオカタ」をはじめとする概略副詞の表現性である。

一方、(28)(29)はそのような話し手、聞き手間での基準値の合意を必要としない。話し手が独自の基準に則って、自由に「飲ンダオ酒」の数量を「カナリ」とか「アマリ」等と決めることができるのである。つまりこれは「カナリ」や「アマリ」が単純に数量の大小を表す語として機能していることであり、数量の多寡を表していると言えるのである。

６．１．３．４　全称数量詞

このように副詞が表す数量には「割合」と「多寡」があり、概略副詞が前者を担い、量的程度副詞、量の副詞、否定程度副詞が後者を担っているわけだが、数量の割合を表すのは概略副詞だけではない。全称数量詞という語群がある。

全称数量詞は２．２．５．２でも概説したが、集合の元をあますことなく指し示すものであり、具体的には(30)のような語を指す。

(30)　スベテ、ゼンイン、ゼンブ、ミンナ

(30)の語は、副詞ではないとしても副詞的に用いられるのは確かである。(30)～(33)が全称数量詞が副詞的に用いられている例である。

(30)　その他の私達のものも総て持ち去ったといわれる。
(31)　そのため、チェーサのたびに親族が全員集まっていた。
(32)　壇上で、ズボン、ワイシャツと、ポケットというポケットは全部探したが、どこにも原稿はない。
(33)　「クソオヤジで十分だろ！　この、人の服みんな燃やしちまいやがって！」

(30)の「総て」は「持ち去った」ものの数量、(31)の「全員」は「集まっていた」「親族」の数量、(32)の「全部」は「探した」「ポケット」の数量、(33)の「みんな」

は燃やした「服」の数量を限定していると見ることができる。

この全称数量詞のふるまいは概略副詞と類似している。例えば、(31)において「全員」という語が数量を指し示す語として生きるためには、その「全員」の範囲がどこからどこまでであるか、という共通理解が話し手と聞き手の間に成立している必要がある。この(31)の場合は「チェーサ」(祭祀)に集まる「親族」がその範囲＝基準値であるわけだが、この基準値は概略副詞が要求する基準値と同じ種類のもの＝全体数量である。

このことは(31)の全称数量詞を概略副詞に入れ替えた (31)’を見るとよく分かる。

(31)’そのため、チェーサのたびに親族が【オオカタ／オオムネ／ダイタイ／ホトンド】集まっていた。

(31)’において、各概略副詞が表している数量性は元の「全員」が表している数量性と同じ種類のものである。「全員」が用いられた場合にはその数量性は「基準値の100%」の量を表しているのであり、概略副詞が用いられた場合には数量性として―確定的な数字をあげることは不可能だが―「基準値の90%」くらいの量を表しているのである。つまり全称数量詞にしても概略副詞にしても「数量の多寡」を表すのではなく「数量の割合」を表す。そういった点で全称数量詞と概略副詞は同じ数量的表現性を有していると言えるのである。

６．１．３．５　数量の割合を表す語群と数量の多寡を表す語群

これまでの議論から、副詞的に数量を表す場合には「多寡」と「数量」という二つの表現性があることがわかった。肯定文脈での使用をひとまず考えるとすると、(34)のように前者を担当する語群が「量的程度副詞」と「量の副詞」であり、後者を担当するのが「概略副詞」と「全称数量詞」である。

(34)

４つの語群がその数量的表現性の違いから(34)のようにカテゴライズされることがわかったが、次節でこれらの陳述性を見ていくことによって、もう少し複雑な対応関係が明らかになると思われる。

しかし、その前に本章冒頭で出した疑問である花井(1980)の提出した「つぼが少しこわれた」と「つぼはおおむねこわれた」との違いについて触れておく。

ここまでの議論を鑑みるとすぐに分かることだが、両者に「質的な相違はない」とした花井(1980)の主張は否定せざるを得ない。

「つぼはおおむねこわれた」の「おおむね」は「こわれたつぼの数の割合」を表すた

め、「基準値＝すべてのつぼの数」が想定できない限りこの発話は成立しない。また、意味的な焦点も「こわれたつぼの数が多い」ということではなくて「大部分がこわれた」という点にある。一方の「つぼが少しこわれた」が問題にしているのは「こわれたつぼの数の多寡」である。「そもそもつぼがいくつあったか」はさして問題にはならない。単に「こわれたつぼ」の数量が「少し」という語を以って限定されるだけなのである。

もちろん概略副詞を用いても量的程度副詞を用いても結果的に「つぼが10個こわれた」といった事実を表すことは可能であるが、そこに至るまでのアプローチが両者間で大きく異なるため、はっきりとした「質的な相違」があると言える。概略副詞は「数量の割合」を表すという点で、「数量の多寡」を表す量的程度副詞と明らかな相違点を持つのである。

６．２　陳述性

まず概略副詞の陳述的特徴を見ていく。その上で、その他の量的程度副詞、量の副詞、全称数量詞との関連性について考えていきたい。

６．２．１　肯定文脈での使用

概略副詞も肯定文脈での使用が原則であると考えられる。これは花井(1980)も述べているが、「ただ否定されたものが「　」の条件つきで、修飾されたり、否定形を含んだ

文全体の概念の蓋然性が示されるときはこの限りではない」(p83)とあり、(35)のような例をあげている。

(35)　あそこへ行ってもたいていそれは買わない。　[花井(1980.p83)]

(35)の「たいてい」は否定文脈で用いられてはいるが、「買わない」量や程度を限定しているのではなく「買わない事実が起こり得る蓋然性」を示している。

しかし「ホトンド」だけはそのような用法でなくても否定文脈で用いられ数量を表すことができる。

(36)　その対象は士農工商全般にわたっているが、武士がもっとも多く、農工にいたってはほとんど描かず、商人はかなり描いている。

(37)　この手相の人は、何かをやり遂げようとする気概はほとんどありません。

実際に「ホトンド」が使われている用例を探してみると、(36)(37)のように否定文脈で用いられているケースの方が肯定文脈で用いられているケースより遥かに多い。だが、花井(1980)は「「ほとんど～ない」は一種の婉曲表現ではないかと考えられる」(p84)とも述べており、基本的な用法は肯定表現との共起であるという見解を示している。

もちろん「ホトンド」と肯否のみとめ方との関連は「婉曲表現」という一言で片付けられるほど単純ではないが、本研究では花井(1980)の見解に沿い「ホトンド」の基本的

用法は肯定文脈での使用であるという記述に従うことにする。

６．２．２　聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との非共起

次に検討すべきは聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式と共起できるかどうかという点である。

結論から言えば概略副詞はこのようなモダリティ表現とは共起しない。共起しないために、共起しない用例を提示することは難しいが、「ホトンド飲ンデクダサイ」「オオヨソ読ミマショウ」などの表現が規範から逸脱していることは特に説明を要することでもないだろう。

こういった、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式と共起しないということは、つまるところ、概略副詞の表す数量が客観性に欠けるということに起因している。「ホトンド飲ンデクダサイ」が非文になるのは、話し手が想定する「ホトンド」の量が必ずしも聞き手が想定する「ホトンド」の量と一致するとは限らず、量を表す「ホトンド」が行為を遂行する上での量的な必要情報として成り立たないためである。

こうしてみると、概略副詞は「スコシ」「チョット」を除いた量的程度副詞と同じような位置づけにあると考えることができる。概略副詞が「主観的に数量の割合を限定する働きを有する語群」であるとすれば、「スコシ」「チョット」を除いた―つまり数量性大の―量的程度副詞は「主観的に数量の多寡を限定する働きを有する語群」であると

言うことができ、両者の違いは「数量の割合」を限定するか、「数量の多寡」を限定するかの違いに還元することができる。

６．２．３　全称数量詞と量の副詞との対応

概略副詞と同じく数量の割合を限定する働きを持つ全称数量詞であるが、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式と共起するという点で異なった陳述性を見せる。(39)～(42)である。

(39)　「さて、時葉。私に全てはなしてくれるね？」　　【依頼】
(40)　途々匪襲を防ぐ方法もない、いずれ全員が殺されるか死ぬにきまっているのだから、せめて全員銃殺してもらえないか。　　【依頼】
(41)　とにかく人間の知恵、思考、思い煩い、心配など全部捨てましょう。　　【勧誘】
(42)　出場を目ざして、みんな頑張れ！！　　【命令】

(39)～(42)はそれぞれ全称数量詞が聞き手に何らかの行為の実現を働きかけるモダリティ形式と共起している例である。

これらがこのような形式と共起することは簡単に説明できる。まずどのようなモダリティ形式であれ全称数量詞を用いた文が成立するということは、基準値が話し手・聞き手間において明確に共有されているからである。そして全称数量詞というのはその基準

値と表す数量性がイコールの関係にあるものである。だから聞き手は(39)のように「全てはなしてくれるね？」という働きかけを受けた場合、その「全て」の範囲については既知のため、その働きかけに応じることが可能である。つまり、表す数量が客観的なものであるということである。

このような事実から、全称数量詞はその陳述性という観点で言うと、量の副詞と対応関係を持っていることがおぼろげながら分かってくる。量の副詞も全称数量詞と同じく、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式と共起することは既に第４章で論じた。どちらの語群も同じ陳述性を有し、その陳述性は語としての客観性に由来していることが分かる。

つまり、量の副詞は「客観的に数量の多寡を限定する」働きを有する語群であり、全称数量詞は「客観的に数量の割合を限定する」働きを有する語群であるので、これらは対応関係にあるということができる。それは前項で指摘した量的程度副詞と概略副詞との対応関係とパラレルな関係であるとも言える。図示すると、(43)のようになる。

(43)

	主観的	客観的
数量の多寡	量的程度副詞	量の副詞
数量の割合	概略副詞	全称数量詞

６．３　名詞性

概略副詞、全称数量詞の名詞性について見ていくことにする。

６．３．１　「ハ」の後接

まず、概略副詞が「ハ」を後接させて取り立てられている例である。

(44)　とくに社会政策学会のような専門学会やそこに属する学者のおおかたは、そのように理解してきた。

(45)　時々はしゃがみ込んだり、ガードレールにお尻をひっかけるようにしてのせて休んだりしていますが、おおむねは立っていて、それはたとえばよく気がつく人の目で見れば、女学生の幽霊にも見えるのではないかと、自分で考えたことです。

(46)　今でも末端の組合員なんか大体はそんな感覚やないやろうか。

(47)　富士山の山小屋のほとんどは岩を利用してたてられている。

(44)～(47)のように概略副詞は「ハ」による取り立てを受けられる。「ハ」による取り立てを受け得るということは、取り立てるだけの実質的概念性が概略副詞に含まれているということである。

これまで見てきた副詞に関しては「ハ」を後接させえるとしても、その後に否定表現

が来なければならないなど何らかの縛りがあった。だが、概略副詞に関してはその他の名詞と同じように何ら条件もなく自由に「ハ」による取り立てを受け、文の主体として機能することができる。

また、全称数量詞についても見てみよう。(48)～(51)は全称数量詞が「ハ」の取り立てを受けている例である。

(48) 結局、なんだかんだ言っても、すべては自分を中心に考えればいい。

(49) その心の全部は子供達の遊戯に伴う危険さに集注された。

(50) 集まった生徒全員は青い鳥の優雅な飛び方と、その輝きに心奪われる。

(51) 国のみんなは元気だろうか。

全称数量詞は、直感的にも一般の認識的にも名詞に属する語群であると考えられる。そのため、やはり「ハ」を後接させて取り立てを受けることに何ら支障はないようである。「ゼンブ」に関しては(52)(53)のように、否定文脈と共起する例が多く見つかったが、(54)のような肯定文脈で用いられる例も少なくなく特に共起する文脈については肯定・否定を問わない。

(52) 倫理の教えは宗教によって違うので、全部は説明しきれない。

(53) 試験に出された問題に，受験者が必ずしも全部は答えられないということは珍しいことではない。

(54)は概略副詞である「ホトンド」と全称数量詞である「ゼンブ」が同文に用いられている例である。このような例からも概略副詞と全称数量詞は特に問題なく、同じように「ハ」による取り立てを受け得ることが分かる。

(54)　もちろん全部は食べきれませんから、ほとんどは小さく切って凍み餅にしました。

６．３．２　「ノ」の後接

次に概略副詞が「ノ」を後接させている例である。

(55)　この判例理論は大方の賛成を得ているが，対抗力なき賃借権の取扱い，侵害の態様による理論構成の区別化の是非などの問題が残されているといえよう。

(56)　取り締まりはさほど厳しいものではなく、踏み込まれたおおむねの店が一週間後には営業を再開した。

(57)　だいたいの電話が、こちらが答え終わる前に慌しく切られてしまう。

(58)　しかしながら、ほとんどの人々にとって、それ(現代のクラシック音楽)は非常に耳ざわりであり、私自身、それを職業としている人以外に愛聴しているという人には会ったことがない。

(55)～(58)のように概略副詞は「ノ」を後接させることもできる。

その内実を見ても、基準値＝全体量を基準としてその基準値からの数量の割合を表すという基本的機能も「ノ」の後接によって何ら変わってはいない。

全称数量詞はどうであろうか。(59)～(62)は全称数量詞が「ノ」を後接させている例である。

(59) クリスマスは、すべての人に与えられた、大いなる喜びのおとずれであると、ベツレヘムの野にあらわれた天使が告げました。
(60) サクラ市のぜんぶの小学校の先生や父母の代表の人とね。
(61) 事務室の職員全員の手が止まった。
(62) 最終選考は読者のみんなの投票で決定するよ、じゃんじゃん参加してね！

(59)～(62)を見ると分かるように、やはりここでも全称数量詞は概略副詞と同じように働いていることが分かる。

６．３．３　被修飾

名詞性をはかる最後はその他の語による修飾を受けえるかどうかである。

概略副詞においては、他の語による修飾を受ける例を確認することができなかった。存在しない用例をここで提出することはできないが、「トテモオオカタ」「カナリオオムネ」、「ゴクダイタイ」、「ホボホトンド」などの表現が規範から逸脱していること

は直ちに了解されるであろう。

全称数量詞はどうであろうか。以下(63)～(66)は全称数量詞が何らかの語による修飾を受けている例である。

(63) でも、ひとたび核戦争が起れば、人類はおろか、ほとんどすべての種が、明日にでも死滅する。

(64) その報告書を見ると、いま問題になっているメディア規制、表現規制がほぼ全部出ている。

(65) 現在でも、スウェーデンの有名人はほぼ全員、外国に住んでいます。

(66) けっこうみんなアクセスしてることが判明。

(62)の「すべて」は「ほとんど」の、(64)の「全部」は「ほぼ」の、(65)の「全員」は「ほぼ」の、(66)の「みんな」は「けっこう」の修飾を受けていると考えられる。

ここまで「ハ」や「ノ」の後接においては概略副詞と同じような働きを見せていた全称数量詞であるが、唯一この修飾語を受け得るかにおいては違うふるまいを見せた。

６．３．４　高い名詞性

ここまでで得られたことをまとめてみよう。

概略副詞は「ハ」や「ノ」を後接することができる。これは副詞に属しながらも名詞的な力が強いことを示している。しかし他の語による修飾は受け得ない。これは概略副

詞が名詞的な力はあっても、それが指し示す数量性に主観的な要素が多いことと関係していると思われる。

一方、数量の割合を表すということで概略副詞と表現性を同じにする全称数量詞は、その出自が名詞だということもあり、「ハ」「ノ」の後接にも何ら問題はないし、他の語による修飾も受け得る。

こういった結果を考えると、概略副詞と全称数量詞は両者とも強い名詞性を有しているが、全称数量詞の方がさらに高い名詞性を有しているということが言える。

６．４　まとめ

本章では概略副詞の性質を考えつつ、その周辺に位置する全称数量詞の性質についても見てきた。ここまで得られたことをまとめてみよう。

まず数量性である。概略副詞は主体や対象の数量を表す機能を有するが、動きの量を表す機能に関しては時間量の解釈ができるものがいくつか見られるにとどまった。これより概略副詞の基本機能は主体や対象の数量を表すことであると言えるだろう。

また、表す数量の表現性としては、「数量の割合」を表すという特性を持つと言える。これは量的程度副詞や量の副詞が「数量の多寡」を表すのとは種類の違ったものである。この数量の割合を表すという特性のため、その数量限定のメカニズムも量的程度副詞や量の副詞とは多少異なっている。量的程度副詞や量の副詞ではある数量を表す場合、その数量が大きいか小さいかという基準は話し手の内的なものであるとか、社会通念とい

ったものによる。だが、概略副詞の表す数量の割合の大小という観念の基準値はその文脈上の全体量となる。その全体量を基準としてどの程度の割合であるのか、を表現するのが概略副詞である。

続いて陳述性である。概略副詞は量的程度副詞と同じように肯定文脈での使用が基本となり、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式では用いられないという陳述的性質を持つ。これは概略副詞が表す数量が主観的なものであるということを意味している。

そして最後に名詞性であるが、概略副詞は助詞の「ハ」や「ノ」を後接して名詞的に用いられることが分かった。これまで見てきた副詞に比べて名詞性は高いと考えられる。

このようなことから概略副詞は「主観的に数量の割合を限定する働きを有する語群」と位置付けることができ、それは「主観的に数量の多寡を限定する働きを有する語群」に位置づけられる量的程度副詞と対応関係を有していることが分かった。

また、概略副詞の周辺に位置する語群として全称数量詞についても本章では触れたわけだが、この語群は「客観的に数量の割合を限定する働きを有する語群」として位置付けられる。そして同じく「客観的に数量の多寡を限定する働きを有する語群」として位置付けられる量の副詞とある種の対応関係を有しており、陳述性などでも同じようなふるまいを見せることが分かった。つまり量的程度副詞、量の副詞、概略副詞、全称数量詞はそれぞれ、主観的か客観的か、数量の多寡を表すか数量の割合を表すか、という二つの軸によってそれぞれ対応関係を有しているのである。

これを含めた各語群間の対応関係については次章で詳しく論じることにしよう。

第７章　数量を限定する副詞

第３章から第６章まで、数量を表す４つの副詞について詳しく見てきた。この章ではこれまでの各論で得られた結果を土台として、それぞれの副詞がどのような機能的な棲み分けを行なっているのか、またどのような体系の中に位置づけられるのかを考察する。

７．１　数量を限定する副詞の機能的棲み分け

これまで見てきた副詞はすべて、「数量を限定する」という点において共通点を持つ。ただ、その限定の方式やそれに付随する各語群の性格は極めて複雑で様々な特徴があることが分かった。

ここではまず、これまで各論で検討してきた各語群の特徴を比べながら、それぞれの語群が「数量を限定する」という枠組みの中でどのような機能的な棲み分けを行なっているのかを明確にしていく。

結論から言うと、その際に要点となるのはそれぞれの語群の「数量性」における「限定方式」と「陳述性」における「肯定・否定のみとめ方」「聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との共起可否」である。各論でそれぞれ検討したこれらの要点を軸に、まずは隣接すると思われる各語群を比較し、それぞれの機能性を浮き彫りにする。最後に全体としてどのような構造になっているのかを指摘する。

７．１．１　否定程度副詞と量的程度副詞(大)

まずは第５章、第３章で検討した否定程度副詞と量的程度副詞を比べてみよう。

まず断っておかなければならないのは量的程度副詞の方なのであるが、第３章で検討したように、この語群は比較的表す数量が大きいと思われる「カナリ」「ズイブン」「ソウトウ」「ダイブ」と、表す数量が小さいと考えられる「スコシ」「チョット」では著しく性格が異なる。そのため、数量性小を表す後者の二語は別枠として捉えることとして、ここでは前者の数量性大を表す「カナリ」「ズイブン」「ソウトウ」「ダイブ」のみを対象とする。便宜上、これらの語を「量的程度副詞(大)」とすることとし、一方の「スコシ」「チョット」を「量的程度副詞(小)」と記述することにする。

考察対象とした否定程度副詞と量的程度副詞(大)は(１)(２)の通りである。

（1） アマリ、サホド、タイシテ、スコシモ、ゼンゼン、チットモ【否定程度副詞】

（2） カナリ、ズイブン、ソウトウ、ダイブ　　【量的程度副詞(大)】

では、否定程度副詞と量的程度副詞(大)の機能的棲み分けがどのように行なわれているかを考えてみよう。違いを考える例として(３)(４)をあげておく。

（3） 水ヲサホド飲マナカッタ。

（4） 水ヲカナリ飲ンダ。

（3）（4）の「サホド」「カナリ」はそれぞれ「飲ンダ―もしくは飲マナカッタ―」水の数量を限定している。両者の数量性は全体数量に対する割合を表すものではなく、純粋に「飲ンダ」水の数量の多寡を表している。

そしてどちらも、（5）（6）のように聞き手に働きかける形式を帯びた文では用いられない。

（5）*水ヲサホド飲マナイデクダサイ。

（6）*水ヲカナリ飲ンデクダサイ。

これは否定程度副詞と量的程度副詞(大)の持つ数量が主観的なものであることを表している。

このように似通いのある二つの語群であるが、決定的な違いは肯定文脈で働くか、否定文脈で働くかという点である。第５章では否定程度副詞と量的程度副詞(大)が肯定否定といったみとめ方を基準とした対称的対応関係にあることを確認した。これは二つの語群が、肯定表現と共起するか否定表現と共起するかという点でのみ差異を持つということを意味している。

こういった両者の異同を端的に表したのが（７）の表である。これを見ると両語群が「みとめ方」の部分において対称的な関係を有していることがよく分かる。

（7）

	限定方式	みとめ方	聞き手
否定程度副詞	多寡	否定	×
量的程度副詞(大)	多寡	肯定	×

７．１．２　量的程度副詞(大)と量の副詞

次に量的程度副詞(大)と量の副詞である。両語群に属する語は(８)(９)の通りである。

（8） カナリ、ズイブン、ソウトウ、ダイブ　　【量的程度副詞(大)】

（9） イッパイ、タクサン、タップリ、ドッサリ　　【量の副詞】

第４章でも見てきたようにこの両語群はふるまい方が非常によく似ている。

(10) 水ヲカナリ飲ンダ。

(11) 水ヲタクサン飲ンダ。

(10)と(11)のように両者とも肯定文脈で用いられ、両者の差は単純な数量を表す表現においては表面化しない。

唯一その違いが前景化されるのは、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との共起においてである。

(12) *水ヲカナリ飲ンデクダサイ。

(13) 水ヲタクサン飲ンデクダサイ。

量的程度副詞(大)は(12)のように、それが有する主観的性質のために話し手と聞き手間で数量的合意を共有できないため非文となり、逆に量の副詞は(13)のように、それが有する客観的性質のために話し手と聞き手の間で数量的合意を共有できるために非文とならないのである。

(14)は量的程度副詞(大)と量の副詞の異同を端的に表したものである。

(14)

	限定方式	みとめ方	聞き手
量的程度副詞(大)	多寡	肯定	×
量の副詞	多寡	肯定	○

７．１．３　量的程度副詞(大)と概略副詞

次は量的程度副詞(大)と概略副詞である。両語群に属する語は(15)(16)の通りである。

(15)　カナリ、ズイブン、ソウトウ、ダイブ　　【量的程度副詞(大)】

(16)　オオカタ、オオヨソ、ダイタイ、ホトンド　　【概略副詞】

量的程度副詞(大)と概略副詞は共に肯定文脈での使用が基本となる。

(17)　水ヲカナリ飲ンダ。

(18)　水ヲオオカタ飲ンダ。

また、主観的な観点から数量限定を行なうという点で共通点を持っているため、聞き手に何らかの行為の実現をはたらきかける表現形式とは両者とも共起しない。

(19) *水ヲカナリ飲ンデクダサイ。

(20) *水ヲオオカタ飲ンデクダサイ。

肯定文脈での使用、聞き手に何らかの行為の実現をはたらきかける表現形式との非共

起という点で共通点を持つわけだが、第６章で検討したようにその限定の方式は著しく異なる。

数量限定を行なうすべての語は数量を限定する時、何らかの基準値を要求する。その基準値に照らし合わせて限定すべき数量の大小を言うことができる。概略副詞の場合はその基準値が全体数量となる。表すべき数量がその全体数量という基準値からどれだけ近づいているのか限定するのが概略副詞である。これは話者の内的な基準や、社会通念や平均値などを基準値としてとる量的程度副詞(大)とは質的に異なる。

例えば、何も前提がなく(21)(22)の発話がなされたと仮定してみる。

(21)　昨日ハ、酒ヲカナリ飲ンジャッタ。

(22) ?昨日ハ、酒ヲオオカタ飲ンジャッタ。

(21)は特に問題にならないが、(22)は何も前提がない場合はかなり不自然な表現になる。もし(22)が不自然な文にならないとしたら、「酒」の全体数量について話し手と聞き手が了解しているという前提が必要となる。

要するに、この両語群はどのような基準を基準値としてとるかという限定方式の違いによって対称的な関係を有しているのである。

(23)はそれは表にしたものである。

(23)

	限定方式	みとめ方	聞き手
量的程度副詞(大)	多寡	肯定	×
概略副詞	割合	肯定	×

７．１．４　量の副詞と全称数量詞

全称数量詞は副詞に属するとは考えられないが、副詞的な用法があるのは事実である。量の副詞の性格を浮き彫りにするためには比較対象として全称数量詞を取り上げることが有益である。ここでは全称数量詞を、数量限定機能を有する副詞的語群として位置づけておく。まずは、量の副詞と全称数量詞に属する語を確認しておく。

(24)　イッパイ、タクサン、タップリ、ドッサリ　　【量の副詞】

(25)　スベテ、ゼンイン、ゼンブ、ミンナ　　【全称数量詞】

まず、(26)のように量の副詞は肯定文脈で使用されるが、全称数量詞は(27)のように肯否の制約を持たない。

(26)　水ヲタクサン【飲ンダ／ *飲マナカッタ】。

(27)　水ヲゼンブ【飲ンダ／飲マナカッタ】。

また量の副詞と全称数量詞は数量に対する客観性を共通的に有するということで、(28)(29)のように、両者ともに聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式を持った語と共起することができる。

(28)　水ヲタクサン飲ンデクダサイ。

(29)　水ヲゼンブ飲ンデクダサイ。

しかし、その限定方式は異なる。量の副詞が数量の多寡を限定するのに対して、全称数量詞が限定する数量は、その多寡を問題としない。全体数量を基準値とし、その基準値と表すべき数量がイコールであるということを表す。すなわち基準値に対する100%の数量的割合を表すのが全称数量詞である。つまり、量の副詞と全称数量詞の関係性は７．１．３で見た量的程度副詞(大)と概略副詞の関係性とパラレルな対応をしているということである。量の副詞は何の前提もなく(30)のような発話をおこなうことが可能だが、全称数量詞は概略副詞と同様に、何の前提もなしに(31)のような発話をすることが許されない。

(30)　昨日ハ、酒ヲタクサン飲ンジャッタ。

(31) ?昨日ハ、酒ヲゼンブ飲ンジャッタ。

(32)はここまで論じた量の副詞と全称数量詞の特徴を表にしたものである。

(32)

	限定方式	みとめ方	聞き手
量の副詞	多寡	肯定	○
全称数量詞	割合	肯定・否定	○

７．１．５　概略副詞と全称数量詞

次に概略副詞と全称数量詞の関係性である。両者の語群を確認しておく。

(33)　オオカタ、オオヨソ、ダイタイ、ホトンド　　【概略副詞】

(34)　スベテ、ゼンイン、ゼンブ、ミンナ　　【全称数量詞】

限定の方式としては両者とも全体数量を基準値として、表すべき数量がその基準値からどれほど近づいているかを割合的に限定するものである。

(35)　水ヲオオカタ飲ンダ。

(36)　水ヲスベテ飲ンダ。

(35)(36)のような発話が成立するためには、限定すべき「水」の全体数量が設定されていなければならない。そうでないと、どういった全体量に対する「オオカタ」なのか、「スベテ」なのかが測定できず、文が成立しない。

両者の働きが異なるのは、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との共起可否の部分である。(37)のように概略副詞は共起しないが、(38)のように全称数量詞は共起する。

(37) *水ヲオオカタ飲ンデクダサイ。

(38) 水ヲスベテ飲ンデクダサイ。

この関係性は、量的程度副詞(大)と量の副詞の関係性と同じである。概略副詞は表す数量が主観的なために共起が難しいが、全称数量詞は表す数量が客観的な性質を持つために共起が可能になる。

(39)を見れば両者の働きの異同がよく分かる。

(39)

	限定方式	みとめ方	聞き手
概略副詞	割合	肯定	×
全称数量詞	割合	肯定・否定	○

７．１．６　量的程度副詞(小)

ここまでそれぞれの語群の対応関係を述べてきたが、量的程度副詞(小)については触れなかった。そこでこの語群の特徴についてまとめてみると、(40)のようになる。

(40)

	限定方式	みとめ方	聞き手
量的程度副詞(小)	多寡	肯定	○

(40)はこれまであげたものの中で言うと量の副詞の特徴とまったく同じということになる。つまり、量的程度副詞(小)は程度限定機能を持つという点で量の副詞とは一線を画すものの、その数量限定機能にだけ目を向けると量の副詞と酷似した性格を有するということである。

これまで第３章から第６章における語群ごとの各論で論じたように、同じ語群に属する語であっても、それらの語の性質はまったく同一ではない。それぞれの語群の大まかな共通的性質については述べることができるけれども、それはあくまでも緩やかな最大公約数的な共通点であって、一語一語に関しては違いがある。

そのような観点から考えると、量的程度副詞(小)は程度限定機能を有するという点で量的程度副詞(大)と接するが、数量限定機能の似通いという点では量の副詞と接している。つまり量的程度副詞(小)は、量的程度副詞(大)と量の副詞の中間に位置するものと

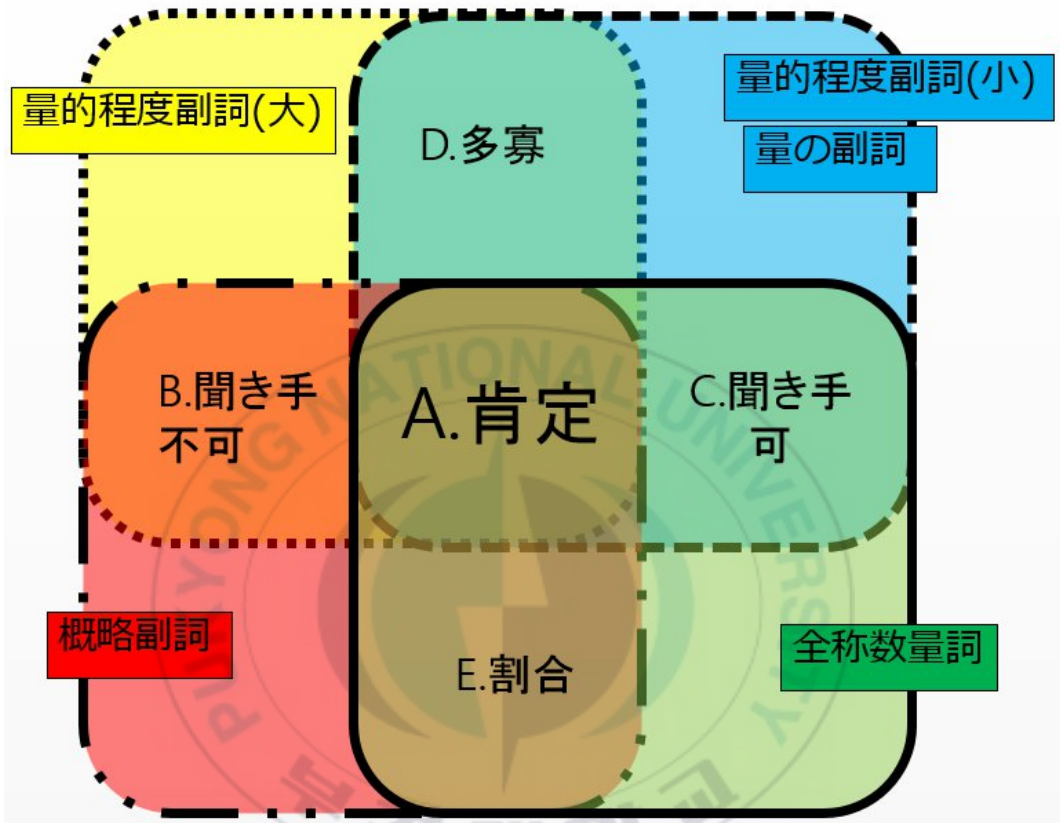
して捉えることができる。

７．１．７　全体像

ここまでは二つの語群を比べつつその特徴の違いを見てきたが、数量を限定する副詞の機能的棲み分けを俯瞰的な視点から考えてみよう。まず、否定文脈でのみ働く否定程度副詞を別とし、肯定文脈で働く副詞の機能的棲み分けは視覚的に考えると、次頁(41)のような図と表で表現されうる。

PUKYONG NATIONAL UNIVERSITY 부경대학교

(41)



	A 肯定	B 聞き手 不可	C 聞き手 可	D 多寡	E 割合
量的程度副詞	●	●		●	
量の副詞 量的程度副詞(小)	●		●	●	
概略副詞	●	●	●		●
全称数量詞	●				●

(41)は肯定文脈で数量限定を行なう副詞の棲み分けの様子を図、表にしたものである。まず語群としては４つの語群に分かれる。量の副詞と量的程度副詞(小)は、ここまでの議論で同じような働きを持つことがわかったため、二つの語群は同じ働きを持つものとしてここに記した。全称数量詞も副詞とは言い難いが副詞的用法を持つものとしてこれに含める。

まず、「A. 肯定」という箇所である。ここは４つの語群がすべて重なり合っている。(41)の図は肯定文脈で働く副詞を図にしたものであるため、これは当然のことである。全称数量詞は否定文脈で使われる場合もあるが、肯定文脈での用法があることに変わりはない。

次に「B. 聞き手　不可」という箇所である。聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式では用いられないことを表している。図(41)では量的程度副詞(大)と概略副詞が重なりを見せており、両語群がこの観点において同じふるまいをすることを示している。

反対に「C. 聞き手　可」という箇所である。これは聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式でも用いられることを表している。量の副詞・量的程度副詞と全称数量詞が機能的に重なり合っていることを示している。

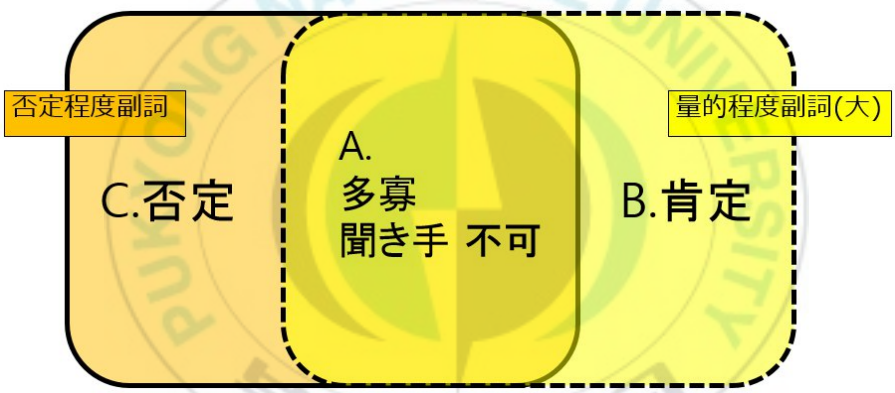
「D. 多寡」は表現性として「数量の多寡」を表すことを示している。この領域は量的程度副詞(大)と量の副詞・量的程度副詞(小)が重なっている。

「E. 割合」は表現性として「数量の割合」を表すことを示している。この領域は概略副詞と全称数量詞が重なっており、同じ表現性を有することを示している。

このように肯定文脈で働く数量限定をおこなう副詞は、「みとめ方」「表現性」「聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現との共起可否」という観点を軸として、機能的な棲み分けを行っていることがわかる。

また否定文脈のみで働く否定程度副詞は図にすると、(42)のように量的程度副詞(大)と関係性を有している。これは７．１．１で述べたことでもある。

(42)



「Ａ．多寡／聞き手　不可」という領域では量的程度副詞(大)と否定程度副詞が共に数量の多寡を表す表現性を有し、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現との共起ができないことを表している。しかしそれぞれが働くのは肯定文脈、否定文脈であり、その違いだけがこの二つの語群の差異である。

以上、数量を限定する副詞がどのような機能的棲み分けを果たしているか、第３章から第６章までの各論での議論を元に論じた。もちろん各語群の一語一語を見るとその働

きは一様ではない。しかし大きな枠組みではこのような機能的棲み分けがなされていると見ることができる。

７．２　数量を限定する副詞の名詞性

７．１ではこれまで論じてきた各語群がどのような機能的な棲み分けを行なっているかを考えた。結論から言うと、こういった機能的棲み分けは各副詞の名詞性の高低に根拠を持つものであるのだが、ここではその理路について述べる。

７．２．１　名詞性の高低

第３章から第６章の各論では各副詞の名詞性の高低についても観察してきた。それをまとめたものが(43)である。

(43)

語群	否定程度副詞						量的程度副詞(大)				概略副詞				量的程度副詞(小)		量の副詞				全称数量詞			
語	スコシモ	ゼンゼン	チットモ	アマリ	ソレホド	タイシテ	ズイブン	ダイブ	カナリ	ソウトウ	オオカタ	オオヨソ	ダイタイ	ホトンド	スコシ	チョット	ドッサリ	イッパイ	タクサン	タップリ	スベテ	ゼンイン	ゼンブ	ミンナ
被修飾	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
「ハ」の後接	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○
「ノ」の後接	×	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(43)を見ると、「ドッサリ」が一つ例外となるものの、左から右に連なるにかけて名詞性が高くなっているのがわかる―「ドッサリ」がなぜ例外となるかは後ほど論じる―。

この名詞性の高低を便宜上次のように分けておく。否定程度副詞と量的程度副詞(大)が名詞性弱、概略副詞が名詞性中、量的程度副詞(小)と量の副詞、全称数量詞が名詞性高である。図にすると(44)のようになる。

(44)

７．２．２　名詞性と副詞性

名詞性の高低に違いがあるということはどのような意味を持つのであろうか。

尾谷(2002)は数量詞が助詞を介さず副詞的に用いられることを指摘した上で、数量詞は基本的には名詞に区分されるが「用いられる環境によって名詞にも副詞にもなる」(p103)と論じている。(45)が名詞的に用いられている例、(46)が副詞的に使われている例である。

(45)　100ccの水ヲ飲ンダ　【名詞的用法】

(46)　水ヲ100cc飲ンダ　【副詞的用法】

続いて、「どれもが全て均等な副詞性を有しているわけではなく、おそらくは名詞性が高い数量詞と副詞性の高い数量詞がグレイディエンスを為しているものと思われる。名詞性の高いものとしては、名詞で表現される個体や物体の存在量に関する＜個体数＞や＜重量＞であろう。一方、副詞性が高いものは、行為や動作を描写するための＜時間＞や＜距離＞などが考えられる」(p103)とし、(47)のような図を提出している[24]。

(47)

[24] (47)は尾谷(2002)が示した図とは左右を反対にしているが、表す内容に変わりはない。

つまり名詞的にも副詞的にも用いられる数量詞であるが、各々の数量詞がどのような尺度を限定するかによって「名詞らしい数量詞」であるか、「副詞らしい数量詞」であるかといった偏りが生じるということである。

ここまでの尾谷(2002)の話はそっくりそのまま数量限定を行なう副詞にも適用できる。数量限定を行なう副詞も「ハ」や「ノ」の後接を許すものがあり、これはつまり「名詞らしい副詞」に偏るものもあるということである。数量詞が「名詞を基本とし副詞的用法を有するもの」と位置付けることができることと同じで、副詞も「副詞を基本とし名詞的用法を有するもの」もあると考えることができる。

そうすると、名詞性低に属する否定程度副詞と量的程度副詞(大)は「副詞らしい副詞」であり、名詞性高に属する量的程度副詞(小)、量の副詞は「名詞らしい副詞」であると言えよう。全称数量詞はそもそも名詞であるため、「副詞らしい名詞」と言える。

７．２．３　名詞性の高低による説明

この名詞性の高低という概念を用いると、数量を限定する副詞の全体的な構造を簡単に説明することができる。

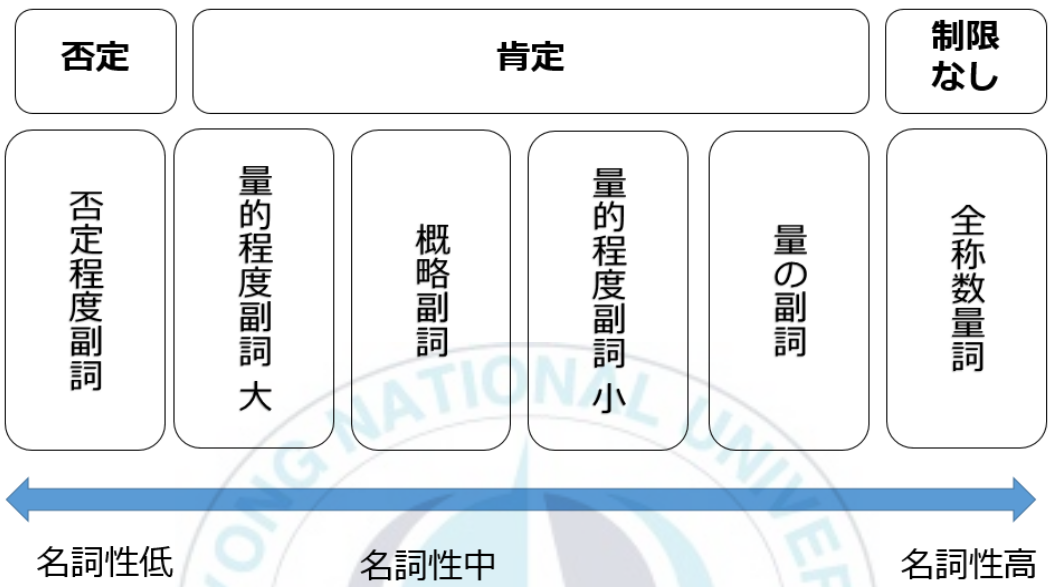
例えば、機能的棲み分けの軸の一つとなった、聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との共起の可否であるが、これは名詞性が高いもの―「全称数量詞」「量の副詞」「量的程度副詞(小)」―だけ共起が可能である。

(48)

聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現では、話し手と聞き手の間で実現すべき数量についての合意が得られるだけの客観性が語に備わっている場合にだけ共起が可能である。名詞性が高いということはその実質的概念性が高いということでもあるため、この名詞性という概念からもこの表現形式との共起の可否を説明することができる。

また、肯否のみとめ方についても同じである。

(49)



(49)は名詞性の高低と各副詞が肯定、否定どちらの文脈で使われるかの関係を図にしたものである。否定程度副詞は否定文脈で働き、量的程度副詞、概略副詞、量の副詞は肯定文脈でのみ働く。全称数量詞は特に肯定否定の制限がない。

否定文脈で働く場合、肯定文脈で働く場合、どちらの場合も一方のみとめ方のみを許容するため、みとめ方の陳述的制限があることになる。しかし否定表現と肯定表現を同一の同レベルの陳述性と設定することはできない。否定表現と共起するという陳述性はそういうカテゴリーが陳述副詞にも存在するように有標の陳述性である。肯定表現と共起するということは無標の陳述性のため、特に言及されることはない。そのため陳述的制限という点から言うと、否定程度副詞の陳述的制限がより強いと言える。

そうすると、この陳述的な制限の強弱も(49)で表したように名詞性の高低により説明することが可能である。全称数量詞はそもそも名詞であるため、肯否のみとめ方による制限はないということも説明できる。

また、この名詞性の高低の並びを伝統的な副詞分類に照らし合わせると、(50)のように数量を限定する副詞がこの配列のままきれいに三つに分かれることが分かる。

(50)

概略副詞は情態副詞とも言えるし、広く見れば程度副詞とも言えるが、どちらにせよ程度副詞に隣接する成分であることに変わりはない。

最も副詞らしいのは強い陳述的制限を持つ陳述副詞で、最も名詞らしいのは情態副詞

である。そしてその中間に程度副詞が位置する。これは工藤浩(1983)で論じられたことと同じ内容である。「いわゆる情態副詞(様子や量)がことがら的側面にかたより、いわゆる陳述副詞(叙法や評価)が陳述的側面にかたよる中にあって、程度副詞は、陳述的に肯定・平叙の叙法と関わって評価性をもちつつ、ことがら的には形容詞と組み合わさって程度限定性をもつ、という二重性格のものとして位置づけられる」(p197)。

工藤浩(1983)は程度副詞を陳述副詞的性格と情態副詞的性格を併せ持つものだと位置づけたわけだが、本研究が示した結果は、その程度副詞の二重性格性を支持したものであると言え、更にはこの三つの副詞の関係性を貫くものとしては名詞的性質の強弱―副詞的性質の強弱と言ってもよいが―があるということを提示したと言える。

７．２．４　「ドッサリ」の解釈

ここまで見てきたように、数量を限定する副詞は名詞性の高低という要素からその構造を説明できるということがわかった。しかし、７．２．１でも見たように「ドッサリ」だけが、この名詞性の高低の流れから外れてしまうことになる。だが、これはこのように理解できると思われる。

「ドッサリ」について４．１．２．２において、このように述べた。「ある特定の名詞の数量を表さない場合―つまり主体や対象の数量を限定しない場合―に用いられると、その動きの数量的側面を限定するのではなくて、動きの実現のされ方を限定する方に傾くのではないかと考えられる。それはすなわち典型的な情態副詞への近づき、とでも言え

るだろう」

つまり、「ドッサリ」は数量を表す機能を持つが、その方向性として「動きの実現のされ方を限定する方」、すなわち「様態」を限定する方に傾いていると言える。そして先ほど提示した尾谷(2002)の(47)の図を見ると、「副詞らしさ」を表すものとしては＜程度＞的尺度を限定することとともに＜様態＞的尺度を限定することが計上されている。

つまり、「ドッサリ」は「イッパイ」や「タクサン」よりも副詞的性質が強いと考えられ、そのため潜在的な名詞性においてもこれらとはふるまいを異にするのだと考えられる。

７．３　おわりに

以上、ここまで数量を限定する機能をもつ副詞について論じてきた。

本研究の結論としては、具体的に言うと(51)(52)のようになる。

(51)　数量を限定する副詞は「肯否のみとめ方」「表現性」「聞き手に何らかの行為の実現を働きかける表現形式との共起の可否」という三つの観点から、その機能的棲み分けを認めることができる。

(52)　そうした数量を限定する副詞の機能的な棲み分けは、各副詞の名詞性の高低に根拠を持つものであり、その名詞性という観点から体系的な説明が可能である。

研究対象とした語、一語一語については論考の荒さは否めないが、全体としてこのような機能的棲み分けや体系を指摘できたことに関しては一定の成果が認められると考える。

「品詞のはきだめ」と副詞が揶揄されてきた時代は変わりつつある。本研究がその変化の一助とでもなれば、それは非常に喜ばしいことである。

■参考文献

石神輝雄(1981)「比較表現から程度性副詞へ」『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』　明治書院

井本亮(1999)「「ほど」構文の解釈と主文の有界性について―述語動詞句の動詞分類を中心に―」『筑波日本語研究』４　筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室

―――(2002)「副詞的修飾関係の概念規定」『筑波日本語研究』７　筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室

―――(2003)「意味的修飾に関する覚書」『筑波日本語研究』８　筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室

―――(2004)「誇張表現としてのホド構文」『日本語と日本文学』39　筑波大学国語国文学会

大倉美和子(1985)「『ほとんど』の副詞用法」『大阪外国語大学学報』70-1(言語編)　大阪外国語大学

宇都宮裕章(1995)「日本語数量詞体系の一考察」『日本語教育』87　日本語教育学会

奥津敬一郎(1980)「「ホド」―程度の形式副詞―」『日本語教育』41　日本語教育学会

尾谷昌則(2002)「Quantifier Floating in Japanese: From A Viewpoint of Active-Zone/Profile Discrepancy」『日本認知言語学会論文集』２　日本認知言語学会

影山太郎(1993)『文法と語形成』　ひつじ書房

加藤重弘(1997)「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』

26　富山大学人文学部

――――(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』　ひつじ書房

川端元子(2000)「聞き手への行為要求表現と程度副詞―共起制限理由の再検討―」『名古屋大学国語国文学』86　名古屋大学国語国文学会

――――(2002)「程度副詞相当句(節)「Ｐほど」について」『日本語教育』114　日本語教育学会

――――(2012)「程度副詞を分類する視点の考察」『愛知工業大学研究報告』47　愛知工業大学

北原博雄(1994)「数量詞の連用修飾機能--数量詞と先行詞との関係」『文学研究』137　日本文学研究会

――――(1996)「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」『国語学』186　国語学会

――――(2013)「量修飾の可能性と、被修飾句のスケール構造の違いに基づいた、現代日本語の程度副詞の分類」『国語学研究』52　「国語学研究」刊行会

工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」『副用語の研究』　明治書院

―――(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法３　モダリティ』　岩波書店

工藤真由美(2000)「否定の表現」『日本語の文法２　時・否定と取り立て』　岩波書店

小松光三(1970)「修飾と限定」『文学史研究』11　大阪市立大学国語国文学研究室

佐久間司郎(2012)「程度副詞の数量限定について」『日語日文学』55　大韓日語日文学会

――――――(2013a)「否定文脈において程度限定をおこなう副詞について　―程度副詞との比較から」『日語日文学』57　大韓日語日文学会

――――――(2013b)「程度副詞の数量限定の可否について　―純粋程度副詞と量的程度副詞の比較より」『日語日文学』59　大韓日語日文学会

――――――(2013c)「概略副詞の数量限定について」『東北亜文化研究』　東北アジア文化学会

――――――(2014)「程度副詞の持つ数量限定機能の解釈について」『日本近代学研究』韓国日本近代学会

笹本明子(2004)「「程度副詞＋ノ＋N」における程度副詞の意味構造」『奈良教育大学国文』27　奈良教育大学国文学会

佐野由紀子(1997)「程度副詞の名詞修飾について」『大阪大学日本学報』16　大阪大学

――――――(2006)「動きに関わる量について―量的程度副詞と動詞との共起関係から―」『高知大国文』37　高知大学国語国文学会

――――――(2008)「程度差」「量差」の位置づけ--程度副詞の体系についての一考察」『高知大国文』39　高知大学国語国文学会

田和真紀子(2011)「程度副詞の評価性をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要』61　宇都宮大学教育学部

丹保健一(1981)「程度副詞と文末表現―ひじょうにを中心に」『金沢大学語学・文学研究』11　金沢大学教育学部国語国文学会

寺村秀雄(1968)「日本語名詞の下位分類」『寺村秀雄論文集Ⅰ―日本語文法編―』くろ

しお出版

――――(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』　くろしお出版

中山恵利子(1996)「程度副詞はことがら成分か 」『阪南論集，人文・自然科学編』31(４)　阪南大学学会

鳴海伸一(2013a)「副詞における程度的意味発生の過程の類型」『国立国語研究所論集』６　国立国語研究所

――――(2013b)「程度的意味・評価的意味の発生―漢語「随分」の受容と変容を例として―」『日本語の研究』８－１　日本語学会

仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』　ひつじ書房

――――(2002)『副詞的表現の諸相』　くろしお出版

服部匡(1993)「副詞「あまり(あんまり)」について―弱否定および過度を表す用法の分析―」　『同志社女子大学学術研究年報』44―Ⅳ　同志社女子大学

花井裕(1980)「概略表現の程度副詞―「ほとんど」などについて―」『日本語教育』42　日本語教育学会

林奈緒子(1997)「程度副詞と命令のモダリティ」『日本語と日本文学』26　筑波大学日本語日本文学会

飛田良文・浅田秀子(2004)『現代副詞用法辞典』　東京堂出版

三宅節子(2003)「程度小を表す副詞の一考察―「すこし／ちょっと」を対象に」　『日本語日本文化』29　大阪外国語大学研究留学生別科

宮島達夫(1983)「情態副詞と陳述」『副用語の研究』明治書院

森田良行(2002)『日本語文法の発想』ひつじ書房

森山卓郎(1985)「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20　京都教育大学国文学会

――――(2001)「近似値表示の連体詞と副詞―概数規定類と概略副詞類―」『国語学研究』40　東北大学文学部国語学研究刊行会

安井稔(1983)「修飾ということ」『日本語学』２－10　明治書院

山田孝雄(1908)『日本文法論』　宝文館

渡辺実(1990)「程度副詞の体系」『上智大学国文学論究』23　上智大学

※用例抽出

国立国語研究所「中納言 現代日本語書き言葉均衡コーパス」

https://chunagon.ninjal.ac.jp/

謝辞

本研究をまとめるにあたり、多くの方々の御世話になりました。ここに深く感謝の意を表します。

まずは指導教授である釜慶大学校・孫東周教授に感謝申し上げます。先生には研究活動全般にわたり格別なる御指導と御高配を賜りました。

学位論文審査において貴重な御教示を賜りました釜慶大学校・張相彦教授、崔建植教授、仁済大学校・全成燁教授、新羅大学校・權奇洙教授に感謝申し上げます。先生方のご指摘やご意見により、自分では気づかなかった部分に検討を加えることができました。

また大学院の授業において様々なヒントを提示してくださった釜慶大学校・朴榮淑教授、佐藤紀子教授、金祥圭教授に感謝申し上げます。

現勤務大学である東明大学校の先生方にも様々な面でサポート・配慮をしていただきました。特に、日本学科・甘榮熙教授、成海俊教授、鄭泰晙教授、韓鐸哲教授に感謝申し上げます。

最後に、修士課程時の指導教授である済州大学校・金勝漢先生に感謝申し上げます。当時、懇切丁寧に指導して頂いたことは忘れられません。研究テーマ選定にあたって的確なアドバイスをしてくださり、その結果博士課程でも引き続き関連領域の研究を推し進めることができました。

その他、私に関係するすべての方、関係しないすべての方、森羅万象に深い感謝を捧げます。